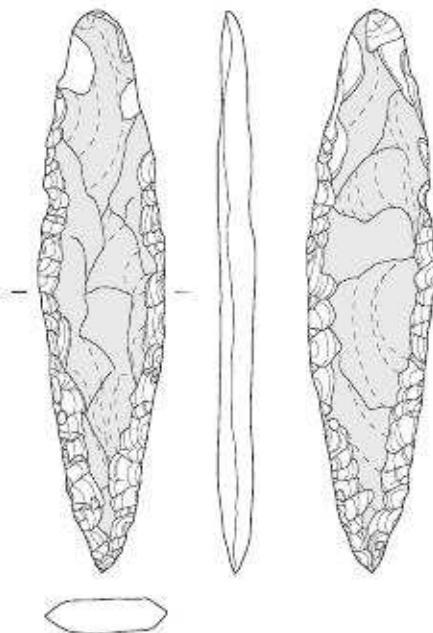


茨城県石岡市

新池台遺跡

— 特別養護老人ホーム建設に伴う発掘調査 —



2010

社会福祉法人 地域福祉会 設立準備室
石岡市教 育 委 員 会
有 限 会 社 勾 玉 工 房 Mogi



SK186 遺物出土狀況



SK400 遺物出土狀況

序

石岡市は、茨城県のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市です。古代には常陸国府・国分寺が置かれ、常陸国の政治・経済・文化の中心地として繁栄を続けてきました。

「新池台遺跡」は、国府・国分寺よりも昔、縄文時代を中心とする集落遺跡です。昭和56年から57年にかけて、「フローラルシティ南台」建設に伴い発掘調査が実施されていましたが、それから約30年の時を経た本年、特別養護老人ホーム建設に伴い、再び発掘調査が実施される運びとなりました。

今回の調査では、今から5000年以上もの昔にあたる、縄文時代前期の堅穴住居跡が51軒発掘されました。前回の調査と合わせると、100軒近くもの住居が存在したことになり、茨城県屈指の縄文時代前期の大集落であったことが判明いたしました。

このような成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力を賜りました事業者の社会福祉法人 地域福祉会 設立準備室をはじめ、関係各位のみなさまのおかげであり、心から感謝を申し上げます。

石岡市としても、今回の豊富な成果をもとに、より一層、文化財の保護・保存、そして活用に取り組んでいく所存でありますので、引き続いでのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成22年12月

石岡市教育委員会

教育長 石橋 凱

例 言

1. 本書は、石岡市に所在する新池台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は特別養護老人ホーム建築に伴い、社会福祉法人地域福祉会設立準備室の委託のもと、有限会社勾玉工房 Mogi が行った。
3. 調査内容及び調査範囲は下記のとおりである。

所在地 茨城県石岡市東石岡三丁目 3810 番地 26

調査面積 約 1,850 m²

調査期間 発掘調査 平成 22 年 7 月 26 日～平成 22 年 10 月 15 日

整理調査 平成 22 年 8 月 16 日～平成 22 年 12 月 13 日

事務局・調査指導

石岡市教育委員会教育長 石橋 凱

石岡市教育委員会教育部長 士師 照夫

石岡市教育委員会参事 松崎 守男

石岡市教育委員会生涯学習課長 菊地 宏則

石岡市教育委員会生涯学習課長補佐 吉水 法雄

石岡市教育委員会生涯学習課係長 安藤 敏孝

石岡市教育委員会生涯学習課係長 箕輪 健一

石岡市教育委員会生涯学習課主幹 曽根 俊雄

石岡市教育委員会生涯学習課主幹 小杉山 大輔

調査担当者 長谷川秀久（有限会社 勾玉工房 Mogi）

調査補助 石山啓 塩澤祐介（有限会社 勾玉工房 Mogi）

調査参加者 田中正治 根本 澤 小林卓生 米山秀昭 牧田保身 持田 清 郡司 勇

磯山孝一 高野美智子 河野紅仁子 飯塚秀子 貝塚奈美 中島トミ子 小野 豊

露久保三郎 沼田久男 鈴木利勝 滝田一徳 酒井 洋 大木幸子 佐賀 実 友部政夫

森永典昭 岡田 卷 柿崎 昇 小島廣史 斎藤京子 箕輪 隆 小島裕一 塚本祐司

鈴木忠雄 一瀬英子 大賀琢磨（順不同）

4. 本書は曾根俊雄（石岡市教育委員会）、長谷川秀久・石山啓・田中一徳・大賀健・大賀さつき（有限会社 勾玉工房 Mogi）が分担執筆した。編集は曾根俊雄の助言・指導のもと、長谷川秀久・田中一徳・石山啓が行った。

5. 遺構の写真撮影は長谷川秀久・石山啓・塩澤祐介が、遺物の写真撮影は田中一徳・石山啓が行った。

6. 原稿校正是田中曉穂・田中一徳が行った。

7. 遺物の基礎整理作業は須賀澤が、遺物実測及びその他の整理作業は、大賀さつき・根本時子・石橋明子・阿天坊弥生・饗庭紀子・小川美由紀・本野澄子・大賀琢磨、デジタル編集は、川口和之・新屋隼人・岩崎美奈子・橋邊明子・小川美由紀が行った。

8. 記録類及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。

9. 発掘から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関よりご教示・ご協力を賜った。記して謝意を表す次第です。

茨城県教育庁文化課・医療法人幕内会山王台病院・株式会社関商事〔関正夫〕・瓦吹堅・角張淳一・久保田哲夫・斎藤弘道・篠原正・桜井 栄・佐長正規・ローソン石岡東石岡2丁目店・有限会社カワヒロ産業（敬称略・五十音順）

10. 分担執筆は以下の通り。

第1章第1節 曾根俊雄 第1章第2節・第2章第1・2節・第6章 石山啓 第3章 長谷川秀久 第4章第1・3節・第5章第4節 田中一徳 第5章第1・2・3節は大賀健・大賀さつき、第5章第5・6節の遺構については石山、遺物については大賀健が執筆した。

11. 遺跡の航空写真は株式会社 スカイサーベイに依頼した。

凡 例

1. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を使用している。

2. 本書中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年度版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。

3. 標高は東京湾の平均海拔を示している。

4. 掲載した図面は以下の縮尺で掲載した。

遺構図は、竪穴住居跡（建物跡）・土坑1/80、炉1/40。出土遺物は1/3とした。但し、縄文草創期の土器片・剥片石器は1/2、その他磨石等の石器は1/4である。遺物写真についても基本的に同縮尺とした。尚、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその倍率を表した。

5. 掲載図中のスクリーントーンは以下に示すとおりである。

遺構  火床面

遺物  黒色処理  赤彩  織維土器  石器自然面

6. 図中に示した「K」は攪乱、「S」は石を意味する。

7. 本遺跡の略称はSIK-2010とした。遺物の注記もこれにしたがっている。

本文目次

序	第3節 昭和56年度本調査	9
例言	第5章 検出された遺構と遺物	
凡例	第1節 出土遺物の概要	10
目次	第2節 遺構外出土土器の分類	10
第1章 調査に至る経緯と調査の経過	第3節 遺構外出土石器	20
第1節 調査に至る経緯	第4節 遺構の概要	22
第2節 調査の経過	第5節 東区の遺構と遺物	
第1項 発掘調査	第1項 住居跡	23
第2項 整理作業	第2項 土坑	54
第2章 遺跡の位置と環境	第6節 西区の遺構と遺物	
第1節 地理的環境	第1項 住居跡	87
第2節 歴史的環境	第2項 土坑	87
第3章 調査の方法と標準堆積土層	第6章まとめ	92
第1節 調査の方法	参考引用文献	
第2節 標準堆積土層	写真図版	
第4章 試掘調査	抄録	
第1節 試掘調査		
第2節 トレンチ出土遺物		

挿図目次

第1図 遺跡周辺地図 (S=1/50000)	3
第2図 迅速図 (S=1/10000)	3
第3図 標準堆積土層	4
第4-1図 新池台遺跡調査地点位置図	5
第4-2図 トレンチ配置と本調査範囲全体図	5
第5図 トレンチ出土遺物 (1) (石器)	6
第6図 トレンチ出土遺物 (2) (土器)	7
第7図 遺構外出土遺物 (1)	11
第8図 遺構外出土遺物 (2)	14
第9図 遺構外出土遺物 (3)	16
第10図 遺構外出土遺物 (4)	17
第11図 遺構外出土遺物 (5)	18
第12図 遺構外出土遺物 (6)	19
第13図 遺構外出土石器	21
第14図 西区全体図	22
第15図 東区全体図	折り図1
第16図 SI01～03・13～15・34・41 (1)	23
第17図 SI01～03・13～15・34・41 (2)	24
第18図 SI01出土遺物	25
第19図 SI02出土遺物	25
第20図 SI03出土遺物	25
第21図 SI13出土遺物	26
第22図 SI41出土遺物	26
第23図 SI04・05・16・48・49	27
第24図 SI04出土遺物	29
第25図 SI05出土遺物	29
第26図 SI16出土遺物	29
第27図 SI15出土遺物	30
第28図 SI06	31
第29図 SI06出土遺物	31
第30図 SI07・20・21	32
第31図 SI20出土遺物	33
第32図 SI21出土遺物	33
第33図 SI07出土遺物	34
第34図 SI08・11・19・22	35
第35図 SI08出土遺物	36
第36図 SI11出土遺物	36
第37図 SI19出土遺物	37
第38図 SI09・10・18	37
第39図 SI09出土遺物	38

挿図目次

第 40 図 SI10 出土遺物	39	第 70 図 SK05・10・23・28・29・31・32・35・36・ 39・44・47	54
第 41 図 SI18 出土遺物	39	第 71 図 土坑出土遺物 (1)	55
第 42 図 SI12	39	第 72 図 SK53・54・58・60・68～75	58
第 43 図 SI12 出土遺物	39	第 73 図 土坑出土遺物 (2)	59
第 44 図 SI17	40	第 74 図 SK77・79・81～84・86・91・99・109・ 113・120・121	62
第 45 図 SI17 出土遺物	40	第 75 図 土坑出土遺物 (3)	63
第 46 図 SI23～25	40	第 76 図 SK123・124・126・128・139・140・152・ 161～163・186・188	66
第 47 図 SI23 出土遺物	41	第 77 図 土坑出土遺物 (4)	67
第 48 図 SI25 出土遺物	42	第 78 図 SK211・248・249・287・324・288～293・ 399・300・301	70
第 49 図 SI26～29	42	第 79 図 土坑出土遺物 (5)	71
第 50 図 SI26 出土遺物	44	第 80 図 SK303・304・305・405・306・312・339・ 340・320・321・328・337	74
第 51 図 SI27 出土遺物	44	第 81 図 土坑出土遺物 (6)	75
第 52 図 SI28 出土遺物	44	第 82 図 SK345・351・352・353・364・373・378・ 382・383・395・398・399	78
第 53 図 SI29 出土遺物	45	第 83 図 土坑出土遺物 (7)	79
第 54 図 SI30	45	第 84 図 SK400	82
第 55 図 SI30 出土遺物	45	第 85 図 SK400 出土遺物	83
第 56 図 SI31	46	第 86 図 SK406・455・470	84
第 57 図 SI32	46	第 87 図 土坑出土遺物 (8)	85
第 58 図 SI32 出土遺物	47	第 88 図 土坑出土遺物 (9)	86
第 59 図 SI33	47	第 89 図 SI101	87
第 60 図 SI35～40・47 (1)	48	第 90 図 SI102	87
第 61 図 SI35～40・47 (2)	49	第 91 図 SK503	87
第 62 図 SI36 出土遺物	49	第 92 図 黒浜期の住居と墓坑の分布	92
第 63 図 SI38 出土遺物	50		
第 64 図 SI39 出土遺物	50		
第 65 図 SI42～46	51		
第 66 図 SI42 出土遺物	52		
第 67 図 SI43 出土遺物	53		
第 68 図 SI45 出土遺物	53		
第 69 図 SI46 出土遺物	53		

表目次

表 1 周辺の遺跡一覧	3	表 4 土坑計測一覧表 (2)	89
表 2 トレンチ一覧表	8	表 5 土坑計測一覧表 (3)	90
表 3 土坑計測一覧表 (1)	88	表 6 土坑計測一覧表 (4)	91

写真目次

遺構図版 1	新池台遺跡遠景航空写真 新池台遺跡全景写真 南から
遺構図版 2	東区全景 南東から 東区全景 北西から 西区全景 南東から テストピット B 南西から テストピット D 北から テストピット E 南東から SI3 南から SI4 南から

遺構図版 3	S15 南から S16 東から S16 炉 遺物出土状況 南から S16 炉 セクション S17 南東から S17 炉掘り方 セクション 北西から S18 南東から S18 炉 南東から
遺構図版 4	S19 南東から S110 南東から

写 真 目 次

SI11	南から	SK123	南から
SI12	南から	SK124	北から
SI13	南から	遺構図版 13	SK126 北から
SI14	南から		SK139 西から
SI16	南から		SK140 南から
SI17	南から		SK152 南西から
遺構図版 5	SI18 東から		SK186 遺物出土状況 南東から
	SI19 南から		SK211 南から
	SI20 東から		SK287 南西から
	SI21 南から		SK288 南から
	SI22 南から	遺構図版 14	SK289 東から
	SI23 北から		SK290 北から
	SI24 南から		SK291 南から
	SI25 南から		SK292 西から
遺構図版 6	SI26 南から		SK293 西から
	SI27 南から		SK299 遺物出土状況 南から
	SI28 南から		SK301 遺物出土状況 南から
	SI29 南から		SK301 遺物出土状況近景 南から
	SI30 南から	遺構図版 15	SK300 南から
	SI31 南から		SK304 南から
	SI32 南から		SK312 南から
遺構図版 7	SI33 北西から		SK320 南から
	SI34 南から		SK324 北東から
	SI35 南から		SK337 南から
	SI36 南から		SK340 西から
	SI37 南東から		SK352 北から
	SI38 南から	遺構図版 16	SK395 南から
	SI40 南から		SK398 南から
	SI41 南から		SK399 南から
	SI42 北西から		SK400 南から
遺構図版 8	SI39 航空写真全景 南から		SK400 遺物出土状況 北から
	SI43 南から		SK405 南から
	SI44 南から		SK406 南から
	SI45 南から		SK455 南から
	SI46 南から	遺物図版 1	SI01 ~ 04
遺構図版 9	SI47 西から	遺物図版 2	SI05 ~ 07 (1)
	SI48 南から	遺物図版 3	SI07 (2) ~ 11
	SI101 北東から	遺物図版 4	SI12 ~ 13 ~ 15 (1)
	SI102 南東から	遺物図版 5	SI15 (2) ~ 21
	SK23 北から	遺物図版 6	SI23 ~ 25 ~ 28
	SK28 西から	遺物図版 7	SI29 ~ 30 ~ 32 ~ 36 ~ 38 ~ 39 ~ 41 ~ 42
	SK29 西から	遺物図版 8	SI43 ~ 45 ~ 46 ~ SK05 ~ 10 ~ 12 ~ 16 ~ 18
	SK31 北から		20 ~ 22 ~ 23 ~ 28 ~ 30 ~ 32 ~ 35 ~ 37 ~ 39
遺構図版 10	SK32 西から	遺物図版 9	44 ~ 47 ~ 53 ~ 54 ~ 58 ~ 60 ~ 62 ~ 63 ~ 66
	SK35 西から	遺物図版 10	68 ~ 74 ~ 75 ~ 77
	SK36 北から		SK78 ~ 81 ~ 84 ~ 91 ~ 95 ~ 99 ~ 102 ~ 103
	SK39 東から		109 ~ 110 ~ 117 ~ 121 ~ 123 ~ 125 ~ 127
	SK44 北から	遺物図版 11	SK128 ~ 131 ~ 135 ~ 138 ~ 139 ~ 146 ~ 147
	SK47 北から		148 ~ 150 ~ 152 ~ 157 ~ 161 ~ 162 ~ 164
	SK53 北から		166 ~ 186 ~ 188 ~ 202 ~ 208 ~ 216 ~ 238
	SK68 西から		241 ~ 246 ~ 248
遺構図版 11	SK69 西から	遺物図版 12	SK249 ~ 252 ~ 254 ~ 260 ~ 269 ~ 276
	SK70 西から		278 ~ 289 ~ 290 ~ 293 ~ 296 ~ 299
	SK71 南から		301 ~ 303 ~ 305
	SK72 北から	遺物図版 13	SK304 ~ 306 ~ 309 ~ 320 ~ 321
	SK73 北から		324 ~ 328 ~ 337 ~ 339 ~ 340 ~ 345
	SK74 南から	遺物図版 14	SK347 ~ 351 ~ 353 ~ 364 ~ 373 ~ 378
	SK75 南から		380 ~ 382 ~ 383 ~ 385 ~ 387 ~ 398 ~ 400
遺構図版 12	SK75 遺物出土状況 北から		405 ~ 471 ~ 503 ~ 504 ~ 508 ~ 510 ~ 511
	SK77 遺物出土状況 南西から		
	SK79 北東から		
	SK81 南から		
	SK82 南から		
	SK84 遺物出土状況 南から		
	SK86 南から		

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成22年4月8日、社会福祉法人 地域福祉会 設立準備室（以下、事業者）より特別養護老人ホーム建設に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が石岡市教育委員会に提出された。照会地は、周辺の埋蔵文化財包蔵地である新池台遺跡に該当し、また現地踏査の結果、土器が表面採集され、遺跡の存在する可能性が高いことから、試掘調査が必要である旨を平成22年4月14日付で回答した。

試掘調査は、平成22年4月21日～26日、5月17日～19日に実施した。その結果、縄文時代前期の竪穴住居跡2軒や土坑17基が確認された。

その後、事業者が平成22年5月27日付で茨城県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出」を提出し、平成22年6月4日付で茨城県教育委員会から、建物基礎部分及び進入路の一部については工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

これらを受け、市教育委員会と事業者は協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

そこで、「埋蔵文化財発掘調査における民間発掘調査組織導入基準」に基づき選定手続きを行い、有限会社勾玉工房 Mogi に委託し、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

第1項 発掘調査

平成22年

7月20日 調査に先行して、機材を搬入する。山王台病院久保田氏、教育委員会小杉山氏と現地にて調査の打ち合わせを行う。

26日 調査を開始する。重機による表土除去を開始する。

27日 東区北側に遺構の広がりが確認されたため、調査範囲を拡張する。

28日 調査補助員着任。安全柵を設置する。

8月 5日 グリット杭の打設を実施する。

10日 表土除去を終了する。教育委員会曾根氏・小杉山氏立ち会いのもと遺構プランの確認を行う。

12日 東区2・6号住居跡にベルトを設置し、覆土の堆積状況・深度を確認した後、覆土の除去を人力により開始する。土坑は半裁し、土層観察をしたうえで掘り下げる。

19日 テストピットを設置する。

9月 7日 調査範囲南西の土坑群を調査する。186号土坑より石槍1点を検出する。

17日 西区101・102号住居の調査にとりかかる。

10月 1日 大型の方形住居であることが想定された39号住居跡の調査に着手する。

11日 400号土坑を掘削したところ複数の装身具を検出する。微細図を作成し、遺物の収納を行う。

14日 全景写真の撮影を航空撮影で実施する。

15日 教育委員会より調査終了の確認を得る。調査を終了し、機材を撤去する。

第2項 整理作業

8月16日 本日より整理作業を開始する。水洗いが終了した遺物より注記作業に取りかかる。

23日 遺物の分類作業を開始する。

27日 遺物の選別・接合に取りかかる。遺物台帳の作成・遺物原稿の執筆を開始する。

9月 1日 遺物実測、探拓を開始する。並行してデジタルトレースを行う。

10月 18日 遺構図面修正を開始する。並行してデジタルトレース・遺構原稿の執筆を行う。

12月 19日 報告書の編集を完了する。

20日 印刷屋へ入稿する。

24日 初稿原稿の校正を実施する。

30日 報告書刊行。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石岡市は茨城県のほぼ中央に位置し、霞ヶ浦の北端に接する。市域の南東は常総台地上にあり、市街地から霞ヶ浦に向けて突き出した出島台地を特に石岡台地（標高25～26m）と呼ぶ。石岡台地には開析谷が入り込み、開析谷には河川が流れ沖積低地を形成する。沖積低地からは樹枝状に支谷が複雑に伸びるため、石岡台地には舌状を呈した部分が多くみられる。開析谷を流れる河川としては、市域北西の柿岡盆地から市街地の南側を通り、霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川、市街地北側の柏原から市街地内を通り、同様に霞ヶ浦に注ぐ山王川があり、河川両岸の低地は水田として利用されている。

新池台遺跡は石岡市東石岡三丁目地内に所在する。所在地は石岡市街東側の郊外にあたり、石岡駅からは東に約1.3kmの距離を測る。遺跡の北には国道355号線が通り、国道沿いには大型商店が点在し、遺跡の周辺は現在、住宅化している。

本遺跡は石岡台地上の舌状部に立地する。本調査区の標高は約24～26mである。調査以前の状況は、ほぼ平坦な地形であるが、果樹園として利用されていたため、削平されている可能性があり、遺跡の東側に周る谷地も埋め立てが行われ、現状では舌状台地の様相は不明瞭である。本調査に伴う試掘結果と明治期（第2図迅速図）の地形図を参照すると、遺跡に接する東側の谷地にかけての斜面は現状より急であり、池があったことが表現されている。

本遺跡の南西約0.9kmの地点では、山王川が北西から南東に向かってほぼ直線に流れ、その両岸の沖積低地は山王川によって形成されたものである。この地点の沖積低地の標高は5～10mである。本遺跡から霞ヶ浦の最北部の汀線までは直線距離で約3.2kmを測り、同地点で恋瀬川・山王川が合流する。

遺跡の主な時期にあたる縄文時代前期後半は海退が進む時期であり、霞ヶ浦の汀線は現状より台地に近かつたことが推測される。

第2節 歴史的環境

石岡市域には、常陸国分寺・国分尼寺跡が存在し、奈良・平安時代においては国府が置かれていたことは周知のとおりである。現在、市域には旧石器時代から近世に至るまでの約390箇所の遺跡が存在し、山王川流域においては、台地上に遺跡が集中する特徴がある。

以下、新池台遺跡の主な時期である縄文時代前期の遺物・遺構が確認された遺跡を中心に記す。

大谷津対馬塚遺跡（9）・外山遺跡（11）からは縄文時代前期前葉の黒浜期と後葉の浮島・諸磯期の遺物を伴う2時期の住居跡がそれぞれ検出された。このうち外山遺跡では、昭和55年に行われた調査により、全ての住居跡の詳細な時期は判断できないものの、縄文時代の住居が台地上に環状に分布することが確認され、縄文時代前期の缺状耳飾りが出土している。一方で、外城遺跡（3）・六軒遺跡（8）・関戸遺跡（13）ではこれらと同時期の前期前葉から後葉の遺物が出土したが、住居は検出されていない。

兵崎遺跡（4）・石岡田崎遺跡（10）・東田中遺跡（12）では縄文時代前期前葉の遺物が検出され、通安寺遺跡（2）、税所屋敷遺跡（7）・大作台遺跡（14）では前期後葉の遺物が検出された。これらの遺跡のなかで縄文時代前期の住居跡が確認されたものはなく、大谷津対馬塚遺跡・大作台遺跡では、中期・阿玉台期の住居跡が確認されている。

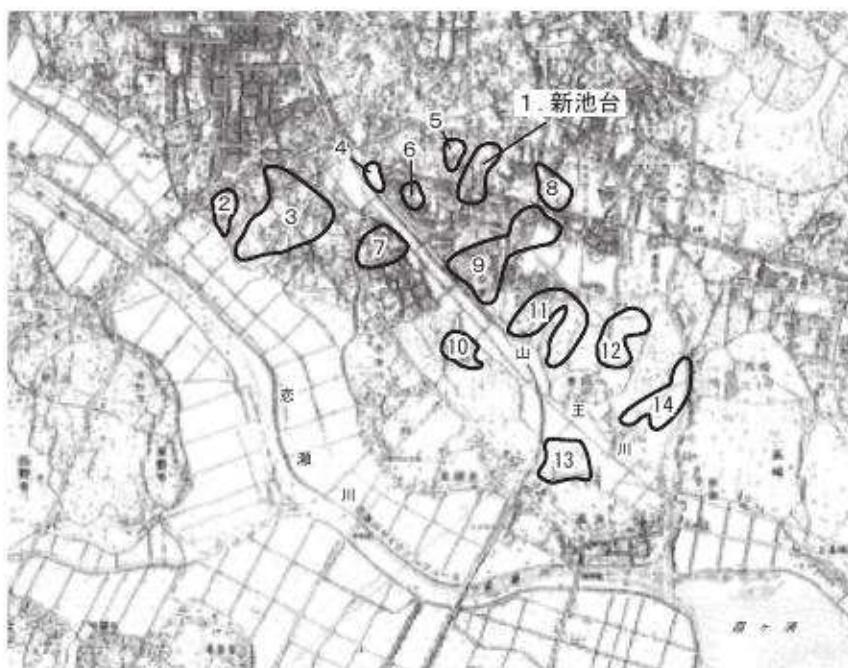


表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名
1	新池台遺跡
2	通安寺遺跡
3	外城遺跡
4	兵崎遺跡
5	駒込遺跡
6	兵崎下遺跡
7	税所屋敷遺跡
8	六軒遺跡
9	大谷津対馬塚遺跡
10	石岡田崎遺跡
11	外山遺跡
12	東田中遺跡
13	関戸遺跡
14	大作台遺跡

第1図 遺跡周辺地図 (S=1/50000)



第2図 迅速図 (S=1/10000)

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査の方法

調査区は市道 A0114 号線に隣接する約 65 m²部を西区、その東側に広がる約 1785 m²部を東区とした。

表土は調査区の試掘結果に基づいて設定後に重機(0.4 m³)により除去した。尚、調査区域の北西側においては、当初設定されていた範囲の外まで遺構の広がりが確認されたために調査区を拡張した。重機による表土除去作業の後、人力により鋤鎌を用い遺構検出作業を行った。確認された遺構は平板により概念図(1/100)を作成し、遺構番号は東区では調査順に住居跡は SI01 号から、土坑は SK01 号から番号を付した。西区については便宜上住居跡が SI101 号から、土坑は SK501 から付す事とした。遺構の種類別表記は記号を用い、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の記号表記に準じた。

グリッドの設定は世界測地系IX系を用い調査区全体に 10 m 方眼となるよう杭を打設した。調査区北西端の杭を X=20800、Y=413300 に設定した。

西区においては、調査区域が矮小であったために、この基準杭から 10 m 方眼のグリッドを設置した後、便宜上さらに 5 m 間隔で杭を打設した。

東区では、西区から継続して東西に西からアルファベットを、南北に北から算用数字を付し 10 m グリッドの北西角の番号を付してグリッド番号とした。調査区全体を網羅するグリッドでは、調査区北西角が A 0 グリッド、南東角が G 8 グリッドとなる。

遺構の精査は土層観察用ベルトを設置し移植鍬を用い掘り下げを行った。

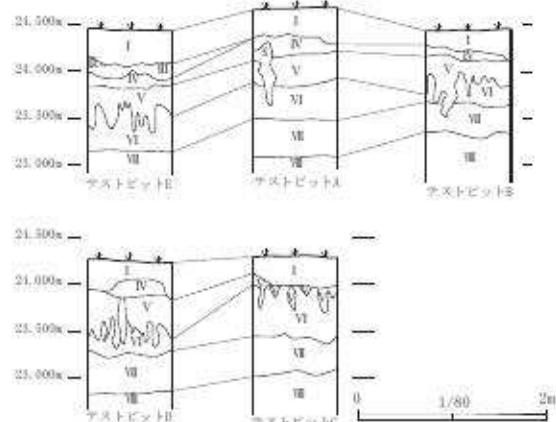
記録は遺構平面図及び全体測量図はトータルステーションにて作成し、状況に応じて平板実測及び、遺り方実測にてこれを補足した。

遺物の出土状況はレベル及び平板を用い 3 次元位置の記録をした後取り上げ、遺物基本台帳に記録した。尚、平面図及び遺物出土状況図・土層断面図の縮尺は 20 分の 1 を基本とし、必要に応じて 10 分の 1 で作成した。

写真による記録は基本写真台帳を作成し、35 mm の白黒及びカラースライド及び 700 万画素のデジタルカメラを用いて撮影した。全景写真及び遠景写真をラジコンヘリコプターにより航空撮影を行い、カラーネガフィルム・6 × 6 版及びデジタルカメラを用いた。

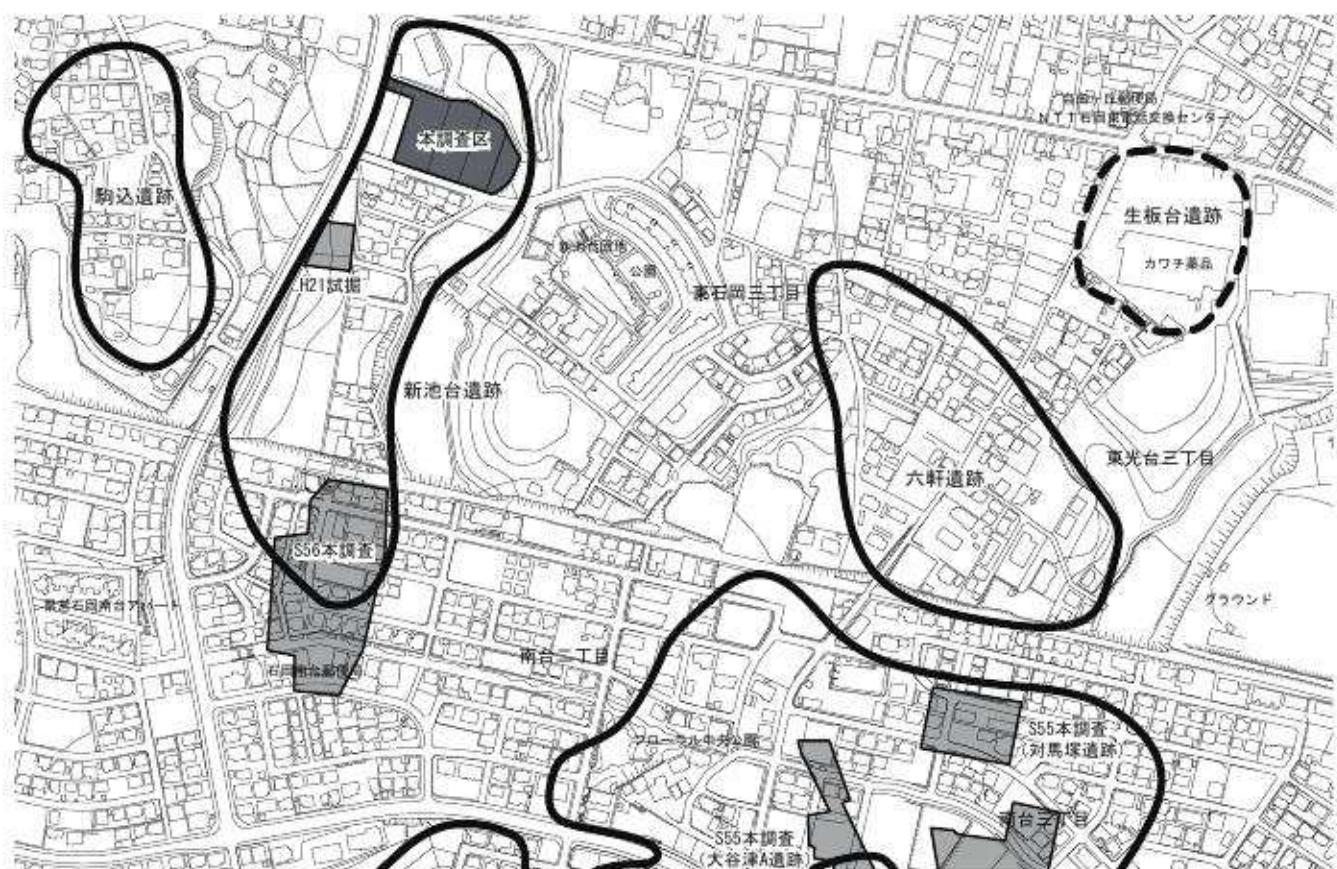
第2節 標準堆積土層

第Ⅰ層は耕作土である。第Ⅱ層は黒褐色・第Ⅲ層は暗褐色の腐食土層であり西区にのみ存在する。第Ⅳ層は褐色土のソフトローム漸移層であり、上面が遺構確認面となる。第Ⅳ層は耕作により削平を受けており調査区西区と東区の北西部分にのみ明瞭に確認される。第Ⅴ層は褐色のソフトローム層。第Ⅵ層は褐色土でハードローム層。第Ⅶ層は第Ⅵ層よりやや明るい褐色土層。黄褐色土ブロック(鹿沼土か)が微量混入する。第Ⅷ層は第Ⅶ層よりやや暗い褐色土層である。第Ⅴ層～第Ⅷ層は立川ローム層である。



第3図 標準堆積土層

- | | | | |
|------|---------|------|--|
| I. | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~10 mm 多量、やや碎まりがある。やや粘性がある。現耕作土。 |
| II. | 30YR2/3 | 黒褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~2 mm 多量、やや碎まりがある。やや粘性がある。腐食土層。 |
| III. | 10YR3/4 | 暗褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~3 mm 多量、やや碎まりがある。やや粘性がある。腐食土層。 |
| IV. | 20YR4/4 | 褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~5 mm 多量、やや碎まりがある。やや粘性がある。ソフトローム層。 |
| V. | 20YR4/6 | 褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~20 mm 多量、碎りがある。やや粘性がある。ソフトローム層。 |
| VI. | 10YR4/6 | 褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~40 mm 多量、碎りが多い。やや粘性がある。ハードローム層。 |
| VI. | 10YR4/6 | 褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~30 mm 多量、黄褐色土ブロック多く 1~5 mm 多量含む。碎りが多い。やや粘性がある。立川ローム層。 |
| VII. | 10YR4/6 | 褐色土 | ローム粒子・ブロック多く 1~10 mm 多量、碎りが多い。やや粘性がある。立川ローム層。 |



第4-1図 新池台遺跡調査地点位置図 S=1/6000



第4-2図 トレンチ配置と本調査範囲全体図

第4章 試掘調査

第1節 試掘調査

開発予定区域が新池台遺跡の範囲内に当たるとともに、現地踏査の結果、土器片が採集されて遺跡の存在する可能性があったため、平成22年4月21～26日（内3日間）と5月17～19日にかけて試掘調査を行った。調査は対象地内に幅2m、長さ8～30mのトレンチ（試掘坑）を任意に29ヵ所設定し、重機にて薄く掘削した。掘削深度は0.4～0.7m（T-24のみ1.3m）でいわゆる関東ローム層まで掘り下げた。

その結果、開発区域の東側と北側には谷が入り込んでおり、東端に近づくにつれ、緩傾斜から崖状の急傾斜に変わってゆく。地山も東ほど低くなり、現地形よりきつい傾斜であることが確認された。この付近では周辺からの流れ込みによると思われる土器の小破片が出土しているが、遺構は検出されていない。おそらく、本来の斜面地への盛土によって、現地形のような緩傾斜になったものと考えられる。

それに対して中央部から西側（T-8～25）では、削平をうけ深度は浅いものの、遺構の底部付近が残存しており、遺物が確認された。検出された遺構は堅穴住居跡2軒（T-10・25）、土坑17基、ピット25基である。出土遺物は縄文土器片や石器類である。

以上の試掘結果から、遺構・遺物が確認されたトレンチを含む中央部から西側の範囲（約1,850m²）が本発掘調査の対象範囲とされた。なお、付近では平成21年度にも試掘調査が行われている。

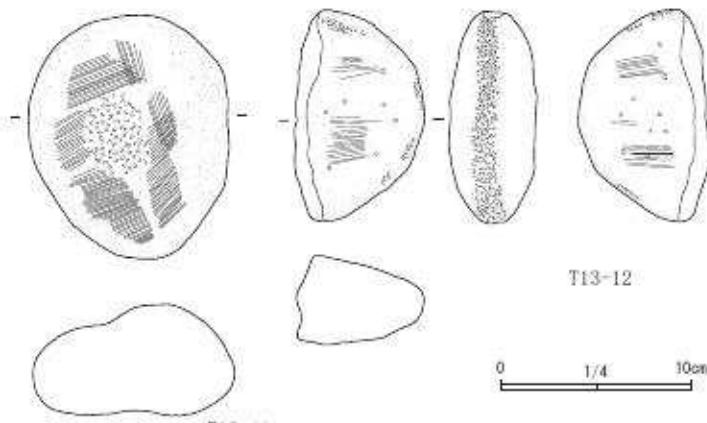
第2節 トレンチ出土遺物（第5・6図）

トレンチ調査で検出された遺物は、以下の表通りである。尚、T-2・7・20・22～24では遺物は検出されていない。各トレンチから出土した遺物は、縄文土器草創期の撚糸文系土器から中期加曾利E式土器並びに古式土師器があるが、縄文前期黒浜式と浮島式がその大半を占めており、古式土師器は1片のみの検出である。

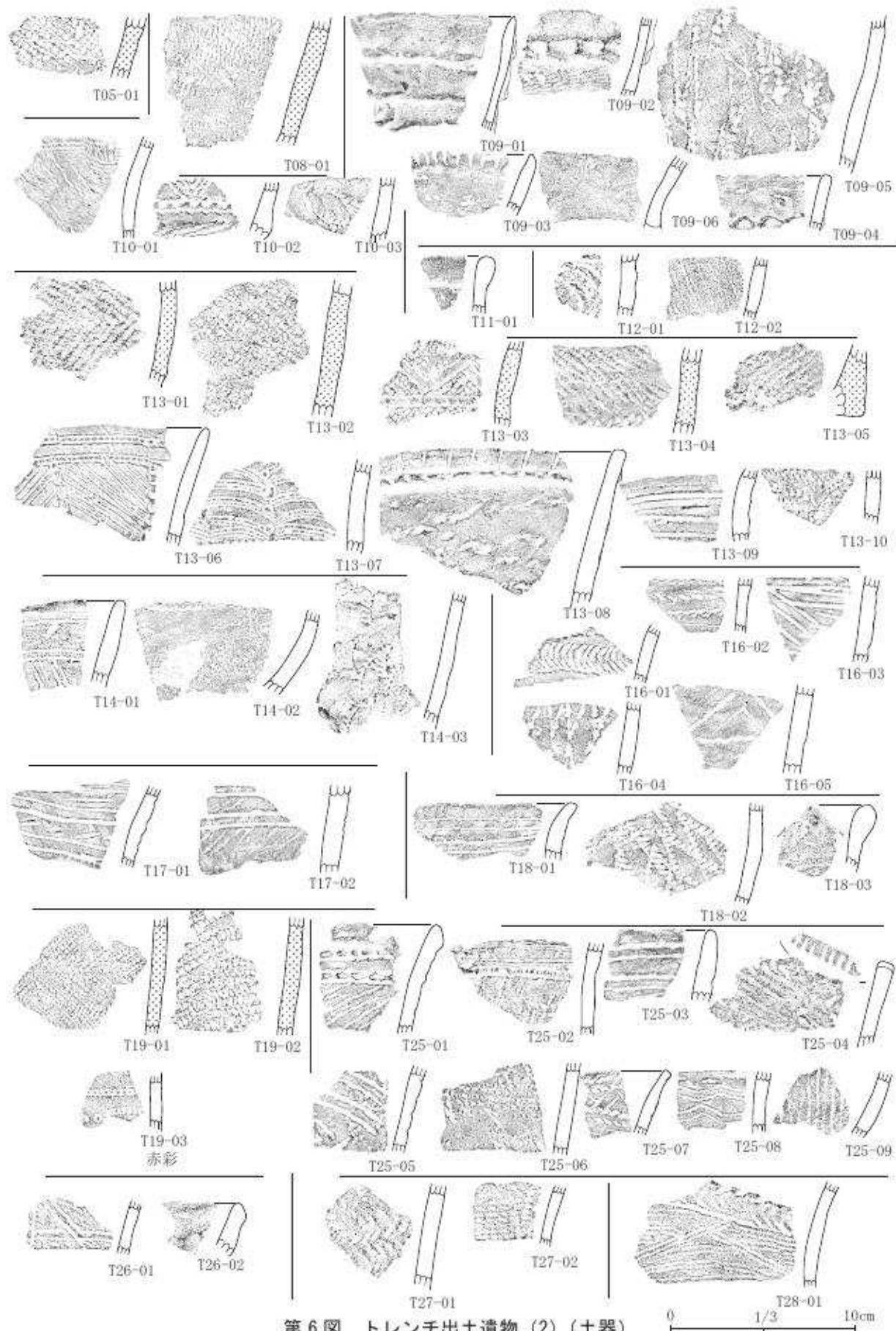
その他石器類も出土している。やはり縄文前期に伴う資料と判断される。

遺物の総重量は5028.8gでこの内56点について掲載した。出土遺物量が最も集中したのはT-13で最大1402.4gの遺物が出土している。またT-19でも500gを超す遺物量が検出されている。本調査の対象となつた地区に設定されたトレンチでみれば、T-9・13・14・25で遺物の出土量が多く、本調査の遺構分布状況と一致している。

トレンチ出土掲載遺物の詳細については表2にまとめた。



第5図 トレンチ出土遺物（1）（石器）



第6図 トレンチ出土遺物(2)(土器)

表2 トレンチ一覧表

トレンチ番号	掲載遺物	未使用遺物	種類	時期	重量	備考
T-1		1	縄文土器	浮島	5.4	
T-3		1	縄文土器	浮島か	17.4	
T-4		1	縄文土器	不明	6.1	
		2	土師器	不明	6.2	
		3	縄	-	3.3	
			合計重量		14.6	
T-5	01		縄文土器	黒陶	26	
		1	縄文土器	黒彩	11.1	
		2	縄文土器	浮島	4.4	
		3	縄文土器	不明	9.4	
			合計重量		50.9	
T-6	1		縄文土器	黒陶	6.1	
	2		縄文土器	浮島	7.1	
			合計重量		13.2	
T-8	01		縄文土器	黒陶	61.6	
		1	縄文土器	中期か	6.7	
		2	縄文土器	浮島2	59	
		3	縄文土器	黒陶	8.7	
		4	縄文土器	浮島3	9.3	
			合計重量		145.3	
T-9	01		縄文土器	浮島5	43.5	
	02		縄文土器	浮島3	26.6	
	03		縄文土器	浮島3	18.9	
	04		縄文土器	浮島3	17	
	05		縄文土器	浮島3	109.7	
	06		縄文土器	浮島3	26	
	1		縄文土器	黒陶	61	
	2		縄文土器	浮島一括	223.2	
			合計重量		526.9	
T-10	01		縄文土器	浮島1	27.9	
	02		縄文土器	浮島1	19.6	
	03		縄文土器	浮島2	17.5	
	1		縄文土器	黒陶	10.9	
	2		縄文土器	浮島一括	163.2	
	3		縄	-	25	
			合計重量		264.1	
T-11	01		縄文土器	花輪台	7.9	
	1		縄文土器	黒陶	11.8	
	2		縄文土器	浮島一括	52.8	
	3		縄文土器	諸磯	14.8	
			合計重量		87.3	
T-12	01		縄文土器	諸磯	10.2	
	02		縄文土器	浮島1	14.5	
	1		縄文土器	黒陶一括	48.5	
	2		縄文土器	縄文中期	38.1	
	3		縄文土器	浮島一括	10.7	
	4		縄	-	3.5	
			合計重量		125.5	
T-13	01		縄文土器	黒陶	37.1	
	02		縄文土器	黒陶	58.7	
	03		縄文土器	黒陶	31	
	04		縄文土器	黒陶	36.2	
	05		縄文土器	黒陶	27.9	
	06		縄文土器	浮島1	50.2	
	07		縄文土器	浮島1	40.6	
	08		縄文土器	浮島1	108.2	
	09		縄文土器	浮島2	20	
	10		縄文土器	浮島2	17.7	
	11		石器	圓石	451.3	花崗岩
	12		石器	磨石	154.7	輝石安山岩
	1		縄文土器	黒陶一括	241	
	2		縄文土器	浮島一括	78.2	
	3		縄	-	49.6	
			合計重量		1402.4	

トレンチ番号	掲載遺物	未使用遺物	種類	時期	重量	備考
T-14	01		縄文土器	浮島1	24.4	
	02		縄文土器	諸磯b	42.8	漢跡
	03		縄文土器	浮島2	42.8	
		1	縄文土器	黒陶	17.1	
		2	縄文土器	浮島破片	101.1	
		3	縄文土器	礫	165.4	
			合計重量		393.6	
T-15		1	縄文土器	黒陶	4.1	
		2	縄	-	1.3	
			合計重量		5.4	
T-16	01		縄文土器	浮島2	21.8	
	02		縄文土器	浮島2	14.3	
	03		縄文土器	浮島2	25.1	
	04		縄文土器	浮島2	20.8	
	05		縄文土器	浮島2	38.8	
	1		縄文土器	黒陶	27.2	
	2		縄文土器	浮島細片	33	
			合計重量		181	
T-17	01		縄文土器	浮島2	36.8	
	02		縄文土器	浮島2	49.2	
	3		縄文土器	浮島細片	49.6	
			合計重量		135.6	
T-18	01		縄文土器	浮島2	33.9	
	02		縄文土器	浮島2	41	
	03		縄文土器	諸磯b	13.4	
	4		縄文土器	浮島細片	54.5	
	5		土師器	甕片	4.8	
			合計重量		147.6	
T-19	01		縄文土器	黒陶	51.3	
	02		縄文土器	黒陶	35.1	
	03		縄文土器	浮島1	10.4	
	1		縄文土器	黒陶	299.2	
	2		縄文土器	浮島細片	43	
	3		縄文土器	不明	28.4	
	4		近世漆燒き	陶器	70.5	
	5		礫	-	5.8	
			合計重量		543.4	
T-21	1		縄文土器	黒陶	15.6	
	2		縄文土器	浮島	4	
			合計重量		19.6	
T-25	01		縄文土器	浮島1	41.6	
	02		縄文土器	浮島1	40.7	
	03		縄文土器	浮島2	30.9	
	04		縄文土器	浮島2	41.2	
	05		縄文土器	浮島2	29.8	
	06		縄文土器	浮島2	43.7	
	07		縄文土器	浮島2	11.4	
	08		縄文土器	浮島2	21.7	
	09		縄文土器	浮島1	19.5	
T-26	1		縄文土器	浮島1	17.1	
	2		縄文土器	浮島3	12.9	
	1		縄文土器	黒陶	46.6	
	2		縄文土器	浮島細片	36	
			合計重量		112.6	
T-27	01		縄文土器	浮島2	34.9	
	02		縄文土器	浮島	46.7	
	1		縄文土器	浮島細片	140.7	
			合計重量		192.3	
T-28	01		縄文土器	浮島2	66.8	
			合計重量		66.8	

第3節 昭和56年度本調査

昭和56年4月から昭和57年2月にかけて、「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」に伴い財団法人茨城県教育財団によって行われた。今回の調査が舌状台地の基部付近にあたるのに対し、昭和56年度の調査は同じ台地の先端部付近である。標高は今回と同じ24～25mである。

検出された遺構は竪穴住居跡44軒、土坑119基、方形周溝遺構5基などである。住居跡は縄文時代早期（茅山期）の3軒から始まるが、縄文前期前半（黒浜期）の7軒と前期後半（諸磯・浮島期）の15軒を中心とする。他に弥生後期（長岡・十王台期）3軒と古墳時代（鬼高期）2軒も同じ確認面で検出されている。縄文時代の住居で炉跡が確認されたのは8軒である。いずれもやや掘りくぼめたところを利用した地床炉である。住居跡の中には柱穴の可能性があるピットが10基以上検出されているものもある。土坑は縄文前期の住居跡が多い遺跡中央部付近で検出されており、直径2mを超えるものが51基と最も多い。中でも6mを超える大規模な土坑が2基（110号・114号）検出されているのが特徴的である。ただ、深度が確認面から50cm以下の浅いものが99基と多く、住居でも残存深度30cm以下のものが少なくない。方形周溝遺構は第1号が約23×23mで特段に大きく、他は7～17m程度である。現況ではすべて墳丘を見出せず、主体部も確認されていない。遺物も縄文土器の流れ込みだけで、これらの遺構に伴う遺物は出土していない。

出土した土器は縄文早期～中期、弥生後期、古墳後期、土師器である。他に土製円盤や土玉などの土製品、石鏃・石斧・石皿・滑石製模造品などの石製品、銭貨などの金属器が出土している。縄文土器は田戸下層・茅山式といった早期の土器片が住居等の覆土から出土しており、最も古い。メインは前期の土器である。7軒の住居跡から出土した前期前半・黒浜式は斜縄文や羽状縄文などの縄文を地文とし、その上に半截竹管や沈線文を付したものもある。総じて繊維を多量に含み、胎土中に砂を混入している。焼成はさほど良好ではない。前期後半では、縄文を地文とし半截竹管による爪形文・平行線文などを付す諸磯a式と、細い粘土紐を貼り付け斜状にキザミを施した浮線文を付ける特徴の諸磯b式が見られる。他に浮島I～III式も報告されている。I式は撚糸文や波状貝殻痕を主な地文として平行沈線をもつものが主である。大部分の住居跡や土坑などから出土している。II式は変形爪形文や波状貝殻痕などを地文とし、輪積痕などを施文している。I式より出土点数は少ないが、約10軒の住居覆土から出土している。波状貝殻痕はI式より波状が鮮明で豪快に付ける特徴も報告されている。III式は連続三角文を中心とする。4軒の住居覆土から出土するのみでかなり少ない。この他に中期後半の加曾利E式が住居跡や土坑覆土から出土している。

この時の調査で出土している弥生土器は、磐船山式が少量見られ、長岡式や十王台式が11・17～19号住居跡など3～4軒の住居覆土及び床面から出土している。また、26・27号住居跡では土玉を除き土師器のみの出土である。その中には内黒土器4点と朱彩1点が含まれ、すべて鬼高式の土器である。

大型土坑がないことや土師器等が混入するなど若干の相違は見出せるものの、窪みを利用した地床炉、住居以外には土坑が主な遺構となること、遺構の残存状況等も含めて以前の調査結果と今回の調査結果に類似する。出土した土器の時期もほぼ同時期のものが主であり、舌状台地の先端部か基部付近かの相違はあるが、概ね類似する集落遺跡の様相が確認されている。

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 出土遺物の概要

本遺跡の性格を把握するために、本報告書では、まず遺構外出土遺物の分類を行い、この分類に従い各遺構出土遺物をこれに当てはめていく。その理由としては、確認面及び表土掘削時に出土した遺物量が、各遺構から出土した遺物量を凌駕しており、遺構外出土遺物をもって遺跡の性格を把握する方が的確且つ、簡便と判断したためである。

検出された遺構は住居及び土坑、ピットを含め600基近くあり、遺物の出土が明確でないものも多々ある。また、複雑な重複関係からこれらの遺構の所属を示す遺物の情報をよりわかりやすくするのがその目的である。尚、遺構出土遺物の中で明らかに時期が異なる遺物についても、遺構外出土遺物として掲載した。

遺構外出土遺物としたものは、グリッド出土遺物並びに、表土出土遺物である。包含層は明確にできなかつた為に遺構外としてまとめている。出土遺物をすべて精査した結果、その総重量は42882.9gで、本遺跡から出土した遺物全体の凡そ38%である。以下時期・型式別に出土遺物について分類及び説明を行う。

第2節 遺構外出土土器の分類

I 繩文土器

第一群土器 繩文時代草創期 柄糸文系土器

第1種 花輪台式土器

a類 花輪台1式土器

b類 花輪台2式土器

c類 花輪台式の底部

第二群土器 繩文時代早期 沈線文系土器

第1種 田戸下層式土器

第三群土器 繩文時代前期

第1種 関山II式土器

第2種 黒浜式土器

a類 黒浜1式土器

b類 黒浜2式土器

c類 黒浜3式土器

d類 細分できない黒浜式土器

第3種 浮島式土器

a類 浮島1式土器古段階

b類 浮島1式土器新段階

c類 浮島2式土器

d類 浮島3式土器

e類 細分できない浮島式土器

第4種 前期終末期の土器

a類 興津式土器

b類 十三菩提式土器

c類 形式不明の土器群

第5種 諸磯式土器

a類 諸磯a式土器

b類 諸磯b式土器

c類 細分できない諸磯式土器

第四群土器 繩文時代中期

第1種 五領ヶ台式土器

a類 五領ヶ台1式土器

b類 五領ヶ台2式土器

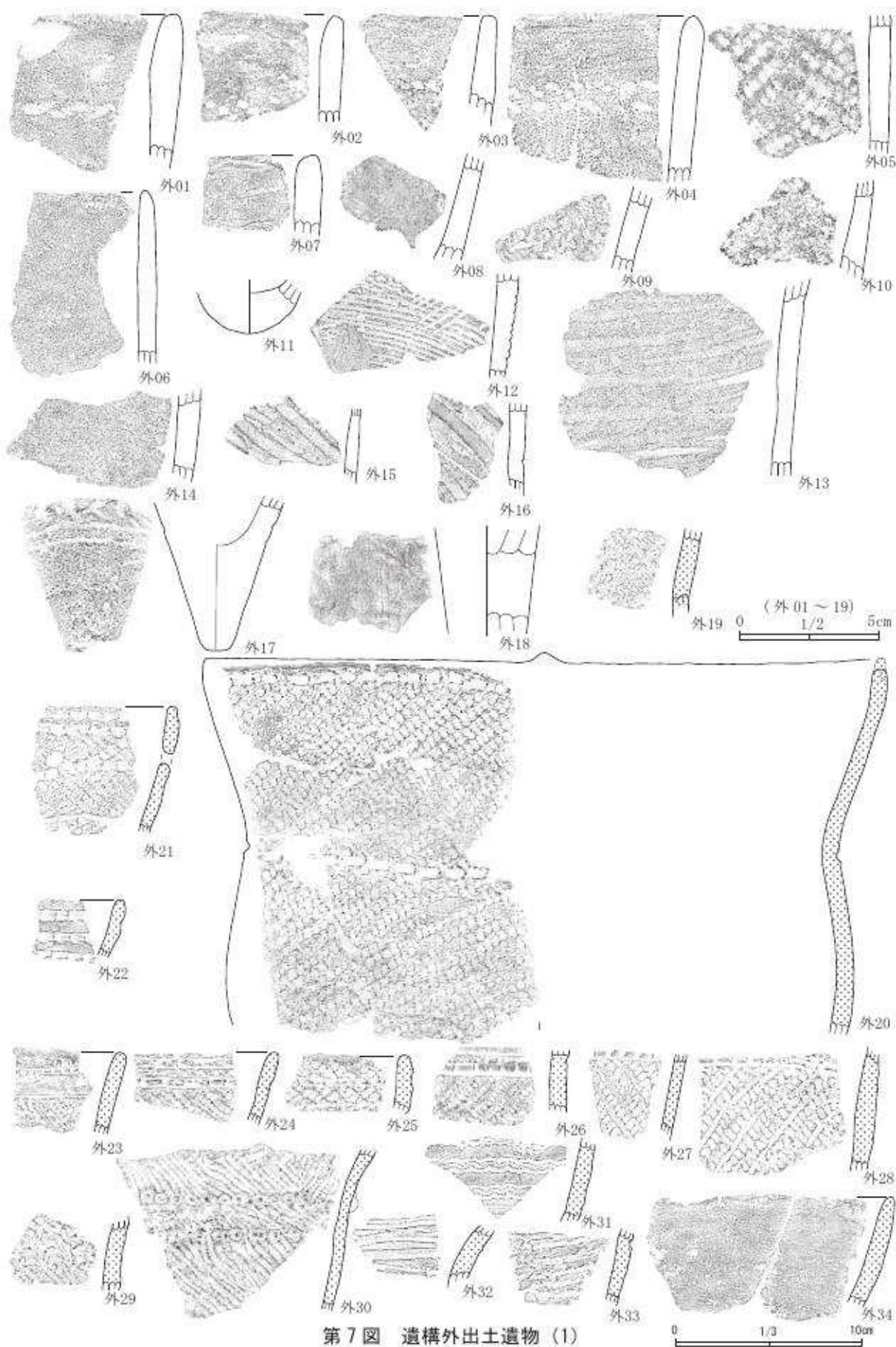
c類 細分できない五領ヶ台式土器

第2種 加曾利E式土器

a類 加曾利E1式土器

II 弥生土器

III 土師器（古墳時代前期）



第7図 遺構外出土遺物(1)

第一群 繩文草創期 燃系文系土器

第1種 花輪台式土器

a類 花輪台1式土器 第7図外1～5

太い丸棒状の口縁で、口唇直下に横方向に1条から2条の繩文原体の圧痕が施文される。外1～3では1条、外4では2条の原体が圧痕されている。胴部には縦方向の回転施文繩文がRLとLRで交互に施文され、文様構成としての意識が高い。いずれもやや厚手で、細かな白色の細粒を多く含み、やや軟質である。

b類 花輪台2式土器 第7図外6～10

直線的に立ち上がる口縁は、および器面が磨かれる点、胎土がやや軟質な点は、a類と同様である。ただし、器面に文様施文のないものを本類とした。

c類 花輪台式土器の底部 第7図外11

底部先端部分のみの資料でやや開き気味に尖る。

第二群 繩文時代早期 沈線文系土器

第1種 田戸下層式土器 第7図外12～18

外12では櫛歯状の工具により密な平行沈線が施文されるもので、やや古くなる可能性がある。胎土中に粗い砂粒を多量に混入している。底部の資料並びに胴下半部の資料が出土している。口縁部の資料は検出されていない。胴部の破片とした外13～16はいずれも指による太いナデ状の沈線が施されるもので、明確に沈線文とは言えないが、胎土・焼成から本種に含めた。外17・18の底部は所謂天狗の鼻状に尖るもので、外17では沈線が巡る。

第三群 繩文時代前期

第1種 関山II式土器 第7図外19

遺物の出土量は少ない。外19は単節繩文を組紐に撚り合わせたものであろう。

第2種 黒浜式土器

a類 黒浜1式土器 第7・8図外20～外34

黒浜式土器は本遺跡における出土遺物で、浮島式土器と並んで多量に出土した土器である。近年の黒浜式土器の分類では、3期に分類されるがここでは、口縁部直下に爪形文(外21～28)、胴部に隆帯がめぐり、円管状の刺突文が隆帯に沿って配される外30、または平行沈線による文様を横位に描く外31～33は平行沈線を多段に施文するもので植房式の可能性がある。その他外34の無文土器を黒浜1式土器として捉えた。

b類 黒浜2式土器 第8図外35～42

条線により文様を描くものを本類にした。

c類 黒浜3式土器 第8図外43～47

肋骨文を描く土器群を本類にした

d類 細分できない黒浜式土器 第8図外48～68

その他明瞭に区別が出来なかった本種の遺物としては、縄文のみの施文を行う資料並びに無文の土器がある。縄文のみ施文する土器群は結束羽状縄文や、個別の羽状施文を行う土器も見られ、羽状縄文系土器群の中でも古い一群の可能性もある。一方で外 93 は縦方向の撚り糸文を施文する土器である。また、外 65 では貝殻腹縁文が付される土器であり、浮島式土器の 1 段階に通ずるものもある。

第 3 種 浮島式土器

a 類 浮島 1 式土器古段階 第 8・9 図 外 69～92・97～129 (127・128 は欠番)

半截竹管により口唇部に沿って爪形文を配し、平行沈線により胴部上半に眼鏡状や肋骨文を描くもので、地文に撚り糸文を施す一群を本類に含めた。外 69 は波状を呈し三角形に鋭く尖る口縁部波頂部の破片である。諸磯 a 式土器の影響を大きく受けるもので C 字状の爪形文を口縁に沿って巡らせる外 70・71、肋骨文を描く(外 78～82)。外 93 から以降は平行沈線によって三角形の区画や、木葉状の入り組み文、眼鏡状の文様、更に区画帶の中に三角形や波状の平行沈線を充填させる外 93～96、いずれも地文撚糸文と判断される。外 97～129 は撚糸文のみが施文される土器で、撚糸文系土器との区別がつかないものもあるが、本類に含めている。また、平行沈線には変形爪形文は用いられず、沈線のみで文様が描かれる。以上は浮島 1 式土器でも古式段階に含まれるものであろう。

b 類 浮島 1 式土器新段階 第 9 図 外 130～157

外 130～157 は平行沈線による文様構成を行う一群である。変形爪形文は用いられない。本類でも新しい段階になるものと判断される。

c 類 浮島 2 式土器 第 9・10 図 外 158～200

所謂変形爪形文を多用する土器群を本類にした。外 158～178 は幅広の変形爪形文を主に文様を描くものである。外 180～185 は平行沈線に変形爪形文が同時に施文される。浮島 2 式でも古い段階と想定される。幅広変形爪形文から、やや幅が狭く列点状の爪になるもの、変形爪形文が乱雑にひかれたために、平行の有節沈線状になるもの(外 186～193)等が見られる。地文は下半底部付近では大半が無文であるが、この段階から浮島 3 式土器にかけては、貝殻腹縁による鋸歯文様が胴部の地文に施文されるものが見られる。(外 194～200)

d 類 浮島 3 式土器 第 10 図 外 201～204・206・207

口縁部に折り返しが見られ、折り返し部分に、棒状工具や指頭により刺突を加える特徴を有するものである。本遺跡においてはこれらの資料は比較的少なく、またこの時期の特徴である三角形の連続文様が検出されていない。このことからも浮島 3 式段階では遺跡は徐々に衰退の時期に入るものと判断される。

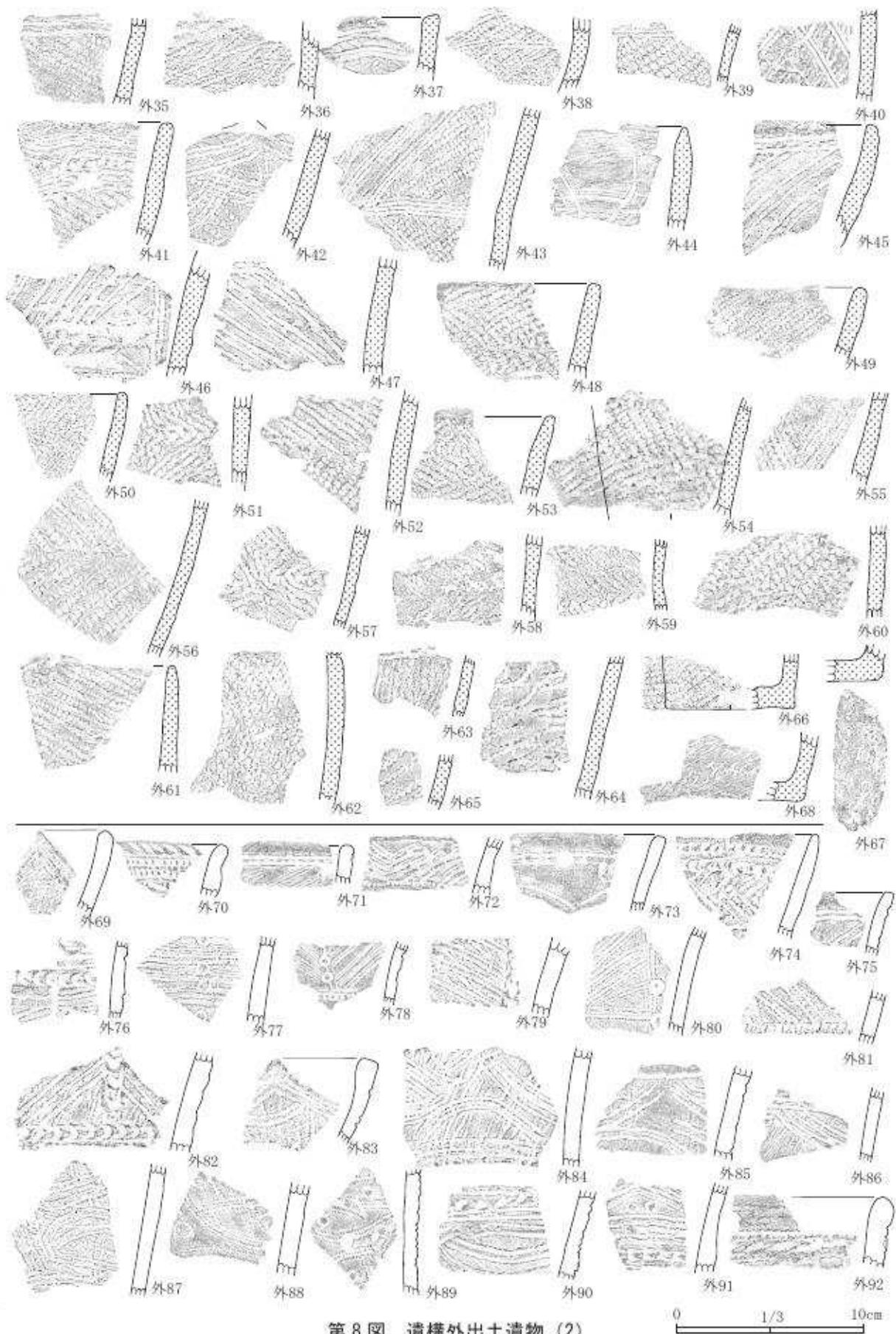
e 類 細別出来ない浮島式土器 第 10・11 図 外 205・210～215

浮島式土器と判断される底部を本類にした。そのほか浮島式とは異なる施文の特徴を有する外 205 等、細分が不可能な資料について本類にふくめている。

第 4 種 前期終末の土器

a 類 興津式土器 第 11 図 外 216～225

外 216～220 は貝殻腹縁を連続して刺突する一群である。浮島 3 式以降興津式に見られる手法である。沈線による区画が認められないが施文の状況から本類とした。外 221～223 は半截竹管を背面から削り、2 本一組の列点状の変形爪形文を用いて曲線状の文様を描く土器群である。



第8図 遺構外出土遺物 (2)

b類 十三菩提式土器 第11図 外229～233

集合沈線により幾何学文様を描く外229～231は爪形の刺突文様を施文するものである。外233は三角形の印刻文を施すものである。

c類 型式不明の土器群 第11図 外224～228

口縁部は緩やかに内湾し口唇直下には半截竹管の背面を削ぎ落とし、ピンセット状に尖った工具を用いて斜方向の列点を口唇部に沿って施文するものである。北陸地方清水の上II式土器に共通する点を見いだせる。

第5種 諸磯式土器

a類 諸磯a式土器 第11図 外234～244

器形及び文様の構成は、浮島1式土器の古段階と極めて類似しており、これらの土器が相互に関係をもつていたことは十分に想定できるが、浮島1式古段階では地文はすべて撚糸文であり、胎土中に纖維を混入しない縄文施文の土器群は本類に含めた。胎土の違いも比較的明瞭で、諸磯式土器はやや粗い砂粒を含むもので浮島式土器の精良な胎土とは異なっている。

外244は浅鉢の可能性がある塊形の口縁部破片であるがC字の爪形で明瞭な文様構成を行う。胎土はやや砂が多い。諸磯b式土器に含められるものか。

b類 諸磯b式土器 第11図 外245～258

検出された遺物は浮線紋を有するもので、地文に単節縄文が施文されている。浮線上には押し潰した様な処理や縄文の施文が施される。S字状の結節文様が施される外252・253・257もある。南関東や北関東群馬県地域に見られる浮線上に斜め方向の刻みを施すものは外249～251の3点で比較的少ない。浮線に沿って爪形文が配される資料は出土していない。外245・248は浮線上に縄文が施文され。全体に胎土も砂礫を多く含むもので、他の地域の土器とはかなり差異があるように思える。外258は胴部の細片であるが単節RLの縄文が施文されやや厚手の土器であることより本類に含めた。

第四群土器 縄文時代中期

第1種 五領ヶ台式土器

a類 五領ヶ台1式土器 第11図 外259～262

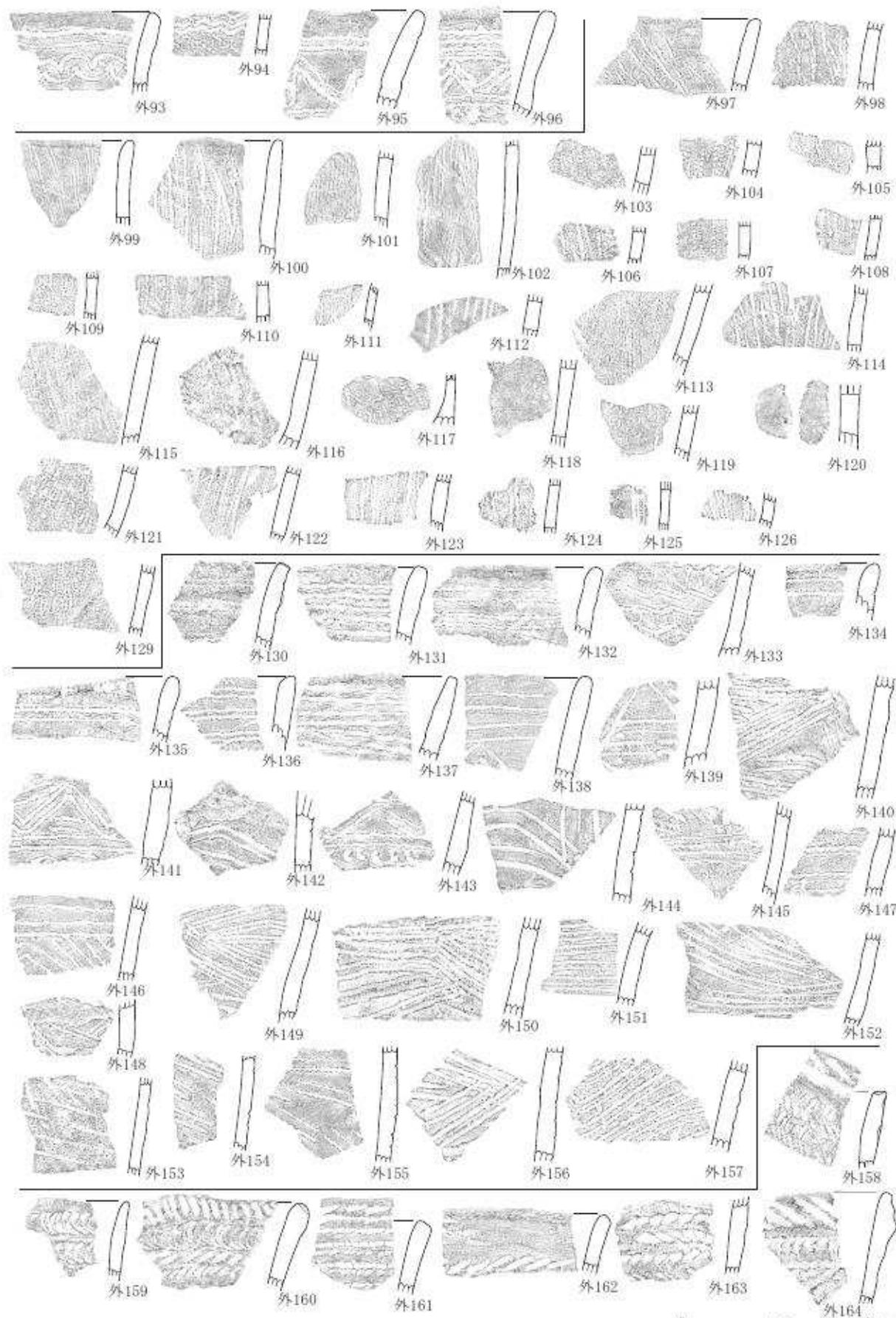
口唇部に刻み目を有し、口唇直下に隆帶や沈線による区画帯を設け、内部に三角形の印刻紋を施す一群である。三角形の印刻紋は交互刺突状の刻みで、主文様を構成するものではない。五領ヶ台式土器でも前段階の十三菩提式土器の手法を残すものであろう。

b類 五領ヶ台2式土器 第11図 外263～266

口唇部に刻み目を有するもので、隆帶及びそれに平行する沈線によりにより曲線が描かれ、地文には縄文が施文される。外266では頸部との境に隆帶が2条巡り、隆帶の一部に爪による刺突列が施される。また胴部には縦方向に単節RLが施文された後、S字状の結節文が施文される。

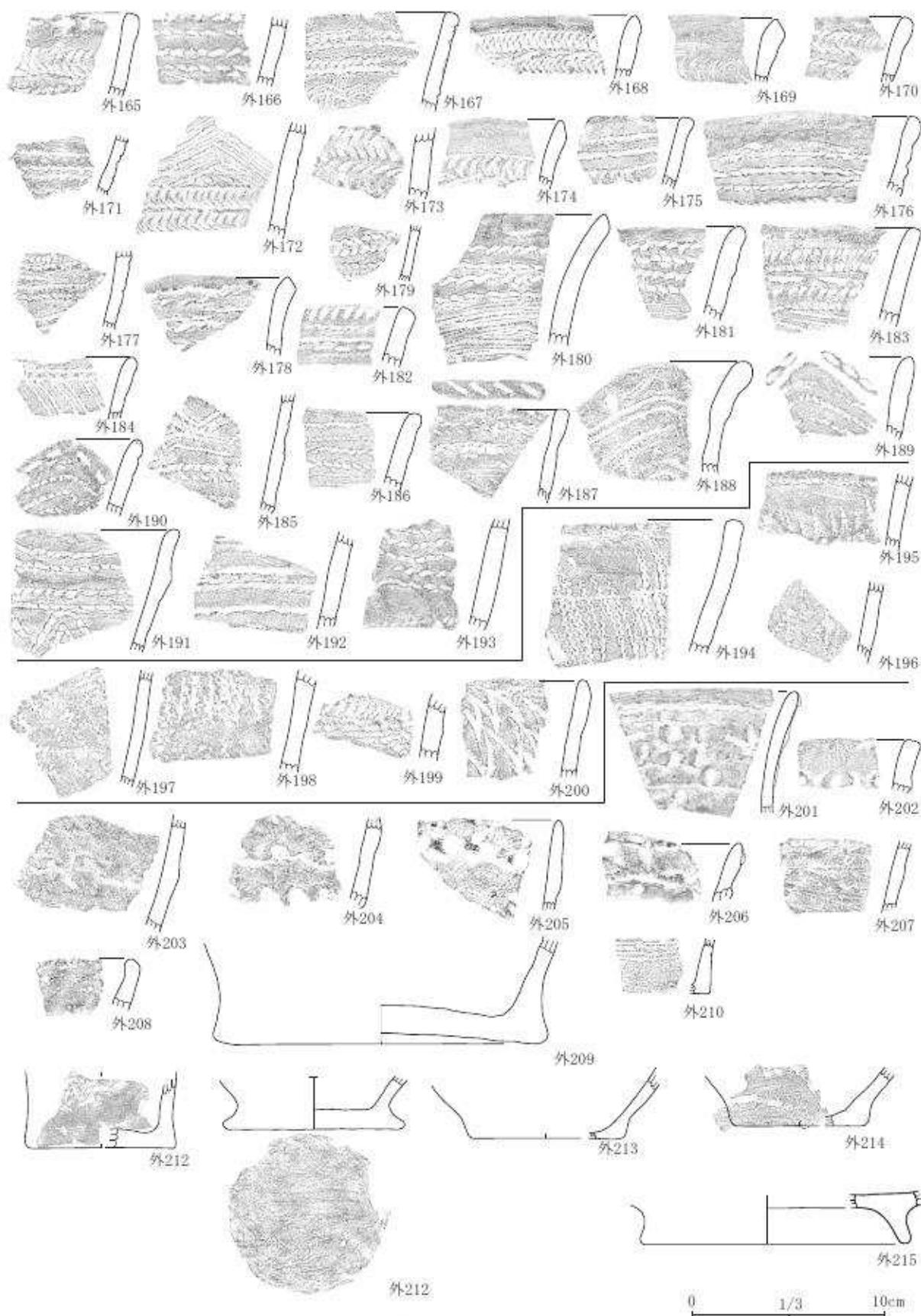
c類 細分できない五領ヶ台式土器 第11・12図 外267～280

外267は単節縄文を施文する胴部の破片、外268・269は単節LR縄文を縦方向に回転施文し、S字の結節文が垂下する。外270は無文、外271は口縁部の破片で隆帶上に縄文が回転施文される。本類の遺物は大量の白色小礫。砂粒を混入するのが特徴である。外272・273は無文の口縁部破片で、いずれにも内面に特徴的な段を有する。外275は内面に段を有する破片であるが口唇部に刻みを有し、外面には無節の縄文Rが横方向に回転施文される。277～280は底部の資料である。以上五領ヶ台式土器でも細分ができなかった物についてまとめた。

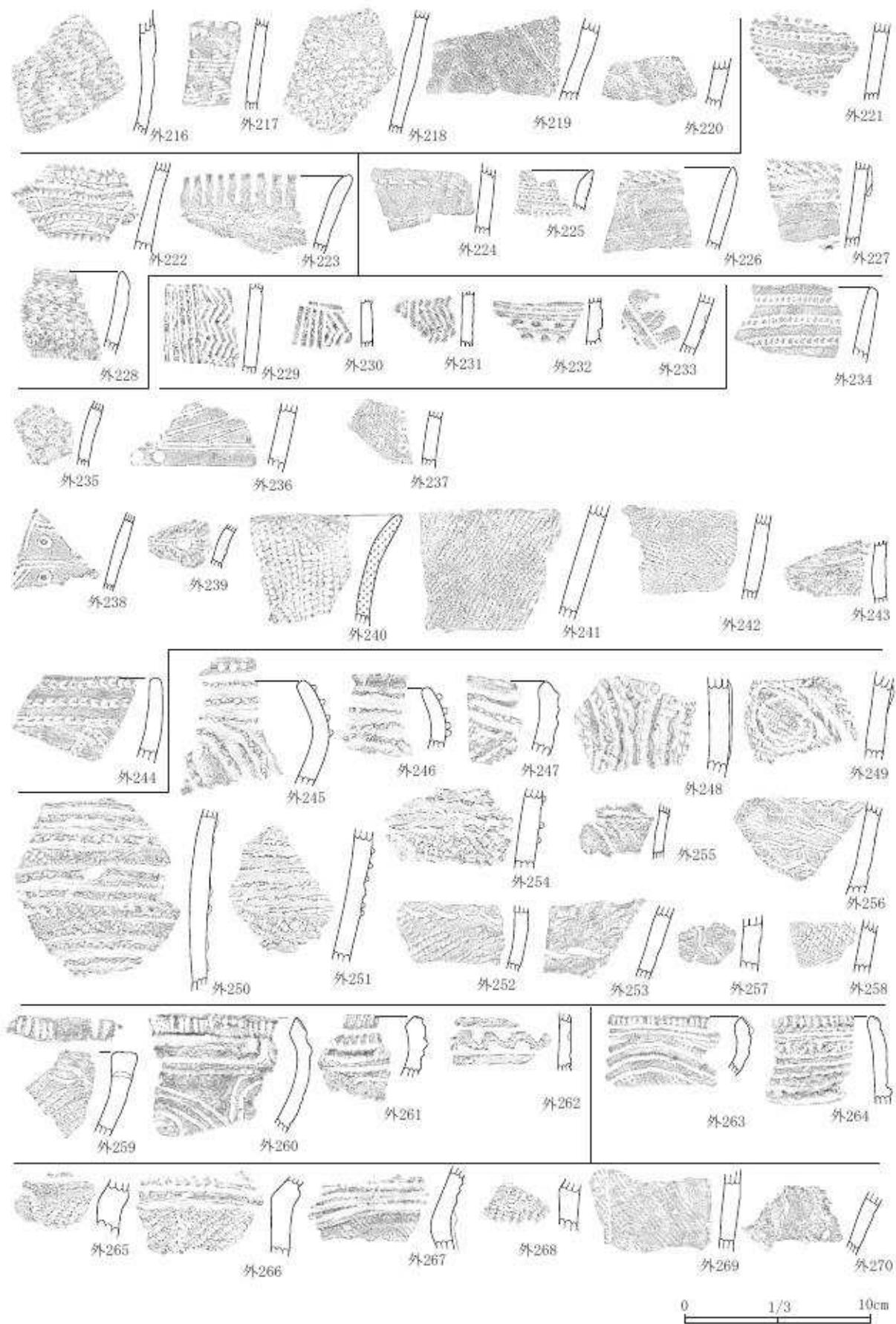


第9図 遺構外出土遺物 (3)

0 1/3 10cm

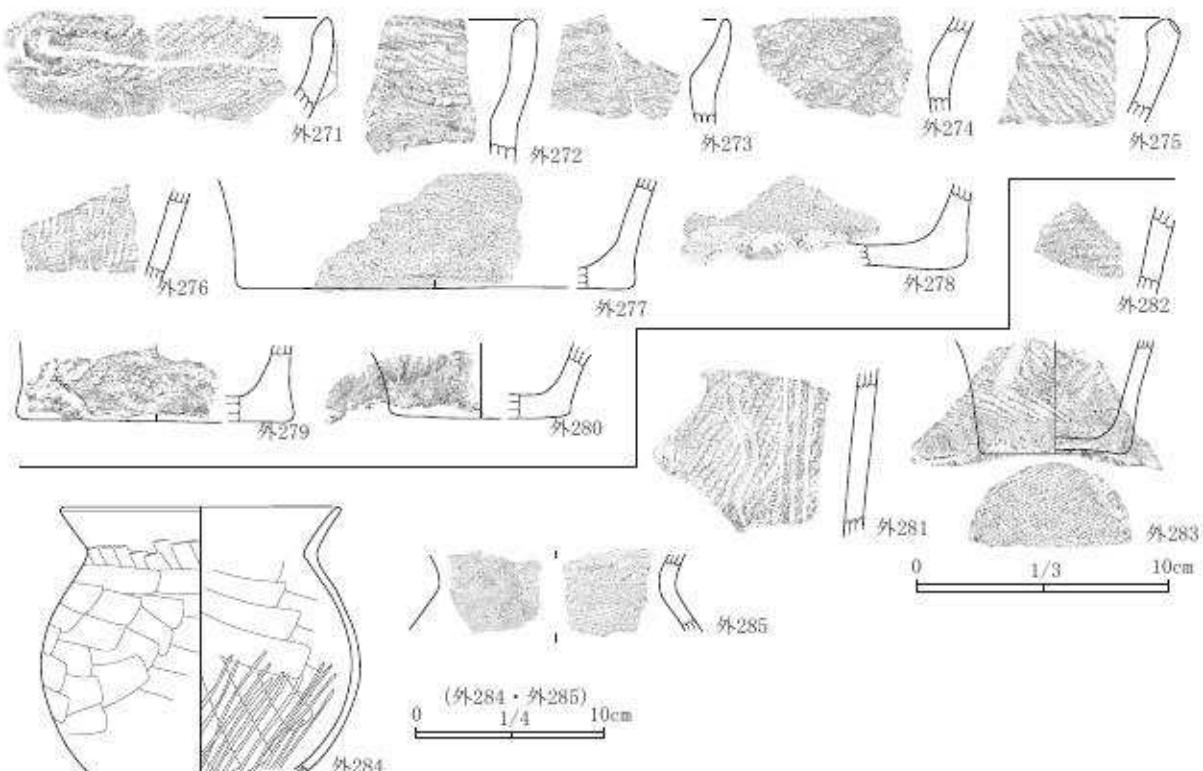


第10図 遺構外出土遺物 (4)



第11図 遺構外出土遺物(5)

0 1/3 10cm



第12図 遺構外出土遺物 (6)

277～280までは本種の底部である。

第2種 加曾利E式土器

a類 加曾利E I式土器 第12図外281・282

胴部の破片のみで、全容を知りえる資料は出土していないが、胴部細片が出土しており本時期にも若干ながら縄文人の足跡が残されている。外281はキャリバー型土器の胴部の資料であろう。縦方向に密に回転施文された単節RL縄文の上に半截竹管による断面かまぼこ型の蛇行及び垂直の懸垂文が交互に施文される。

II 弥生土器 第12図 外283

確認できた資料は、外283の1点のみである。褐色で薄手であり、焼成も良好である。平底の壺形土器であろうが胴部はやや外反味に立つ。胴部下半には単節縄文が施文され、下端部付近には付加条第1種の縄文が部分的に観察できる。底部は布目が压痕されている。弥生後期の所産と判断されるが、細分は不明である。

III 土師器 第12図 外284・285

出土した資料は2点のみであった。外284は甕である。胴部は球形を呈し、口縁は緩やかに外反し口唇部はやや面取られるように横ナデされている。口縁部から胴部下位までほぼ完形であるが、底部は欠損している。また、胴部中位から下位にかけて煤が厚く付着している。外面の整形はミガキ。内面はナデを行っている。外285は甕頸部の破片である。内面はハケ目が僅かに残り外面はよく磨かれる。いずれも古式の土師器で五領式土器と判断される。

第3節 遺構外出土石器 第13図

外286～288は石核である。素材は外286・287がチャート、外288は頁岩である。

外289・290は横剥ぎの貝殻状剥片。外291～293は縦長の剥片である。石材は外289～292はチャート。外293は安山岩（トロトロ石）である。

外294はポイントの先端部の可能性がある。折損して明瞭ではないが表裏に剥離痕が残る。材質はガラス質安山岩。

外295は剥片を用いた使用痕のある石器である。刃部に明確なリタッチが施されることからスクレーバーとした。石材は安山岩であろう。

外296・297は楔である。外296は縦長の剥片の長軸方に上下から剥離を加える。両極打法による可能性もある。材質はガラス質安山岩。外297はやや横長の剥片を用いるものであろうか、打点部を除去し両側面側から剥離を加えている。側面の打撃は粗雑で多くのステップを起こしている。材質はチャート。

外298は針状石製品である。管見に触れた資料がなく不明石器としたが、先端部が丸い鉛筆状に尖り、側面は円形を意識するように研磨されるが、やや平坦な砥石を用いたものか縦方向の筋状の段が確認できる。材質は蛇紋岩と判断され、やや硬質である。

外299・300は磨製石斧である。外299は断面形が梢円形を呈し乳棒状の形状に近い。全体によく研磨されており、刃部は緩やかなハマグリ刃状で僅かながら刃こぼれが観察される。材質は緑色岩類であろう。やや片岩質であるので緑泥片岩の可能性もある。外300は本来磨製石斧であったものが破損した為に裏面に剥離を施し打製石斧として再利用したものと判断される。上面はよく研磨されている。裏面は大剥離の後に側縁を細かに調整する。材質は凝灰岩。

外301は礫石器と判断したものであるが先端部の潰れはあまり観察されず、石核の可能性もある。棒状の自然石を利用するもので、先端部側に剥離を交互に加えて比較的大きな剥片を剥ぎ取っている。材質はガラス質安山岩。

外302はややホルンフェルス化した絹雲母片岩を材質とするもので、側面に階段状の剥離が施されている。打製石斧と想定したが、基部側に節理面が残り打製石斧としての定型石器には完成していないものと判断される。

外303～307は石皿である。いずれも多孔質安山岩で、やや発泡して軽石に近いものもある。機能面がやや平坦なもの外303・304と皿状に窪むもの外305～307の2種類がある。外304は形状が方形に整形されたもので、側縁は直線的である。

外308～310は凹石である。外308は破損しているが本来は隅丸の方形に整形されるものであろう。上下両面に窪みが施されている。窪みは列状に複数穿たれる。石材は石皿同様で多孔質の安山岩である。外309はS字に湾曲する自然礫で、上端片面のみに窪みが付される。外310は円礫で上下両端に浅いくぼみがある。材質は砂岩。

外311・313は磨石である。自然の円礫の上面および側面を用いている。外311は安山岩、外313は砂岩。

外312は敲石である。材質は凝灰岩段形の礫の先端部のみを僅かに用いる。



第13図 遺構外出土石器

第4節 造構の概要

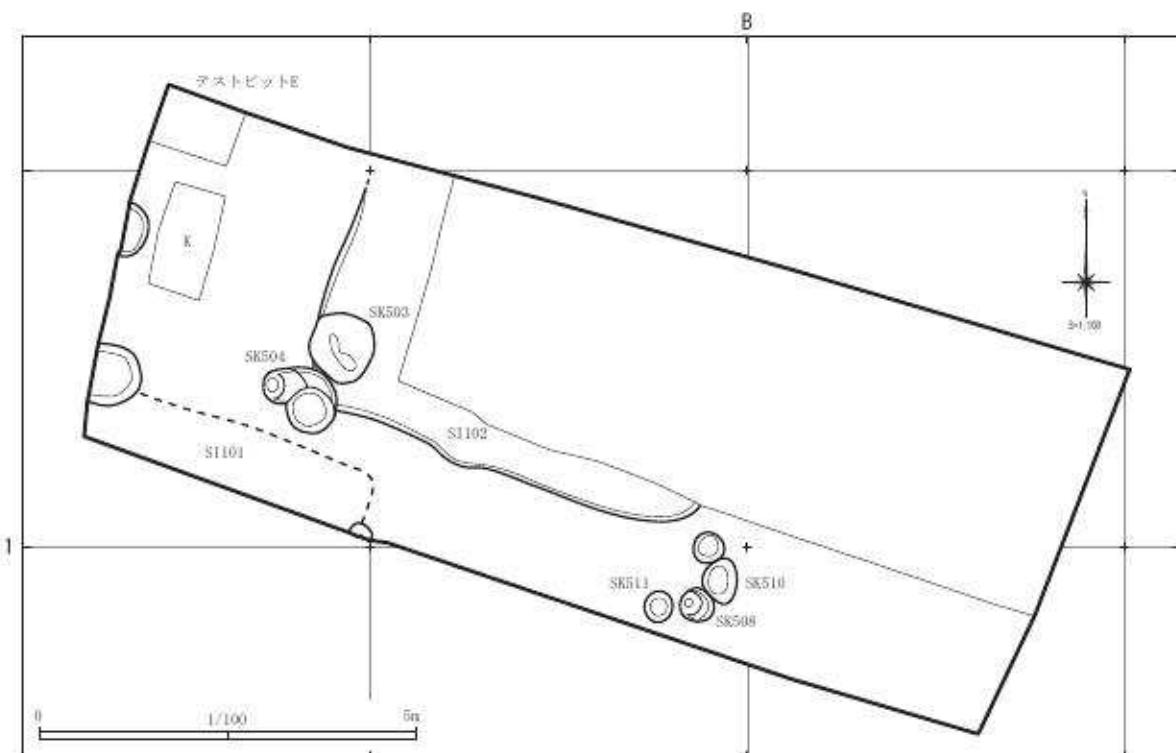
【東区】(第15図、造構図版2)

切り合い関係が複雑な中で、49軒の住居跡を検出した。これらの住居跡で、周溝と硬化面が明確に検出されたものはない。削平が著しい遺構が多いため、住居壁面も詳細には不明なものが多い。住居の分布をみると、縄文前期前半に当たる黒浜式期の住居跡は調査区の北側に集中する傾向があるのに対して、前期後半の浮島式期は調査区中央から南側にかけて集中するようである。

なお住居跡の中には、遺構の切り合い関係による新旧関係と、出土遺物からみた新旧関係が符合しない場合がある。住居跡は同じ場所に重複する場合が少なくないため、古い住居の遺物が新しい住居に掘り返されて入り込んだ可能性なども推測される。一方で、表土直下が遺構検出面に当たるなど、削平と攪乱が著しい状況も加味すれば、切り合い関係による新旧関係と遺物の新旧が一致しない一因もそこにある可能性が考えられる。不一致な新旧関係については遺構・遺物の両面から十分に検討したが、それでも解消されなかつたので、やむを得ず、符合しないまま報告することとした。

【西区】(第14图、造構图版2)

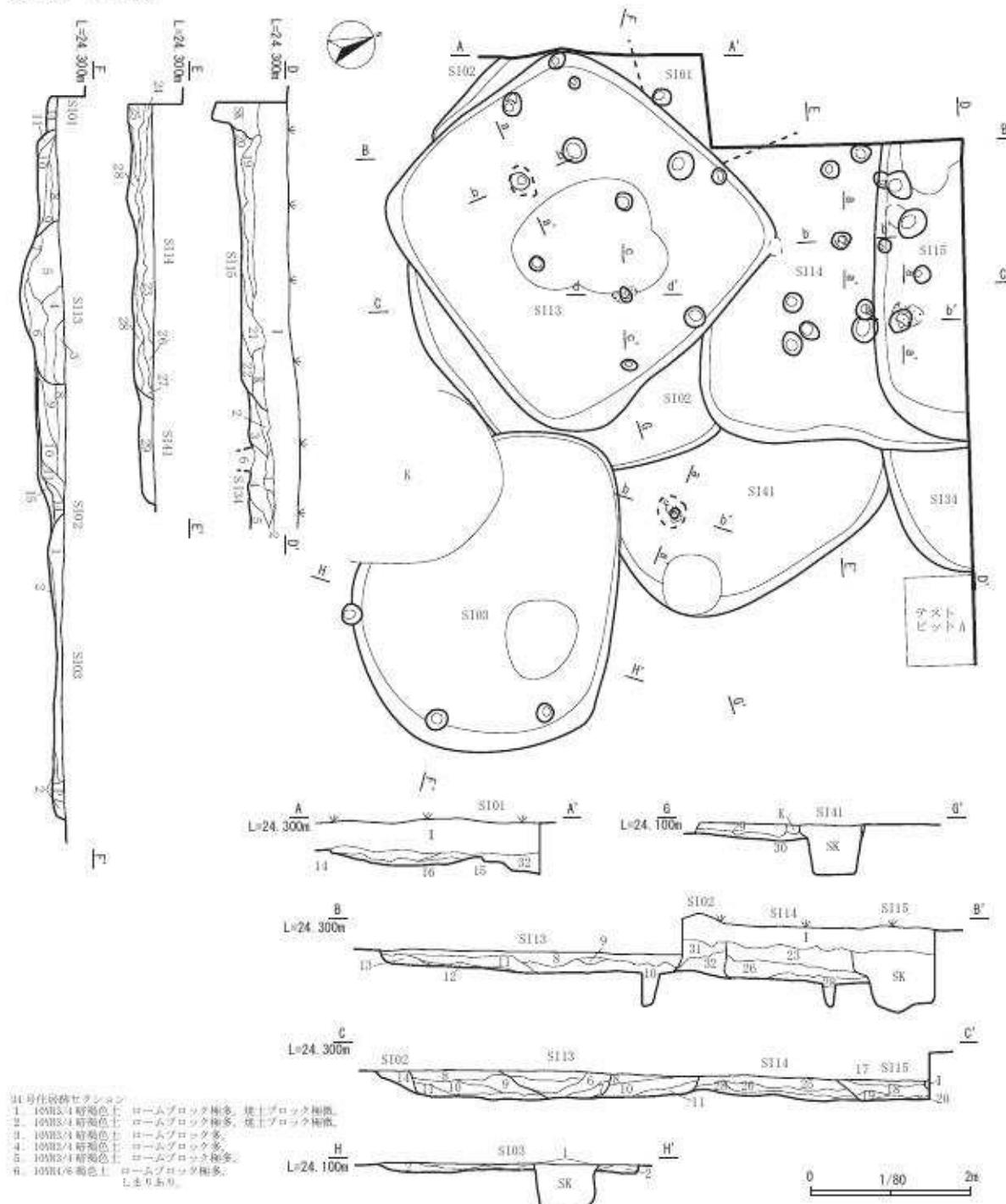
調査区の半分近くが攪乱を受けており、こちらで検出された竪穴住居跡と思われる遺構は2軒しかない。また、東区と同様に残っている住居跡では周溝や硬化面が検出されたものはない。



第14図 西区全体図

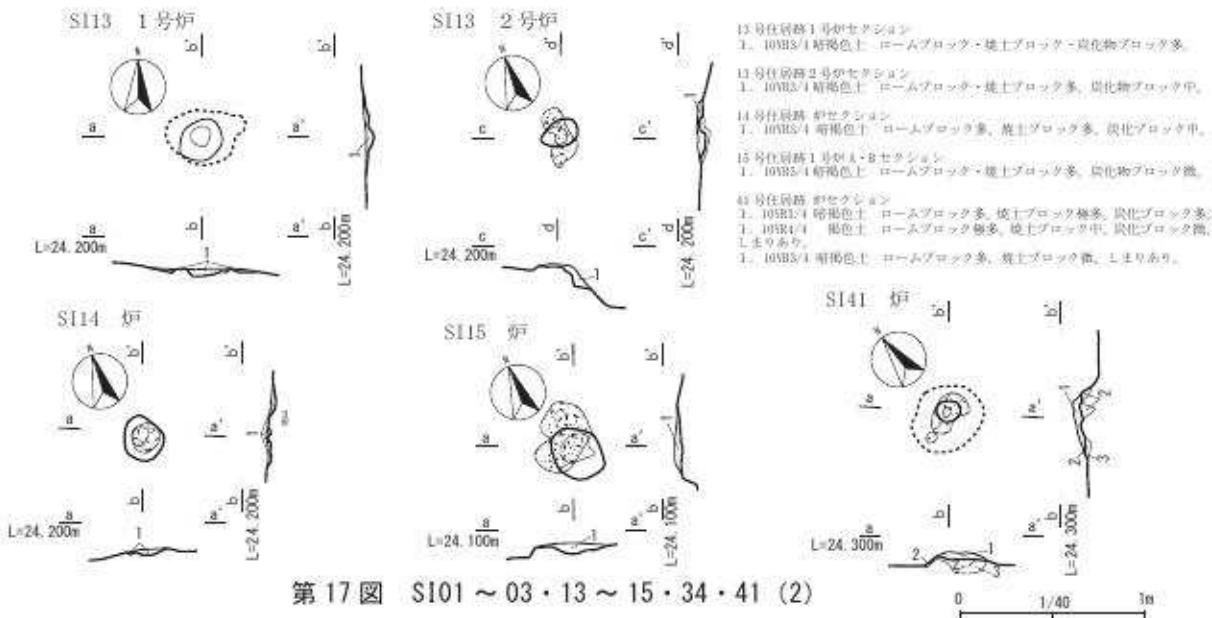
第5節 東区の遺構と遺物

第1項 住居跡



第16図 SI01～03・13～15・34・41(1)

- 1. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 2. 10B04/6 粘土色土 ロームブロック極多。
- 3. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 4. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 5. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 6. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 7. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 8. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 9. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 10. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。黒褐色土ブロック多。
- 11. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 12. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 13. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 14. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 15. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 16. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。
- 17. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。
- 18. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 19. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 20. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 21. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 22. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 23. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。
- 24. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。
- 25. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 26. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。炭化ブロック極微。
- 27. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 28. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。しまりあり。
- 29. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 30. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。
- 31. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。
- 32. 10B03/4 粘土色土 ロームブロック極多。炭化ブロック極微。



第17図 SI01～03・13～15・34・41(2)

SI01・02 (第16～19図、遺物図版1)

SI01はD-2グリッドで検出された。大部分が調査区外であるため規模は不明である。SI14を切って構築され、SI13に南東側を切られる。遺物は黒浜式土器を主体に582gが検出された。

掲載遺物は6点である。01・02は2点の接合資料である。地文は無節の縄文。C字の爪による連続刺突文が波状の口縁部に沿って2列刺突される。03は無節の縄文Rの縄文を施すもので、一部に斜め方向の平行沈線が観察される。黒浜1式。04は単節RLとLR縄文を結束させ羽状縄文を地文にし、平行沈線による区画を設けている。黒浜2式。05は地文は無文で櫛歯状の工具により肋骨文が描かれる。黒浜3式。06は直前段反撫のLR縄文を羽状に施す。黒浜2式か。05は第3群第2種c類の黒浜3式、06は羽状縄文が施文されe類である。出土遺物から本遺跡は第3群第2種b～c類黒浜式期と判断される。

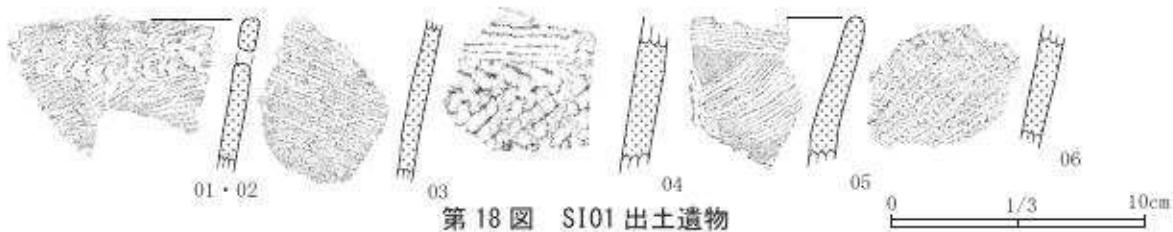
SI02はE-2グリッドで検出された。SI41を切って構築され、SI03・13・14に切られる。規模は不明であるが、円形のプランが想定される。残存深度は38cmである。遺物は黒浜式土器を主体に1330.4gが検出された。

掲載遺物は8点である。01～05は胎土中に纖維を混入する第三群第2種の土器である。01・02・05は爪形文により口縁部に沿って文様が描かれるもので、第2種a類に比定される。03は括れ部に平行沈線が描かれるもので地文は無節の縄文Lが全面に施文される。04は条線による横位の集合沈線が描かれる。c類か。05は単節RLの縄文が施文される。07・08は第3種浮島及び第5種諸磯式土器である。前者は第3種a類浮島1式古段階、後者は第5種a類と、諸磯a式土器である。

本遺構の所属する時期は黒浜式で第三群第2種でも古い段階と判断される。

SI03・34・41 (第16・17・20・22図、遺構図版2・7、遺物図版1・7)

E-2・3グリッドで検出。SI03はSI41を切り、SI34・41は後述するSI14などにも壊される。SI03は長軸約3.9m、短軸約3.3m、残存深度は13cmで、本来は梢円形を呈していた可能性がある。SI41は長軸約3.8m、短軸約3.3m、残存深度20cmで、方形に近い形状を残す。SI34は遺構の大半が調査区外に及んでおり長軸約1.9m、短軸約1.1mを検出したにすぎず、形状も不明である。SI41とSI34の残存深度は、SI41で20cm、SI34で13cmである。わずかに残った住居壁面をみると、3軒ともやや急傾に立ち上がる可能性が看取される。覆土の堆積状況はSI03・SI34・SI41とも、暗褐色土を中心とし浮島期の他の住居と同様である。柱穴の可能性があるピットもSI41とSI34ではまったく検出されていない。



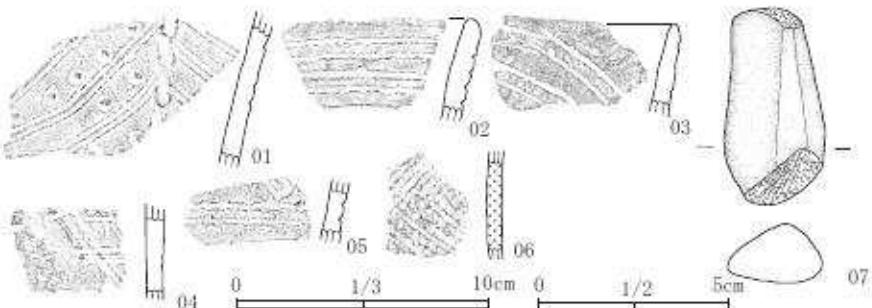
第18図 SI01出土遺物



第19図 SI02出土遺物

SI03でも3基検出されたのみである。炉跡はSI41だけで検出された。長軸約40cm、短軸約32cm、赤褐色の焼土ブロックが混入する地床炉である。

遺物はSI03で349.4g、SI41は1点のみで119gが



第20図 SI03出土遺物

出土している。その中で掲載した遺物はSI03から7点である。主に住居覆土内からの出土である。SI03の遺物の内容は、01が平行沈線で肋骨文を描き間に円管状の刺突を加える。02～05は平行沈線を用いるものである。いずれも、第三群第3種a類・b類に含まれる。06は羽状を呈する単節縄文が描かれるもので、胎土中に僅かながら纖維を混入する。07は敲石である。長椭円形の拳大の河原石を用いるもので両端部は敲打によるつぶれが観察される。材質は砂岩である。

SI41(第22図)では、01が単節L Rの縄文を施し、口縁部に棒状工具による刺突状の文様を描くもので、胎土中には多量の纖維を含む。第三群第2種a類の黒浜1式土器である。遺構もこの1点のみの出土で、該期に相当する可能性が考えられる。SI34では出土遺物はない。

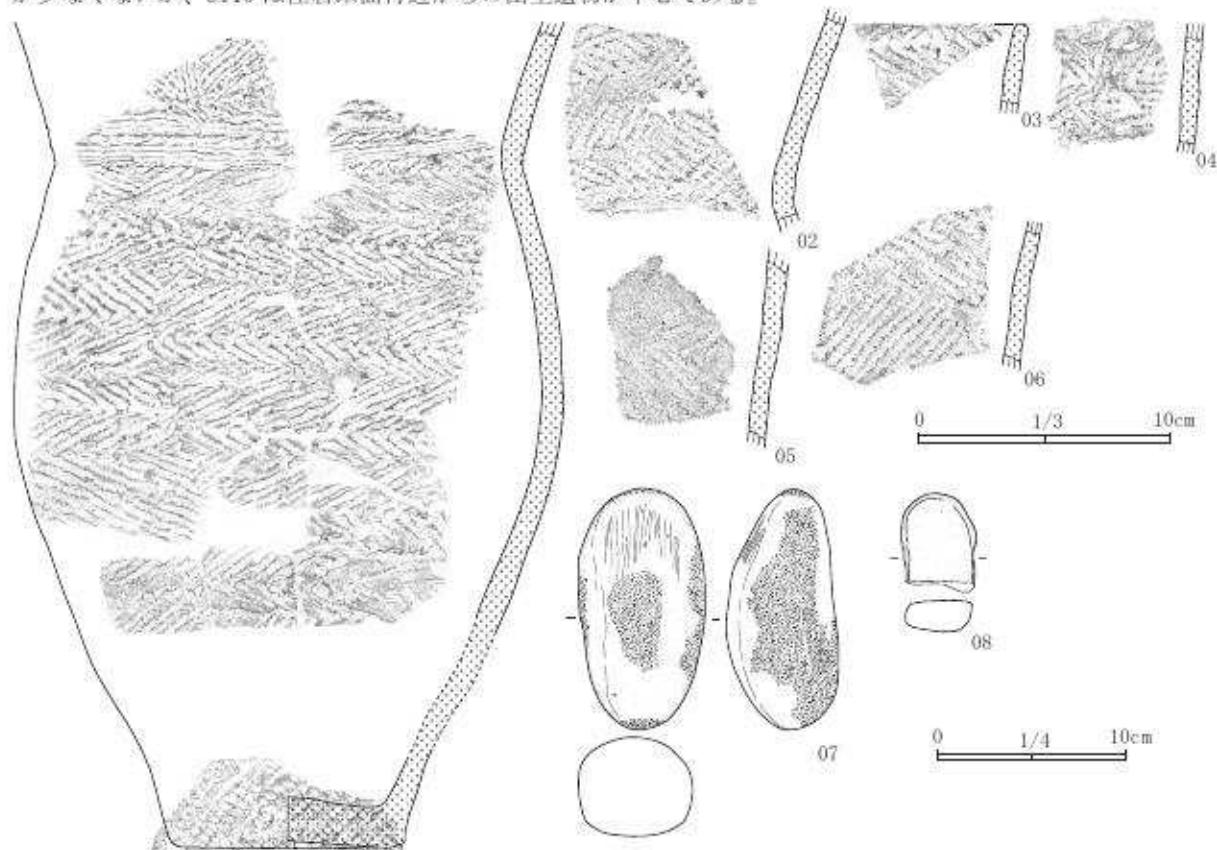
遺構の切り合い関係からはSI03→41・34と構築されたと考えられる。しかし、出土遺物ではSI03が第三群第3種a類・b類浮島1式段階の遺構と判断されるのに対して、切っているSI41は黒浜1式と古い遺構となり、離船を生じている。一方、SI34は出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、後述するSI15との重複関係から想定できる時期は第三群第2種以前の遺構と判断される。よって、SI41の黒浜1式では混入の可能性があり、SI01・02も黒浜式なので、同様の可能性が推測される。

SI13・14・15 (第16・17・21・27図、遺構図版4、遺物図版4・5)

D・E-2グリットで検出。SI14がSI13とSI15に切られる。検出された法量はSI13が長軸約4.1m、短軸約3.8m、残存深度は20cmで、方形を呈す。SI14はSI13と一部が重なるように構築され、残存した法量は長軸約3.8m、短軸約1.8m、深度29cmである。形状については明らかにしがたい。SI15も大半が調査区外のため形状等を解明しがたいが、隅丸な形状が検出されているので方形の可能性が推測される。検出できたの

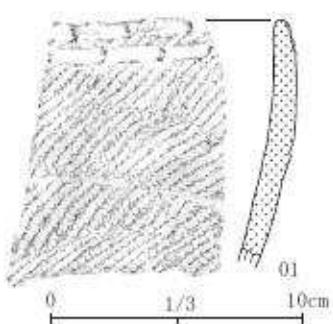
は長軸約2.8m、短軸約1.2m、深度4cmである。SI13の壁面はいくらか残っており、立ち上がりは急傾である。SI14は壁面がほとんど残っていないが、確認できた状況から推測すると、立ち上がりは急であった可能性が考えられる。SI15も断面でみると緩やかな可能性がある。覆土は、暗褐色土による土層を主体とする。柱穴の可能性があるピットはSI13で10基、SI14で7基、SI15で5基検出される。炉跡はSI13と14で検出されている。SI13の2つの炉は住居跡のほぼ中央で検出され、1号炉が長軸約44cm、短軸約28cm、2号炉は長軸約22cm、短軸約12cmの地床炉である。SI14ではSI15との切り合いに近いところで長軸約24cm、短軸約22cmの地床炉が検出されている。こちらも炭化物を含む赤褐色の焼土ブロックが堆積している。これらの地床炉は他の住居内地床炉と異なり、窪みを利用しないで炉跡が形成されている。

遺物は主にSI13と15で出土しており、SI13では5258.7g、SI15では4694.7gを出土した。SI14では胎土中に纖維を混入する土器1点が出土したが、掲載できる資料ではなかった。SI13では住居覆土内からの出土が少なくないが、SI15は住居床面付近からの出土遺物が中心である。



第21図 SI13出土遺物

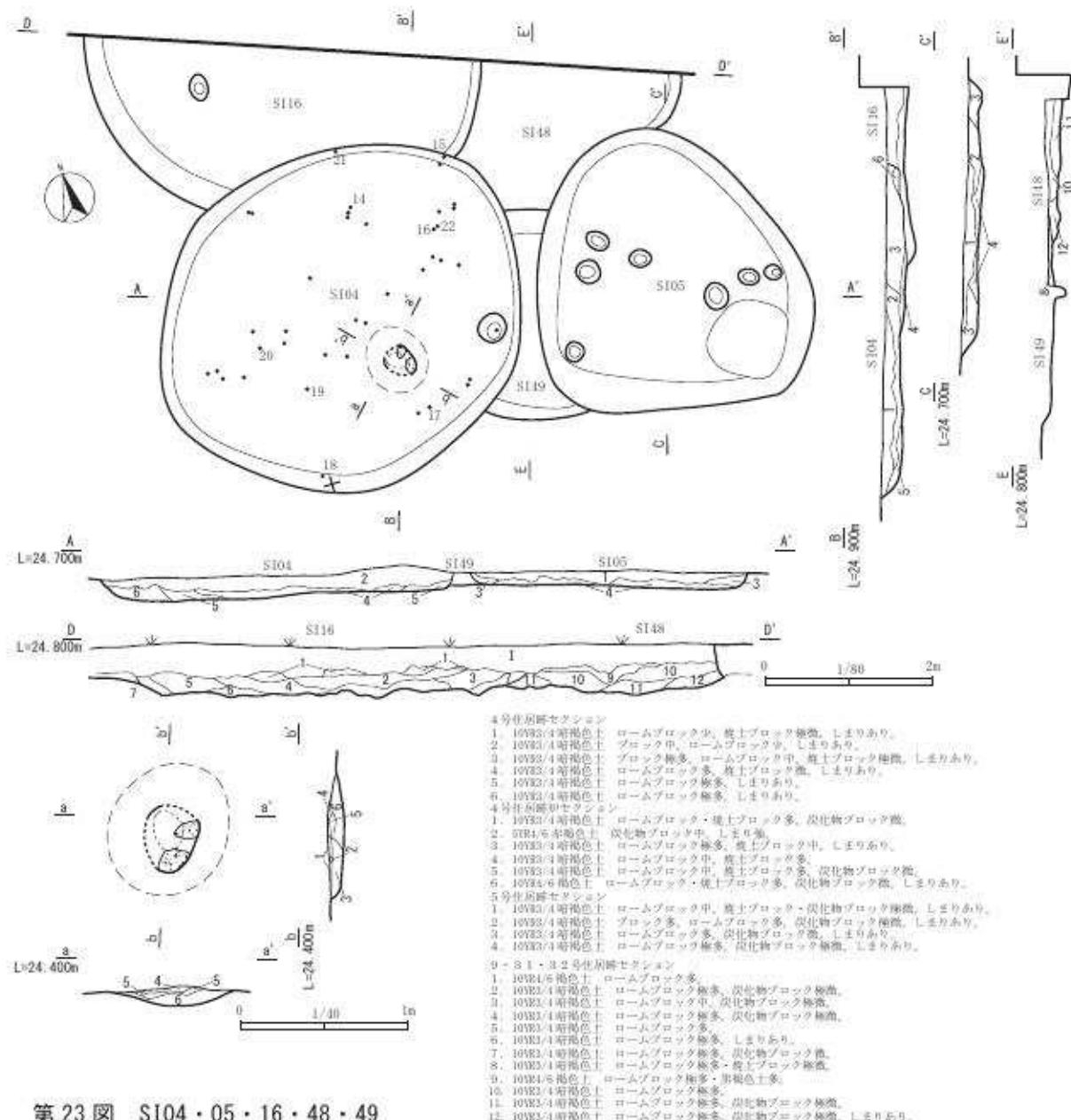
SI13の掲載遺物は8点で、01～06は胎土中に纖維を混入する。第2種黒浜式土器である。01は口縁直下から底部にかけての資料であるが、口唇部は欠損し、底部は胴部との接合が確認できない。器形はやや細身の胴部で中央付近に膨らみを有した後、括れ部で外反し大きく開く。括れ部分より上位には条線による米字状の文様が描かれるものの、胴部は比較的明瞭な羽状構成を行うものでc類黒浜3式よりも古い段階と考えられる。02はb類で平行沈線を屈曲部に配する土器である。その他はd類とした遺物である。03～06は羽状構成を行う縄文施文の土器で03では無節のRとLを結束している。07は砂岩製の石製品である。扁平な楕円形の自然礫を使用するものであるが、



第22図 SI14出土遺物

側面に対峙する位置に深く抉りこむような擦り目を施しており、石棒状の形状となっている。基部側は欠損している。08は凝灰岩質砂岩で周縁を敲石として用いる。

SI15では出土遺物が多く、その中から39点を敲選した。01～31は胎土中に纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01～07は爪形文が付されるものでa類、08～10は平行沈線を描くものでb類。11～15は肋骨文を描くものでc類、16～29は繩文を施文するe類である。繩文には単節繩文の羽状、無節の羽状、結束するもの等様々である。30は爪形状の刺突を有する。a種の底部であろう。31は弧状の平行沈線を描くものであるが地文に貝殻復縁文を鋸齒状に施文する。32～36は胎土中に纖維を混入しない資料である。32は大きく外反する口縁で口縁直下には爪形文が4条巡る。胴部には細かなLRの繩文が密に施文される。33は胴部下半の破片でやはり繩文が施文される。34は繩文地文に円形の竹管文が縦方向に刺突される。35・36は外反する口縁で口縁端部まで細かな繩文が施文される。これらは第三群第5種a類諸磯a式土器である。37は安山岩性の石皿である。破片の為に形状は明瞭ではないが、側面は直線的になり、底部及び内面皿部も平坦に作られている。



第23図 SI04・05・16・48・49

側面の周帯はほぼ直角に立つ。38は黒曜石の剥片である。剥離後に端部に使用痕が認められる。39は砂岩製の礫である。量側面に僅かながら擦り目が認められ、砥石として利用が想定できる。

出土遺物から判断して、SI13はb類黒浜2式段階と判断され、SI15は第三群第2種の遺構の可能性が考えられる。遺構は重複するなかで第三群第2種a・b類黒浜1・2式を主体とする一群と、諸磯a式土器を主体とする一群に分けられる。一方で、浮島式1a式の古段階は混入されていない点は、重要な問題を提起している。なお、遺構の切り合い関係からはSI14→13・15と構築されていることが明らかである。前述のSI03・34・41がこれらの住居跡に切られるので、SI03が浮島式期であることが問題となる。

SI04・05・16・48・49（第23～26図、遺構図版2・4・9、遺物図版1・2・5）

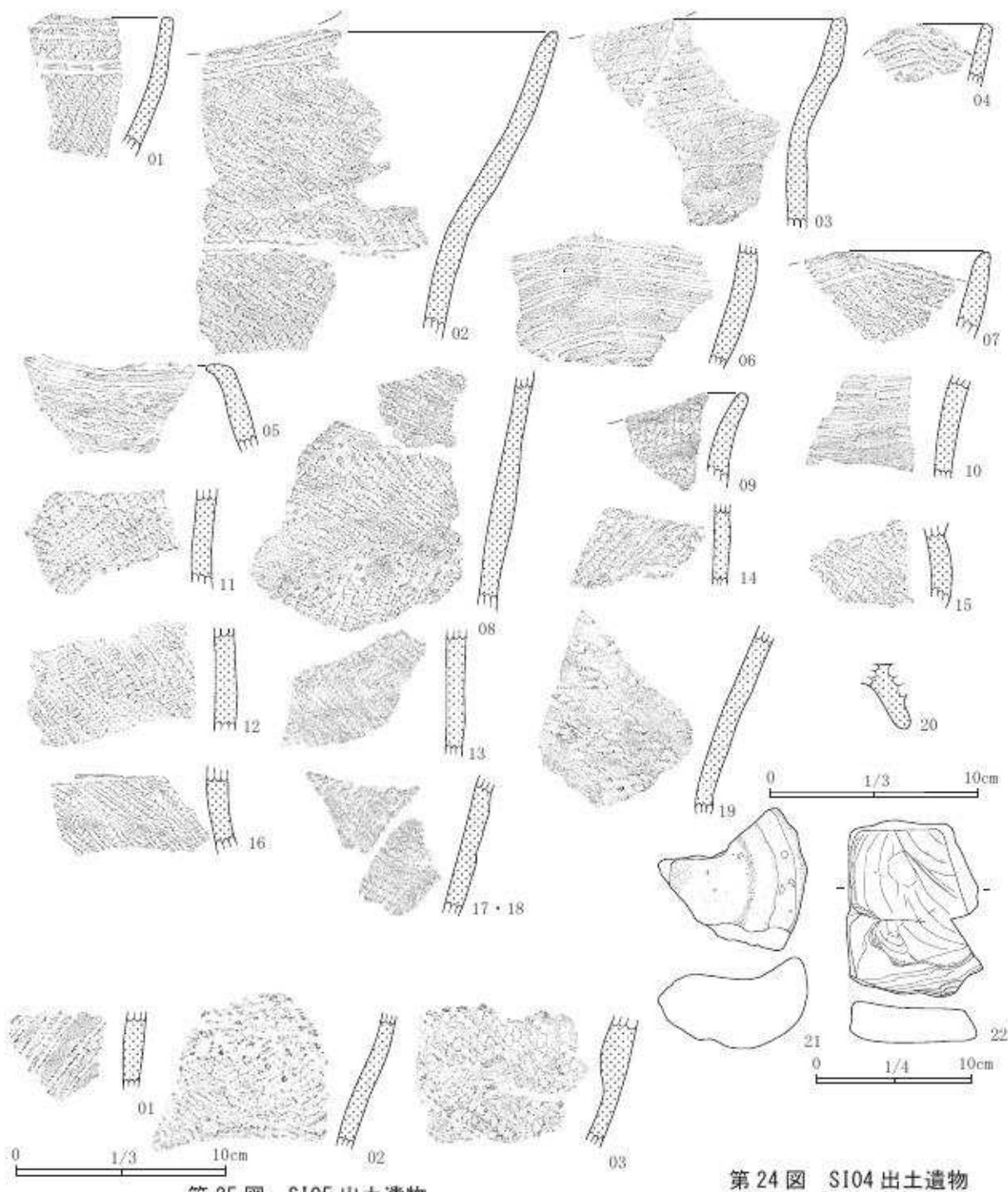
E・F-2・3グリットで検出。SI49はSI04・05に切られ、SI48はこれらの他にSI16にも切られる。そのSI16はSI04に切られる。確認できた各住居跡の規模と形状は以下の通りである。SI04は長軸約4.3m、短軸約4.1m、残存深度は25cm、ほぼ円形を呈す。SI05は長軸約3.7m、短軸約3.4m、残存深度24cmで、不整形に近い。SI16は調査区外に延びるが、検出された部分は長軸約4.8m、短軸約2.0m、残存深度16cmで、半円形を呈している。SI48とSI49は切り合いで正確な法量を推測しがたいが、SI48は長軸約4.8m、短軸約2.0m、残存深度は21cmで、SI49は長軸約2.5m、短軸約1.3m、残存深度15cmを検出した。各々の形状は不明である。SI04・05の壁は、やや急傾に立ち上がる。SI16と48では、緩やかな可能性が推測される。SI49も緩やかであった可能性が見いだせる。覆土は暗褐色土を中心とする。柱穴の可能性があるピットはSI04で1基検出され、SI05では7基が検出された。これ以外の住居跡では柱穴の可能性のあるピットは検出されていない。炉跡がSI04でのみ検出されている。住居中央よりやや南東寄りで長軸約81cm、短軸約64cmの大きさの地床炉が検出されている。窪みを利用して赤褐色の焼土ブロックが堆積している。

遺物はSI04で4304.3g、SI05で957g、SI16で520.5g、SI49で45.5gが出土した。その中で掲載遺物はSI04で22点、SI05で3点、SI16で6点を選出した。SI48での出土遺物はなく、SI49では黒浜式・浮島式土器の細片が各1点だけ出土しており、掲載する資料はない。詳細は以下の通りである。

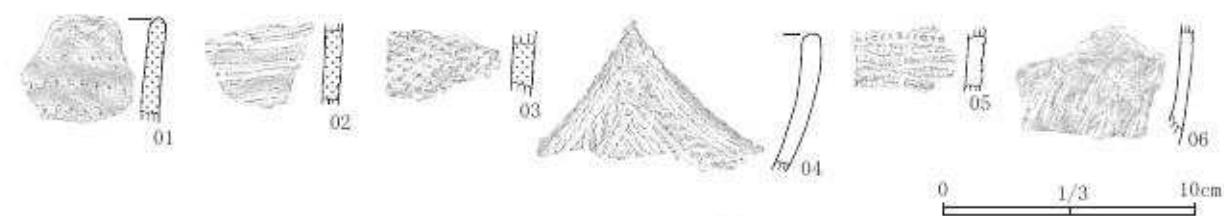
SI04出土土器にはすべて纖維が混入されるもので、第三群第2種黒浜式に相当する。01は口唇部に沿ってまばらな爪形が施されるものでa類、02～04・10・16は平行沈線による文様が描かれるもので、b類である。05～07は平行沈線を複数口唇部に横走させ05では波状を構成する。同じb類でもいわゆる植房式土器の可能性が高い。08～19は縄文を施文する胴部の破片である。e類に含めたが、11は自縄自縛の縄文、13は結束羽状縄文、19では太い縄文の結節文が施文される。02・08・12・16・18は付加条第1種の縄文を施文するもので、同一個体の可能性が高い。20は底部の資料であるが、高台状にハの字に開脚し上げ底状になっている。21は石皿の破片である。多孔質安山岩を石材とするもので、内面は塊状に窪む。周帶の断面形はやや丸みを帯びた三角形になる。22は絹雲母片岩の礫塊である。板状を呈するもので、炉石に用いられたものと判断されるが、被熱痕は少ない。被熱部分は剥落したものと思われる。

SI05から検出された遺物はいずれも纖維を混入する第三群第2種黒浜式に相当する。01は平行沈線により肋骨文を描く。第2種c類に相当し、その他は縄文のみのe類と思われる。黒浜3式土器であろう。

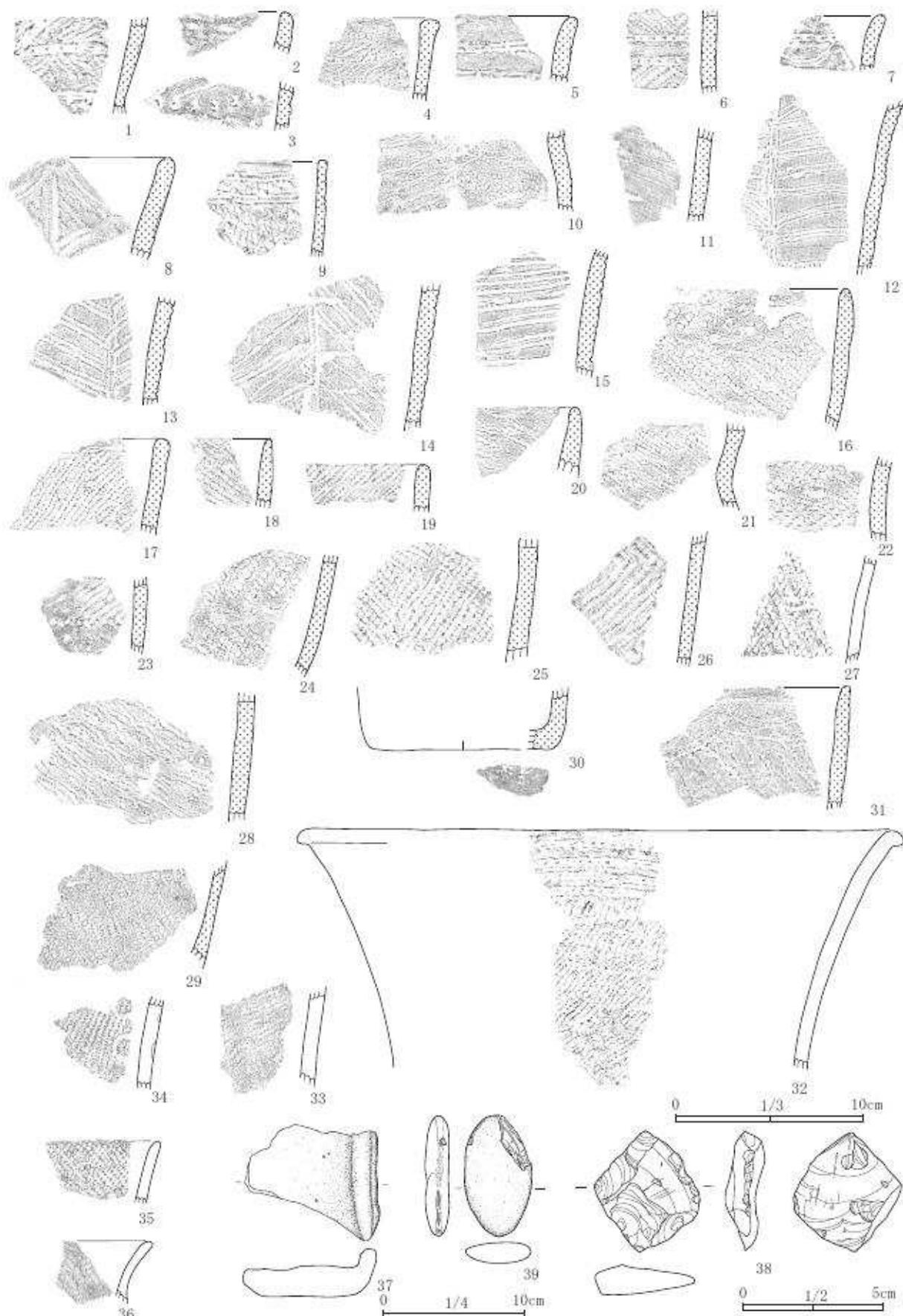
SI16の遺物は、01～03が第三群第2種黒浜式土器である。01では無文地にC字の爪形文が施文されるa類。02は平行沈線が描かれるb類。03は結束羽状縄文を施文するe類の土器である。04～06は第三群第3種浮島式土器である。04は三角形に尖る波状口縁の波頂部である。爪形文及び隆帯が口縁に沿って付される。05はC字の爪形文と平行沈線が同時に用いられ、地文に撚り糸文が施文される。06は胴下半の破片で、縦方向からやや斜めの粗雑な撚糸文が施文される。いずれも第3種a類浮島1式古段階の遺物である。



第24図 SI04出土遺物

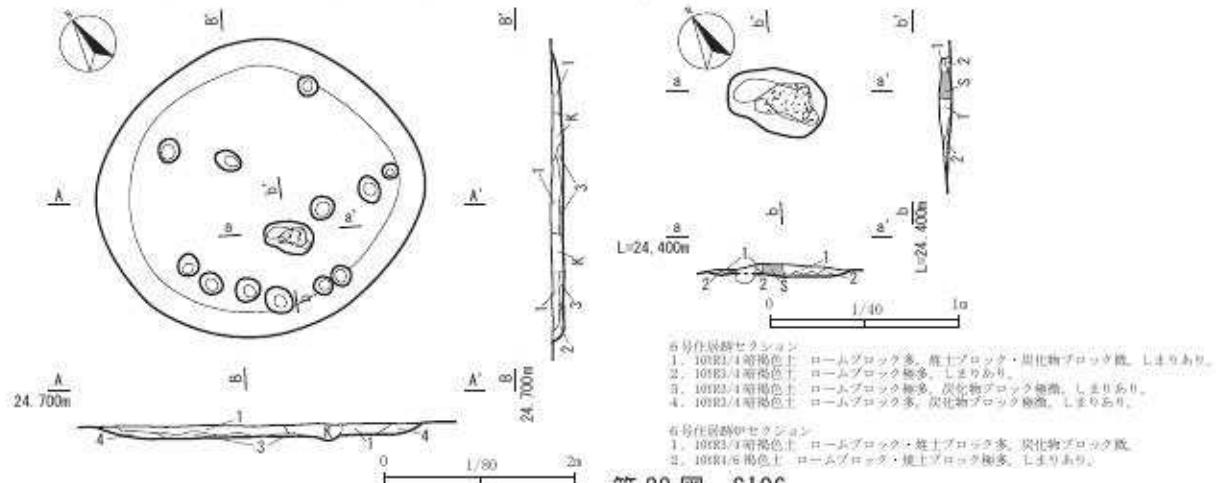


第25図 SI05出土遺物



第27図 SII15出土遺物

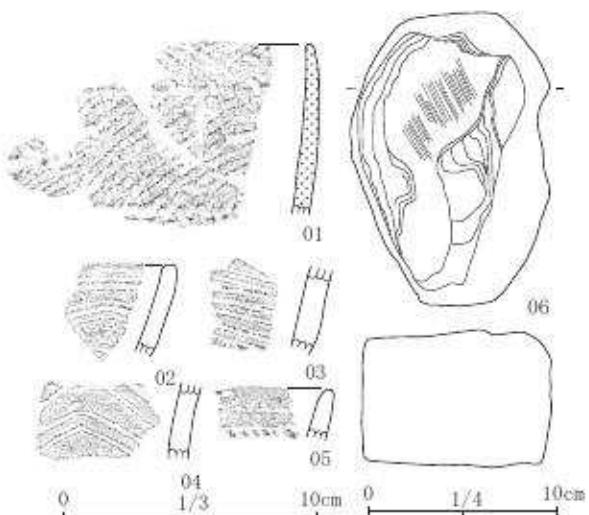
出土遺物から SI04 は第 2 種黒浜式でもやや古い段階になるものと判断され、SI05 は黒浜 3 式土器であろう。SI16 では第 2 種と第 3 種が出土しているが、遺物のまとまりから判断して、遺構は第 3 種 a 類浮島 1 式古段階と判断される。一方、遺構の切り合い関係から SI48 → 49 → 16 → 04 と構築され、SI05 は SI04 か SI16 とほぼ同時期と考えられる。以上、切り合い関係と合せて考えると、浮島 1 式古段階出土住居跡を黒浜式の住居が切ることになり、遺構と遺物の関係が時期的には合致しない。



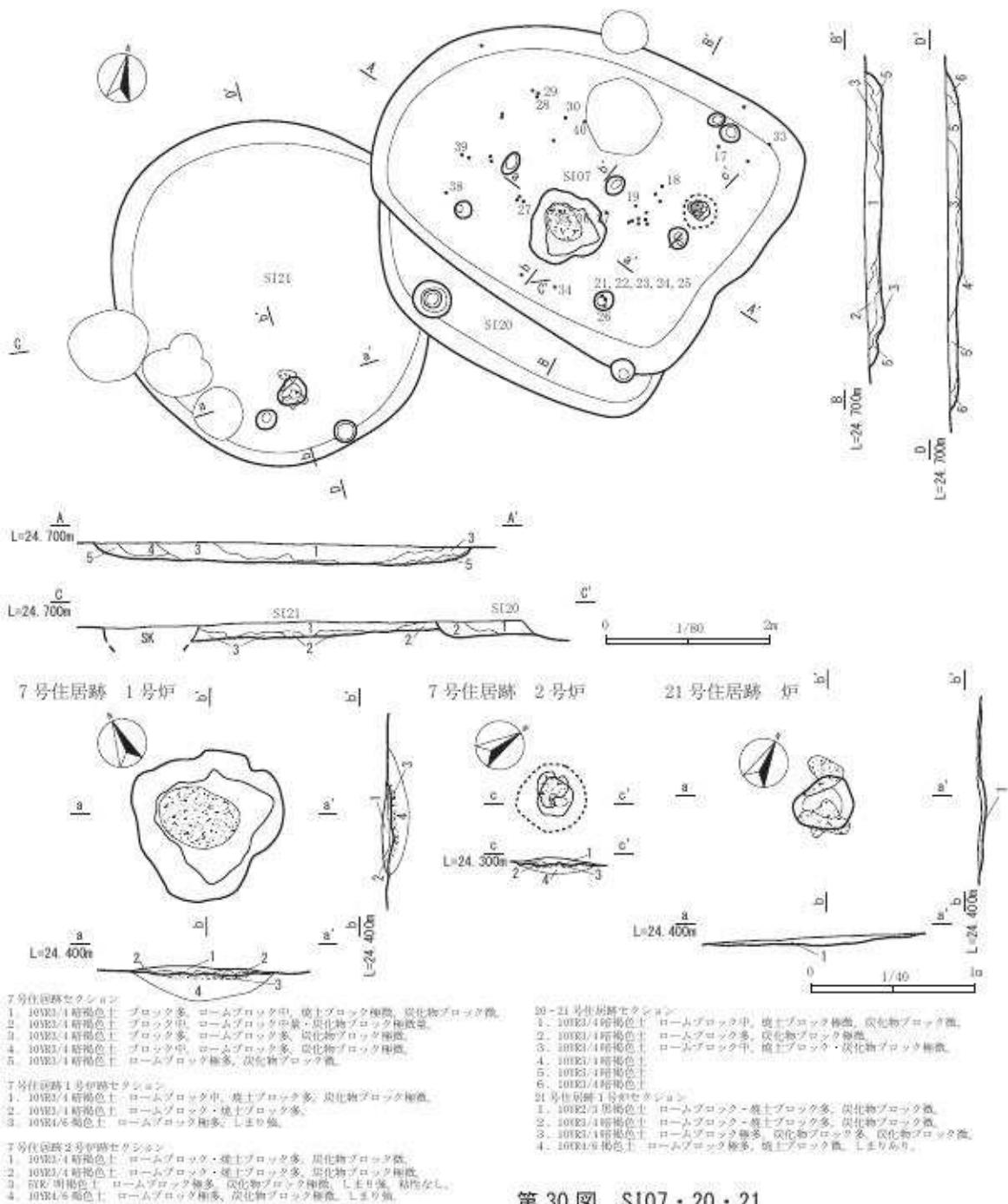
第 28 図 SI06 (第 28・29 図、遺構図版 3、遺物図版 2)

E-3 グリットで検出。この遺構を壊す住居跡・土坑はない。長軸約 3.5 m、短軸約 3.2 m、残存深度 21 cm で、円形を呈す。壁の立ち上がりはやや緩やかである。覆土は、暗褐色土にロームブロックが多く混じる。柱穴の可能性があるピットは 12 基が検出された。地床炉は住居跡の中央からやや南寄りに 1 基検出されている。この炉跡は長軸約 54 cm、短軸約 32 cm の法量で見出され、住居床面のわずかに落ち込んだ窪みを利用して構築されており、炭化物を含む赤褐色の焼土ブロックが多く堆積している。この炉跡では絹雲母片岩のやや厚みのある扁平な岩塊が置かれていたのが特徴である。石の大きさは長さ約 15.8 cm、厚さ約 7.6 cm で平坦な面を上に置かれていた。上面の一部には擦痕が確認され石皿などの転用の可能性がある。上面を中心に石自体に赤褐色の部分が確認され、被熱痕と思われる赤変が全体的に見られる。SI21 と同様、意図的に平坦面を上にして置かれた可能性が推測される。この仮説に立脚すれば、煮沸する土器類をこの上で置くための炉石であったと推測される。

2033.1 g の遺物出土が確認され、その内 6 点を掲載した。具体的には、01 が第三群第 2 種黒浜式土器で羽状の文様が構成される口縁部の大破片である。02 ~ 05 は第三群第 3 種浮島式土器である。02 ~ 04 は平行沈線による文様を描く b 類の土器群である。05 は変形爪型を用いるもので第 3 種 c 類。06 は前述した扁平な岩塊である。破片資料が大半なこともあり詳細は言及できないが、出土遺物より本遺構は第三群第 2 種または第 3 種の可能性があり、住居の形態並びに炉石の出土から黒浜期と判断した。第 3 種の土器は重複による混入と考えられる。



第 29 図 SI06 出土遺物



第30図 SI07・20・21

SI07・20・21 (第30~33図、遺構図版3・5、遺物図版2・3・5)

F-3グリットで検出。SI21がSI20に切られ、SI20はSI07に切られる。他にSI21はSK382に住居壁面の一部を壊されている。なお、SI07はSI11も壊している。SI07は長軸約5.3m、短軸約4.2m、残存深度は19cmで、梢円形を呈す。SI20はSI07がほぼ重なるように構築されたため、ほとんど残っていないが、残存部の法量は長軸約3.9m、短軸約0.9m、残存深度18cmである。SI21はほぼ円形で長軸約4.2m、短軸約3.9m、深度23cmを残す。住居壁面の立ち上がりはすべての住居跡で確認され、SI07・21では緩やかな立ち上がりと思われる。SI20はほとんど残っていないが緩やかに立ち上がる可能性がある。覆土は、暗褐色土で周辺の住居と同様である。柱穴の可能性があるピットはSI07で7基、SI20で1基、SI21で2基検出された。炉跡はSI07とSI21で検出されている。SI07の1号炉は住居中央よりやや南側で長軸約92cm、短軸約90cmの大きさの地床炉

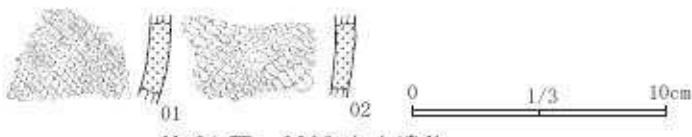
が検出されている。2号炉は長軸約43cm、短軸約40cmで炭化物や赤褐色の焼土ブロックを含む土層の堆積が認められる。SI21も住居南側の壁面付近で長軸約44cm、短軸約41cmの大きさの地床炉が検出された。SI07と同じく覆土には炭化物を含む赤褐色の焼土が見られる。地床炉で特徴的のはSI21において、SI06と同様に扁平な礫が炉の上で検出されていることである。礫は長さ21cm、重さ3.4kgの絹雲母片岩で、石材の旧表面には被熱による赤片が観察される。

遺物は主にSI07と21で出土しており、SI07では6270g、SI20では127.9g、SI21では6058.9gが出土している。その内、SI07から38点、SI20から2点、SI21から11点を掲載した。住居覆土内からの出土が多い。

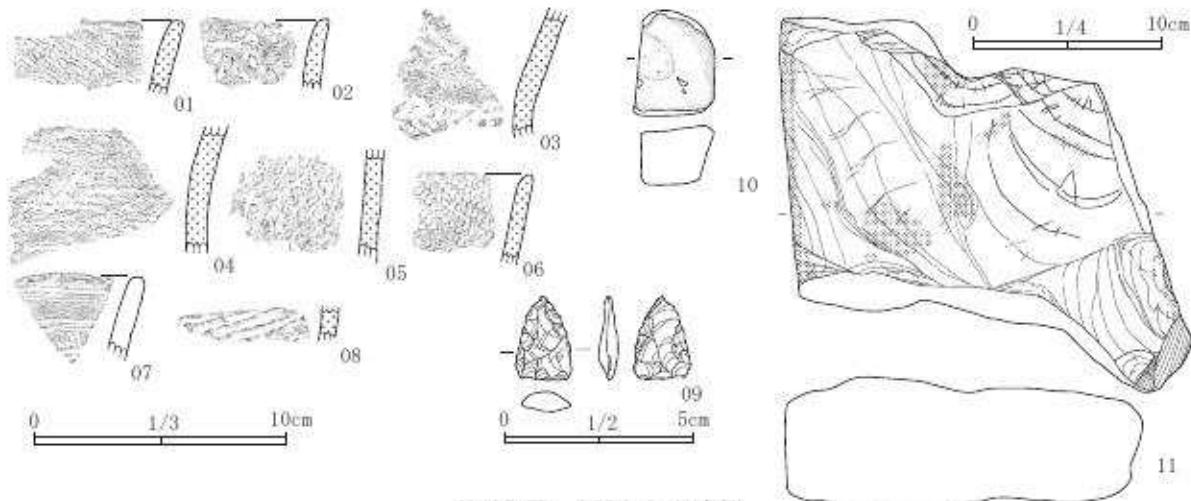
SI07の出土土器はすべて纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01～06は平行沈線を用いるもので、b種黒浜2段階であろう。06・07・11は単沈線状の爪形文を施文するものでa類の可能性がある。08～10は平行沈線を多段に施文するものでb類でも植房式の可能性がある。12～23は縄文のみ施文される土器群で、e類とした。16・20は結束羽状縄文である。24～29は底部の資料である。30はチャートの剥片である。扁平な河原石を立てて上面から打撃を加えたものであろう。両極に打点が認められる。二次加工は確認できず、剥片と判断した。31は多孔質安山岩の石皿である。周縁はやや三角形に張り出し、内面は皿状に窪んでいる。32は梢円形の自然石を用いるもので側縁に僅かに敲打痕及び擦り目が観察される。石材は頁岩で敲石とした。33は断面が三角形で長梢円形の自然礫の三角形の頂部を用いて擦磨石とする資料である。北陸地域で特殊磨石と称されるものに類似している。時期は縄文早期末から前期と考えられている。35は凹石である。円形を呈し上下両面に窪みが穿たれる。石材は花崗岩。34は長梢円形の自然礫を用いるもので一方が細く尖った硬質砂岩を選択している。先端部はあまり明瞭ではないが側面端部に敲打及び擦痕が観察される。36・37・38は絹雲母片岩の炉石である。本来1枚の石材であったものが、石の性質上3点に破損して出土したものであろう。

SI20の01は第三群第2種黒浜式土器である。いずれも単節縄文のみでe類に分類される。遺構の所属時期は細分できないが黒浜式期である。

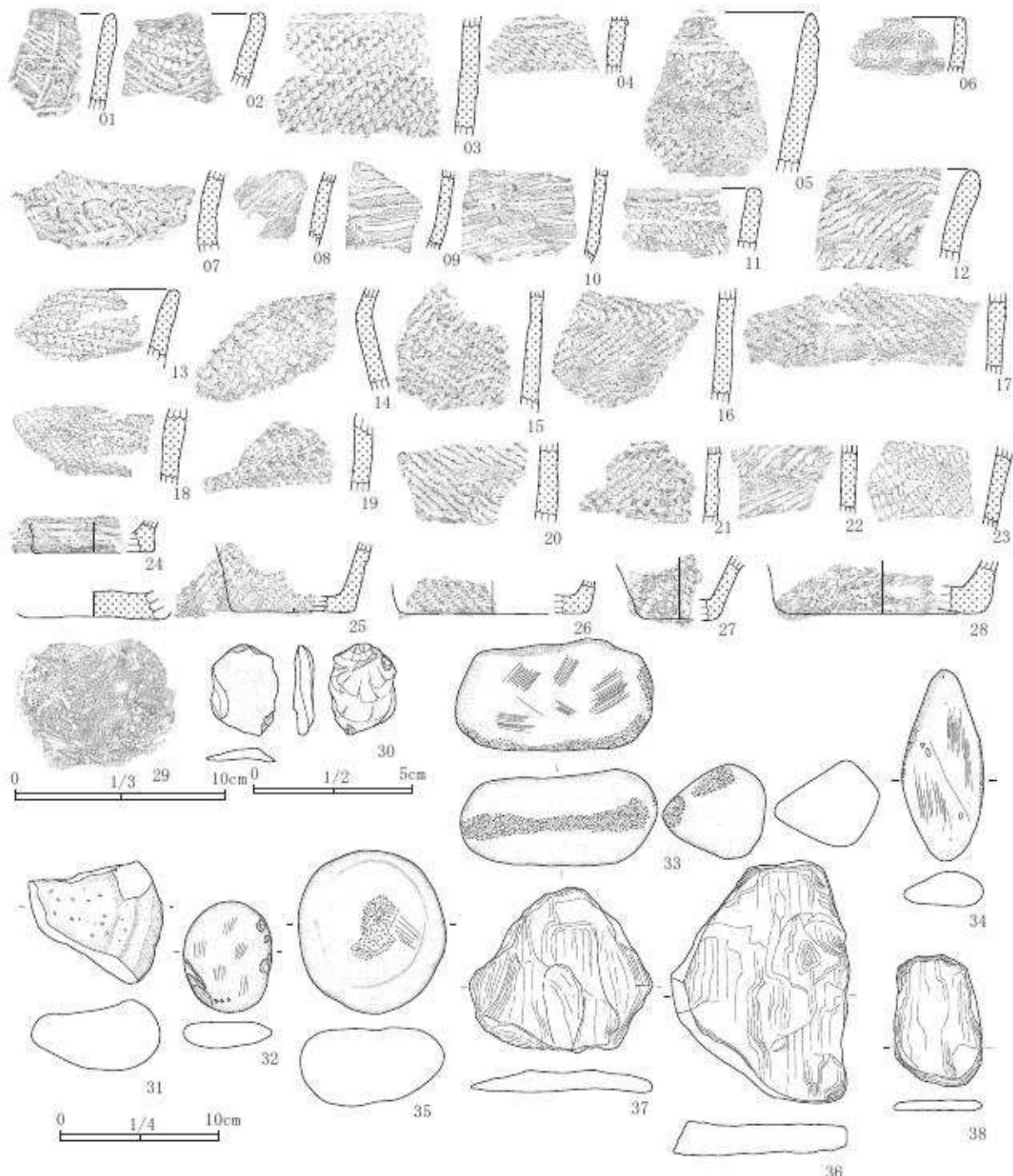
SI21では、01は口縁部の細片で無節のRの付加条第1種縄文である。02は単節LR。03は末端ループ文。04は無節Rの縄。05は網目状撚糸文を施文するもので、第2種f類土器である。大木系の土器と考えられる。遺



第31図 SI20出土遺物



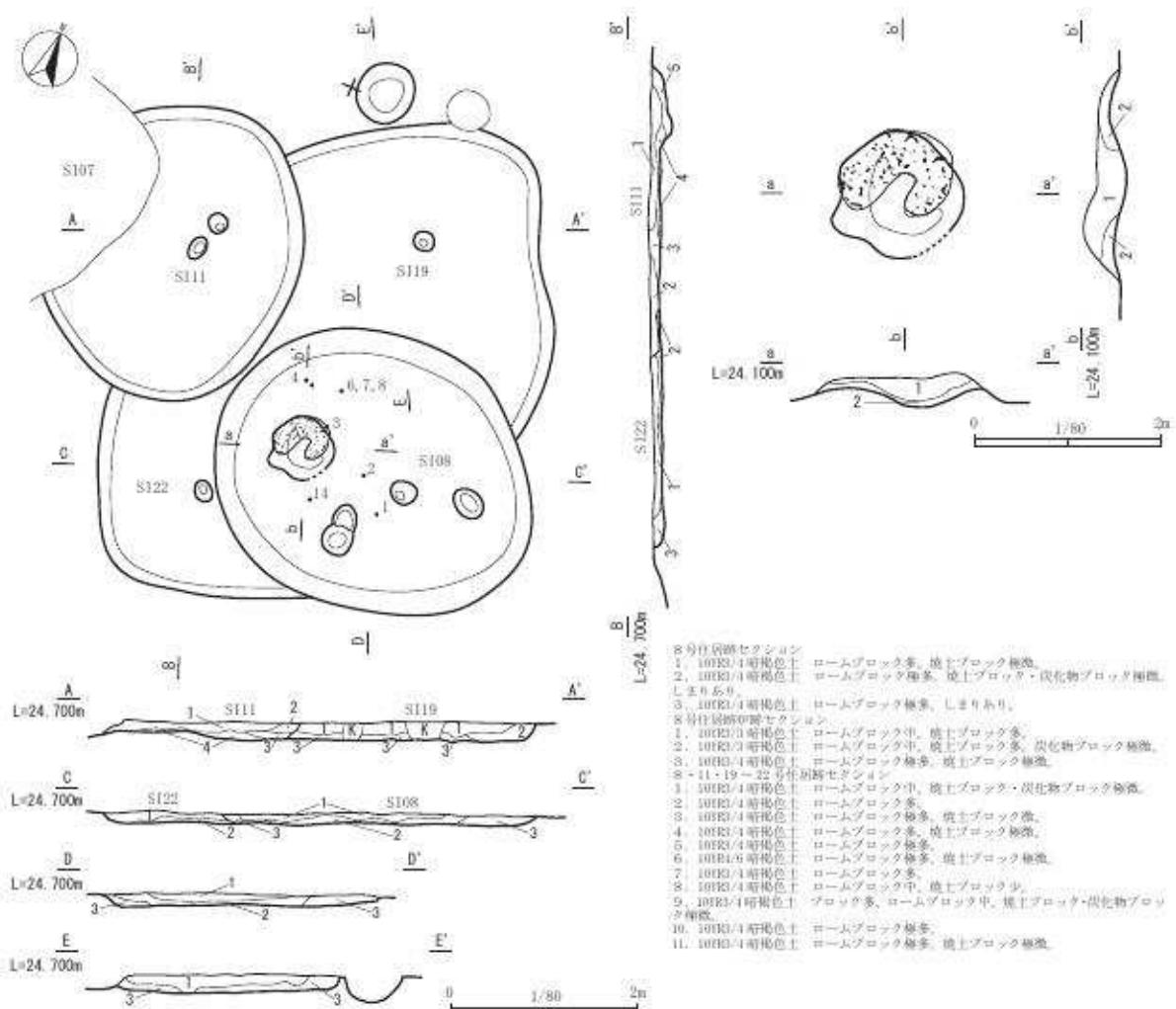
第32図 SI21出土遺物



第33図 SI07出土遺物

構外出土遺物では確認されていない。06は単節LRの縄文。07は平行沈線を用いる第3種b類浮島I式新段階の土器。08は無節の縄文が施文される第2種e類の遺物である。09はメノウ製の石鏃である。基部は平基で側縁は緩やかに内湾する平基三角鏃である。10は凝灰質砂岩の石皿の破片であろう。折損部分を磨って平坦に整形している。11は絹雲母片岩の炉石と判断される人頭大の扁平な砾である。周縁は熱による変化が観察される。また上面には僅かながら窪みが穿たれる。

出土遺物から判断して、SI07は黒浜式でもやや古手で、黒浜2式段階であろう。SI21は、出土遺物より1点浮島式土器が混入するものの第2種黒浜式期と判断される。それに対して、遺構の切り合い関係からSI21→20→7と構築されたと考えられる。

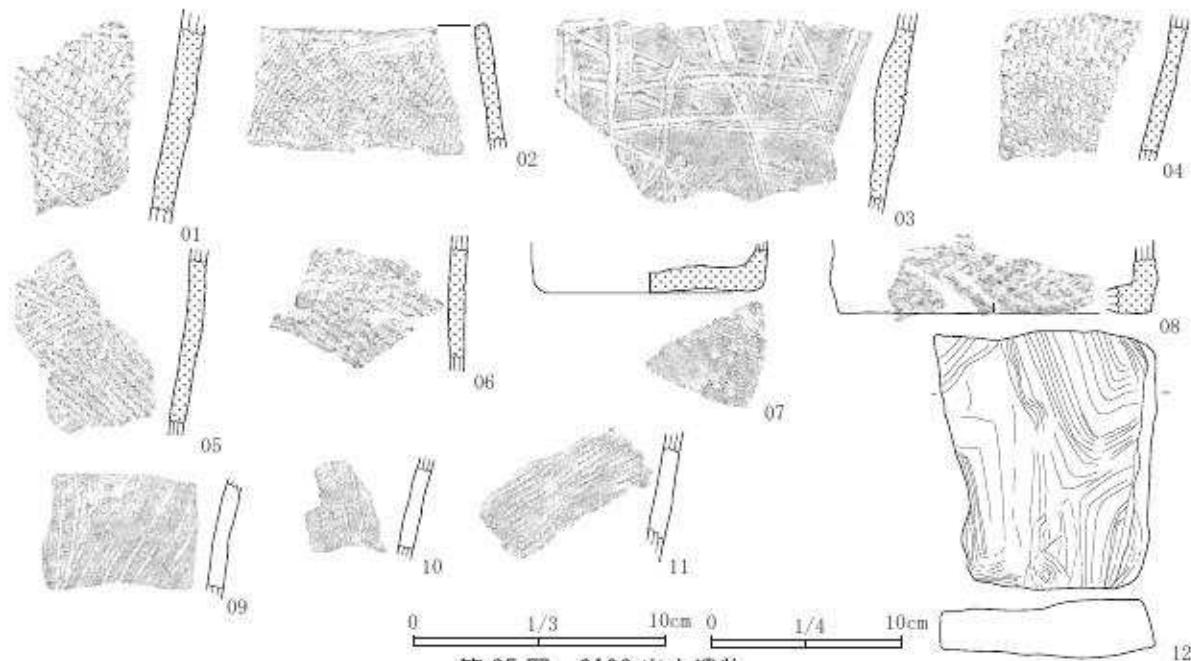


第34図 SI08・11・19・22 (第34~37図、遺構図版3~5、遺物図版3~5)

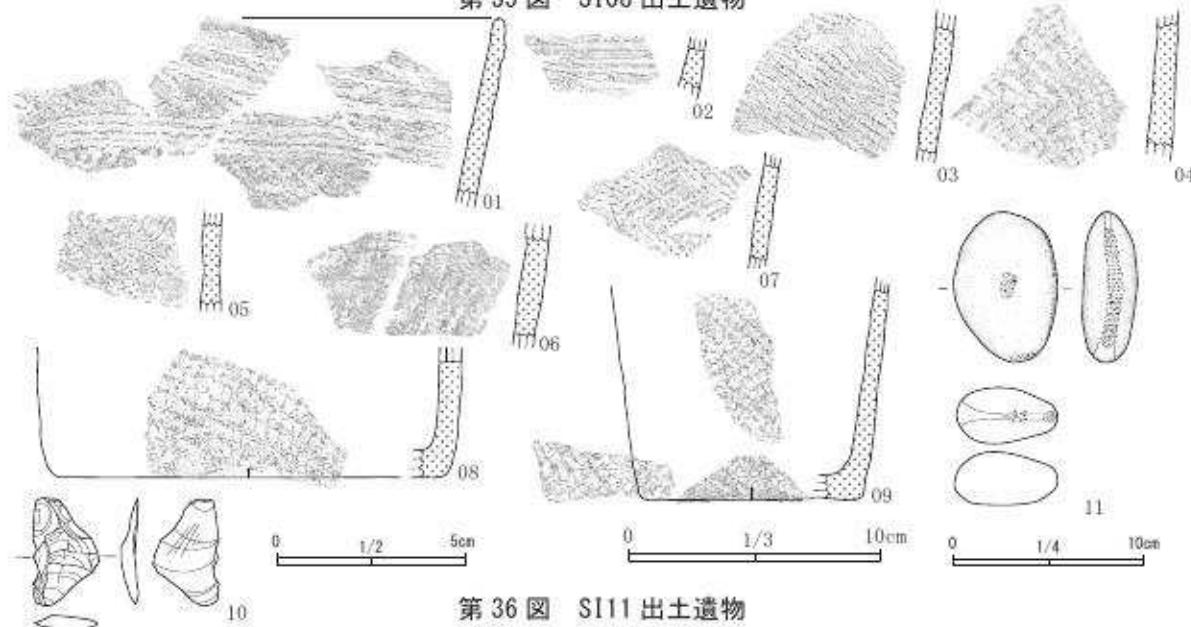
F・G-3グリットで検出。SI19・22はSI08・11に切られ、SI11は前述のSI07に切られる。一方、SI19と22の切り合い関係は不明である。他にSI19の壁面の一部がSK17に壊される。確認できた各住居跡の法量と形状は以下の通りである。SI08は長軸約3.5m、短軸約3.0m、残存深度は約15cmでほぼ円形を呈す。SI11は長軸約3.3m、短軸約2.7m、残存深度約15cm。SI07に一部が壊されているが、ほぼ円形に近い形状と推測される。SI19・22は検出部分では長軸約3.9m、短軸約3.8m、残存深度約18cmと長軸約2.9m、短軸約1.4m、残存深度約13cmである。それぞれ住居の角が隅丸方形なので方形を呈していた可能性が推測される。壁の立ち上がりはSI08・SI11・SI22ではやや急傾に立ち上がる。他のSI19・22では残存高がほとんどないこともあり、不明である。覆土は暗褐色土で、ロームブロックを多く含み焼土が微量混じる。柱穴の可能性があるピットはSI08・11で検出され、SI08では3基、SI11で2基が検出されている。これ以外の住居跡では柱穴の可能性のあるピットは1基しか検出されていない。炉跡はSI08だけで検出されている。住居中央よりやや西寄りで長軸約72cm、短軸約66cmの地床炉が検出されている。

遺物はSI22を除いてすべての住居跡で出土している。その重量は、SI08で1785.5g、SI11で933.7g、SI19で1071gである。いずれの住居でも深度の浅さを考慮すると、覆土内でも住居床面付近の遺物だけが残っていたと思われる。具体的には、以下の通りである。

SI08の01~08は織維を混入する土器である。第三群第2種黒浜式土器を主体とするもので、遺構の時期も



第35図 S108出土遺物



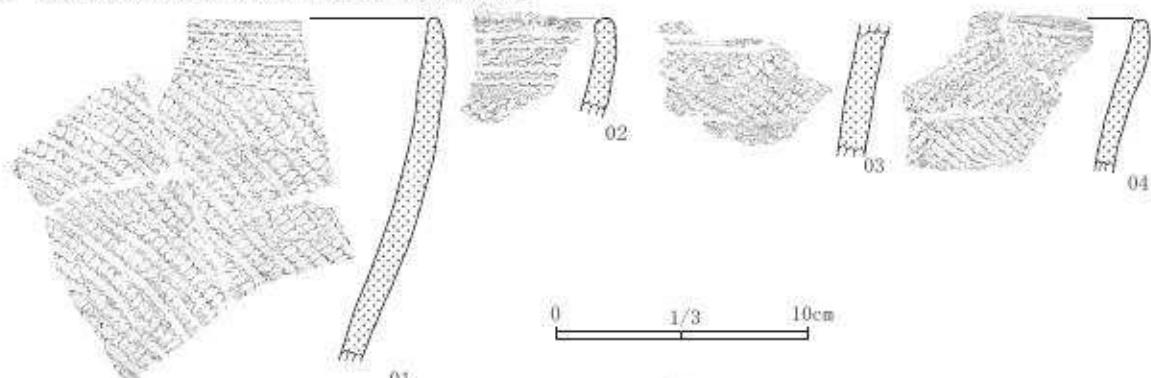
第36図 S111出土遺物

この時期と判断される。09は第三群第3種a・b類の浮島I式土器胴部下半部の破片である。10は同e類の貝殻復縁を鋸歯状に施文する破片。11は第5種a類諸磯式a式土器であろう。12は台形で板状を呈する絹雲母片岩である。上面に窪みが穿たれ、全体に被熱により赤変している。炉石として用いられたものであろう。

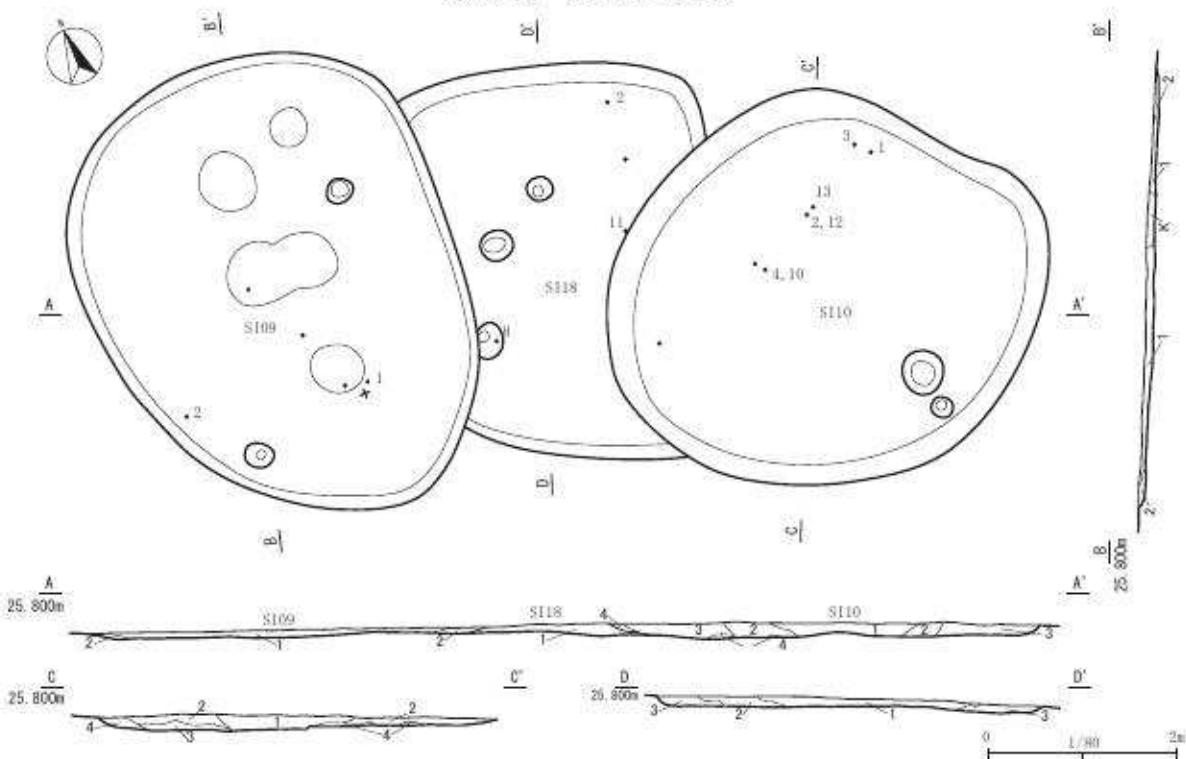
S111の01～09も、いずれも胎土中に纖維を混入する第2種黒浜式の土器である。01は緩やかな波状を呈する口縁部の破片である。口縁に沿って1単位4条の条線が2重に巡る。地文は単節RLの縄文。施文技法から第2種b類と判断される。02は平行沈線による文様が描かれるもので地文は確認できない。やはりb類であろう。03は0段多条のRL、04はLRとRLの結束羽状縄文。05は単節LRの縦回転施文。06は単節LR縄文。07は無節の縄文のLとRの結束羽状縄文。08は底部付近の資料。単節RLの縄文施文。09は底部及び胴下半の資料で、接合できないが同一個体。底部はほぼ平坦で胴部には単節RLとLRの縄文が羽状に施文される。10は縦長のチャートの剥片である。背面の剥離状況はポイントフレークを思わせる剥離を行っている。11は自然の円礫を利用する敲石側面と上面の中央に敲打痕が観察される。材質は硬質砂岩。

SI19の01～04も第三群第2種黒浜式土器である。01は口唇部から胴上半部の大形破片である。口縁に沿って間隔の広い爪形文が施文されるもので、a類。02・03は平行沈線を用いる遺物で、b類、04は結束羽状繩文が施文される。

遺構の切り合い関係からはSI19・22→SI08・11(→SI07)と構築されている。出土遺物からは、SI08が遺物量から判断して黒浜2式段階と判断され、混入した前期後半の土器群は、重複する遺構または後世の擾乱により混入した遺物と判断される。SI11は第2種b類黒浜2式期と考えられ、SI19は第三群第2種黒浜式a・b類段階と判断される。SI22は出土遺物がなく、時期不明である。重複関係から想定できる時期は第三群第2種以前の遺構と判断される。切り合い関係がある一方で、ほとんどの遺物が2種黒浜式期に該当するので、ある程度一定期間に建て替えられた住居跡と推測される。



第37図 SI19出土遺物



第38図 SI09・10・18

9・10号住居跡セクション
1. 10023/4 砂場色土 ロームブロック多、焼土ブロック少。
2. 10020/4 砂場色土 塩化物ブロック多、焼土ブロック少。
3. 10023/4 砂場色土 ロームブロック多、塩化物ブロック少。
4. 10023/4 砂場色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少。
5. 10022/4 砂場色土 ロームブロック極多。
6. 10020/4 砂場色土 ロームブロック極多、塩化物ブロック極少。

18号住居跡セクション
1. 10023/4 砂場色土 ロームブロック極多、焼土ブロック少。
2. 10020/4 砂場色土 ロームブロック多、焼土ブロック少。
3. 10023/4 砂場色土 ロームブロック極多。

S109・10・18（第38～41図、遺構図版4・5、遺物図版3・5）

E・F-3・4グリットで検出。SI18はSI09・10に切られるが、SI09とSI10の新旧関係は遺構の検出状況からは不明である。検出した法量はSI09が長軸約5.4m、短軸約4.0m、残存深度は7cmで、楕円形を呈す。SI10は長軸約4.7m、短軸約4.2m、残存深度18cmで、こちらも楕円に近い形状を呈す。SI18は長軸約4.1m、短軸約3.5m、残存深度12cmを測るが、SI09・10に壊されているため形状等は不明な点が多い。壁の立ち上がりはいずれの住居跡でもほとんど確認できず不明である。覆土は、周辺の遺構と同じく暗褐色土を中心にロームブロックが混じる。柱穴の可能性があるピットはSI09で2基、SI18では3基、SI10では2基が検出されただけである。炉跡の検出はない。

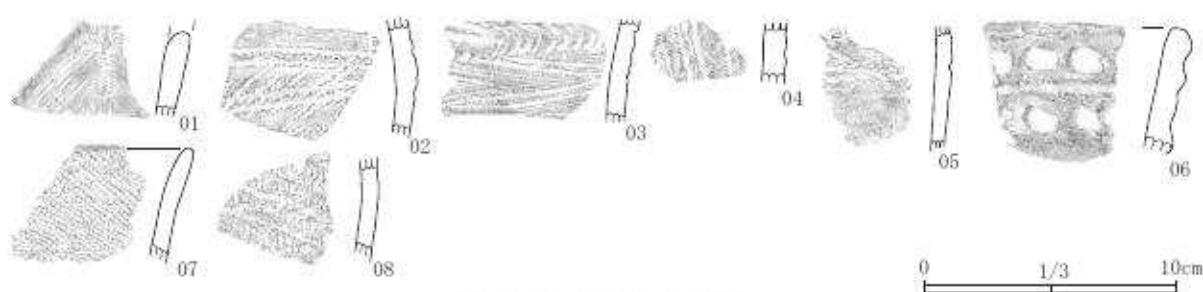
遺物はいずれの住居で出土しているが、床面に近い住居覆土内からの出土である。各住居の出土遺物の重量は、SI09で478.5g、SI10で489.7g、SI18で467gである。

SI09では出土した遺物の中から8点を掲載した。01は三角形に尖る波状口縁の波頂部付近の破片である。口縁に沿って変形爪形文が施文され、地文には条線が引かれている。波頂部から平行端沈線が列点状に描かれた肋骨文を意識する。02～05では変形爪形文が施文される。いずれも第3種c類の浮島2式土器である。06は折り返し部分に指頭により圧痕を加える口縁部の破片で第3種d類の土器である。07は緩やかに外反する口縁部の破片で全面にRLの単節繩文が施文される第5種a類諸磯a式土器である。08は胴下半の土器で付加条第1種の繩文が施文される。やはり第5種a類諸磯a式土器である。

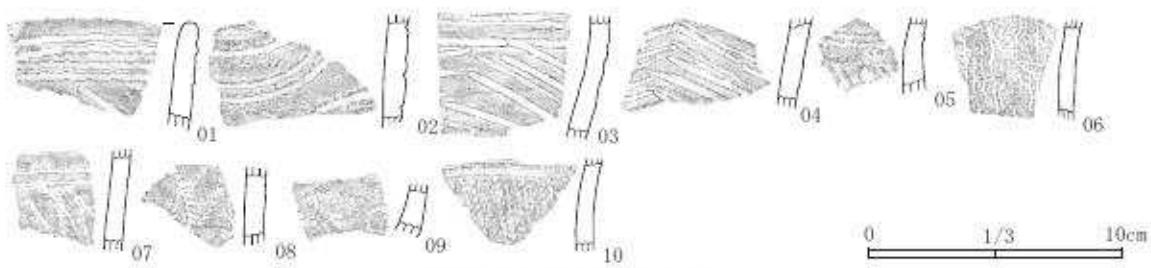
SI10の掲載遺物は10点である。01～05は平行沈線による文様を描くものである。02で曲線となる以外は直線を用いている。05では区画内に刺突が施される。06は胴部下半で燃糸文が施文される。いずれも第3種b類浮島1式の新段階に遺物である。07は地文に肋脈を有する貝殻腹縁の鋸歯文が施文され平行沈線が描かれる。08は07同様の貝殻腹縁円文が施文される。09は胴部下半の資料で無文。10は単節LRの繩文が地文に施文され平行沈線が横位に走る。08は第3種e類、10は第5種b類の遺物である。

SI18では7点を掲載した。01～07は第三群第3種浮島式土器である。01・02・03は口唇に沿って爪形文が配され、以下に平行沈線による文様が構成される。地文は燃糸文である。第3種a類と思われる。04は平行沈線を描くもので第3種b類。05・06は変形爪形文が用いられるものでc類。07は肋脈が明瞭な貝殻復縁文が密に施文される。e類とした。

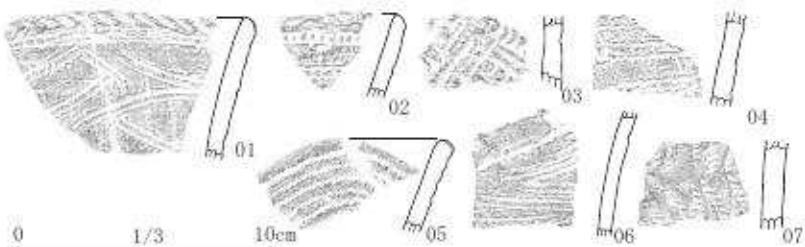
以上、SI09の時期は変形爪形文を多用する点から第3種c類浮島2式と判断される。浮島3式及び諸磯a式土器は混入遺物と判断した。出土遺物からSI10は第3種b類浮島1式新段階と考えられ、SI18は第3種浮島1式段階から2段階にかかるものと判断される。一方、遺構の切り合い関係からはSI18→09・10となるが、出土遺物からもSI09が最も新しいことは確実であり、SI10・18の新旧関係もほぼ符合する可能性が考えられる。



第39図 SI09出土遺物



第40図 SI10出土遺物



第41図 SI18出土遺物



第42図 SI12

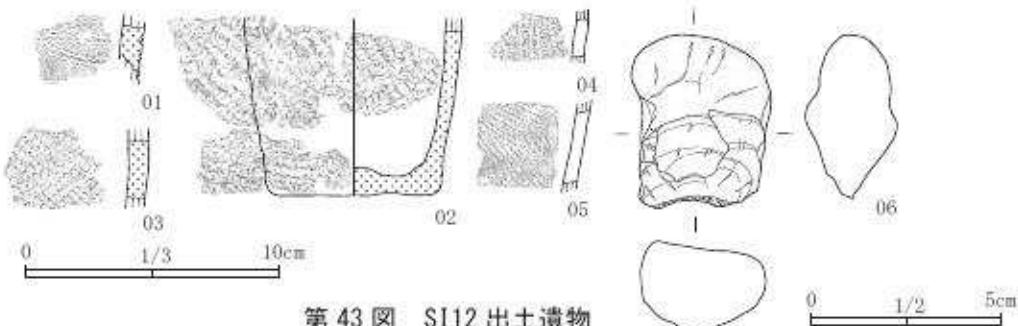
SI12（第42・43図、遺構図版4、遺物図版4）

F・G-3グリットで検出。この遺構を壊す住居跡・土坑ではなく、SI22に接する。残存する法量及び形状は長軸約3.7m、短軸約2.7m、深度18cmで、方形に近い形状を呈す。わずかな残った壁面によって、壁の立ち上がりは緩やかであった可能性が見出せる。暗褐色土による覆土で、柱穴の可能性があるピットや炉跡は検出されていない。

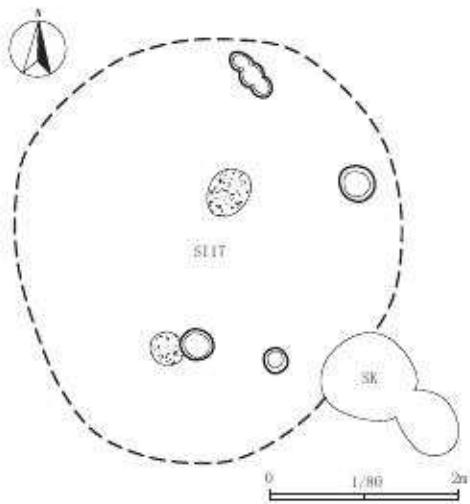
遺物は床面付近であったと思われる住居覆土から出土した。いずれも住居内の壁面寄りである。出土遺物の全重量は430.9gあり、その中で掲載した遺物は6点である。01～03はいずれも胎土中に纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01は肋骨文を意識する眼鏡状の平行沈線を描くもので黒浜3式の土器と考えられる。02は胴部下半から底部の資料。

03はb類平行沈線を屈曲部に配する土器である。その他はd類とした遺物である。羽状構成を行う縄文施文の土器で結束するものはない。04・05は混入土器片であろう。04に纖維は見られず平行沈線が描かれる第三群第3種c類浮島式の土器である。また05は第5種a類諸磯式a式土器であろう。06はチャートの敲石であろう。石核として打ち欠いたものの、剥片としての素材に適しなかったものが剥離部分を敲打により潰している。

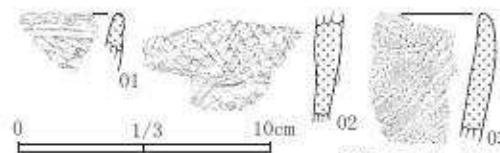
以上の遺物から、遺構の時期は黒浜3式段階と判断される。



第43図 SI12出土遺物



第44図 SI17

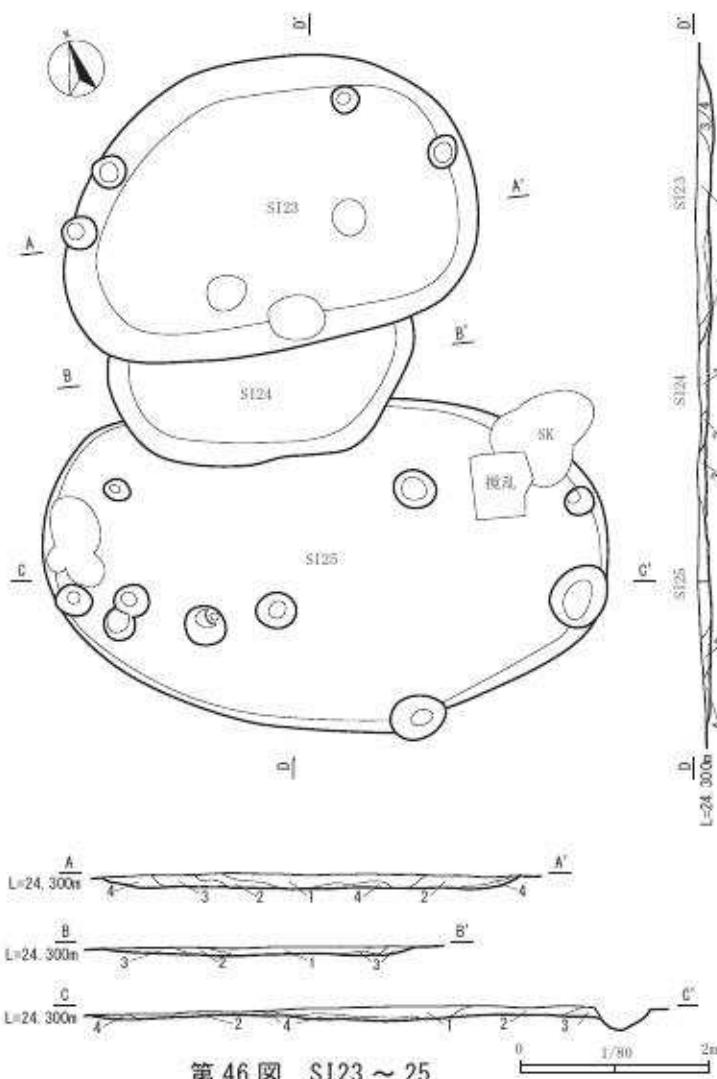


第45図 SI17出土遺物

S117 (第44・45図、遺構図版4、遺物図版5)

G・H-4グリットで検出。小ピットによって住居壁面の一部が壊される。長軸約4.6m、短軸約4.2mを測るが、遺構の壁面もほとんど残存してなく、深度2cmしかない。よって、壁の立ち上がりも全くといえるほど残っていない。検出されたのはいわば、住居跡の掘方底部だけといえる。わずかな残存状況で形状を示せば、円形に近い形状を呈していた可能性が推測される。覆土の堆積状況は、全く確認できなかった。柱穴の可能性があるピットは4基検出された。

203.2gの出土した遺物から3点を掲載した。01～03は纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01はb類、02・03はe類である。これらの遺物から考えられる遺構の時期は第2種b類黒浜2式土器と判断される。

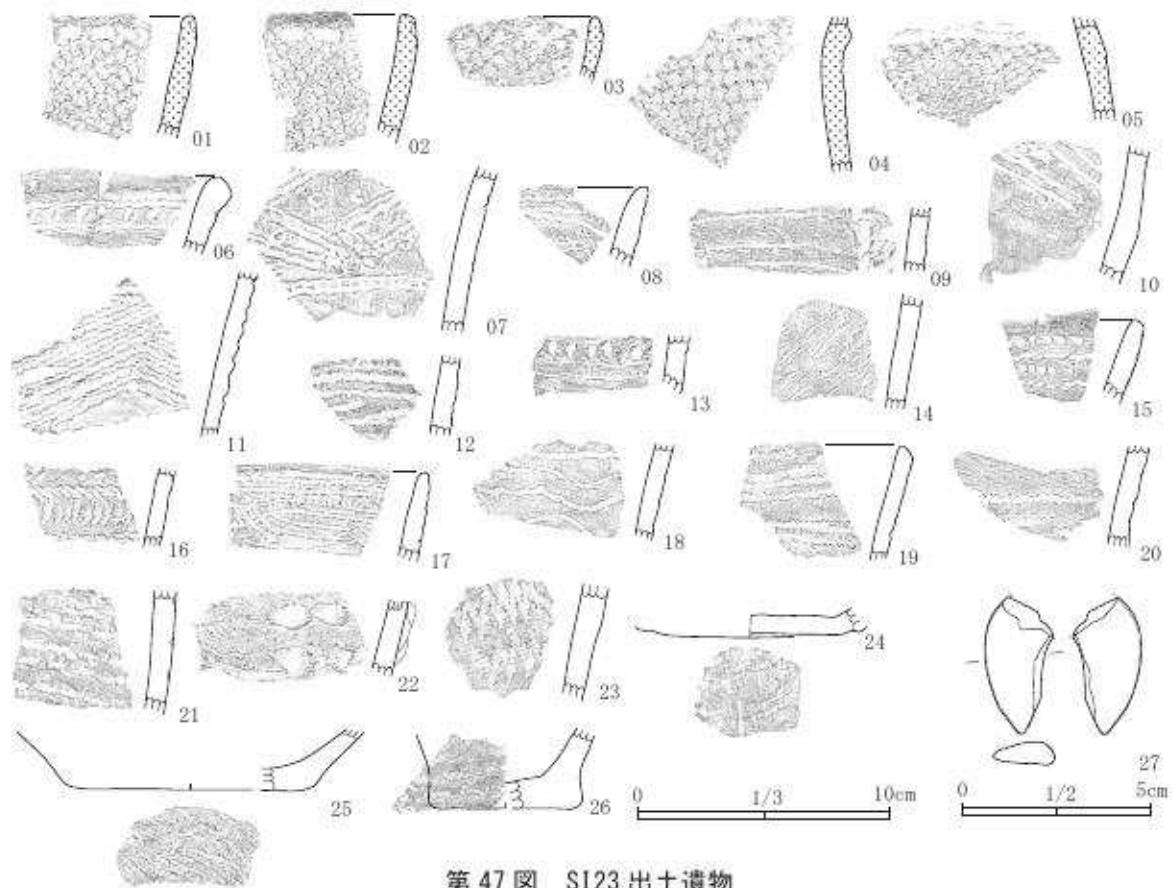


第46図 SI23～25

- 22～24月住跡セクション
 1. 10B2/1暗褐色土 ロームブロック中、地土ブロック・炭化物ブロック
 2. 10B2/2暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物ブロック
 3. 10B2/3暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物ブロック
 4. 10B2/3暗褐色土 ブロック極多、ロームブロック多、炭化物ブロック
 5. 10B2/4暗褐色土 ロームブロック極多、地土ブロック・炭化物ブロック
 6. 10B2/4暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物
 7. 10B2/4暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物
 8. 10B2/5暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物ブロック
 9. 10B2/5暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物ブロック
 10. 10B2/4暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物
 11. 10B2/4暗褐色土 ロームブロック多、地土ブロック・炭化物

SI23・24・25 (第46～48図、
遺構図版5、遺物図版6)

F-4・5グリットで検出。SI25がSI24に切られ、SI24はSI23に切られる。検出された法量等は、SI23が長軸約4.5m、短軸約3.1m、残存深度は16cmで、楕円形を呈す。SI24は半分ほどしか残っていないが、残存部で長軸約3.3m、短軸約1.2m、残存深度12cmである。残っている形状からは楕円形であった可能性が推測される。SI25は長楕円形で長軸約6.0m、短軸約3.7m、深度9cmを残す。各住居の壁面立ち上がりは推測しがたいが、緩やかであった可能性が見取れる。覆土は暗褐色土を主体とするが、黒褐色土による土層も



第47図 SI23出土遺物

含まれる。いずれもロームブロックが多く混じり焼土ブロックも混入する。柱穴の可能性があるピットはSI23で4基、SI25で10基が検出された。

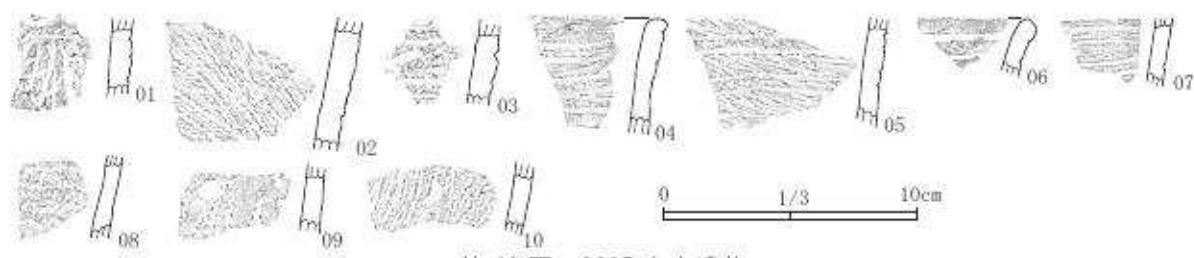
遺物はSI23とSI25で出土しており、SI24からの出土はない。SI23の出土遺物は1256.1gあり、SI25の方は、1007gである。住居覆土内からの出土が多い。

出土遺物が多いSI23では、27点を掲載した。01～05は第三群第2種黒浜式土器である。01～04には口唇部に棒状工具による爪状の刺突列が加わるもので、第2種a類黒浜1式土器である。05は複節LRLの縄文が施文される第2種e類にした。06～26は第三群第3種浮島式土器である。これら06・07は口唇部に沿って爪形が配され、平行沈線による文様が描かれる。地文は撚糸文。08～13は平行沈線による文様構成が行われる。14は胴部下半の土器で撚糸文のみ観察される。06～14は第3種a・b類の遺物である。15～21は変形爪形文が施文される。c種浮島2式の遺物である。22は指頭状の圧痕が施される口縁部の破片で、d類に含まれる。23は肋脈が明瞭な貝殻復縁を用い鋸歯文を描くe類。24～26は底部の破片である。26には下端に縄文の施文が見られ、第5種b類の可能性がある。27は土製玦状耳飾の3分の1程度の破片である。扁平で切り目部分は鋭く尖っている。内面の円孔及び外側面は丁寧に磨かれている。千葉県を中心とする東関東地域における玦状耳飾の出土例は浮島式土器に伴う例が多く、本資料も第3種に伴うものと判断される。

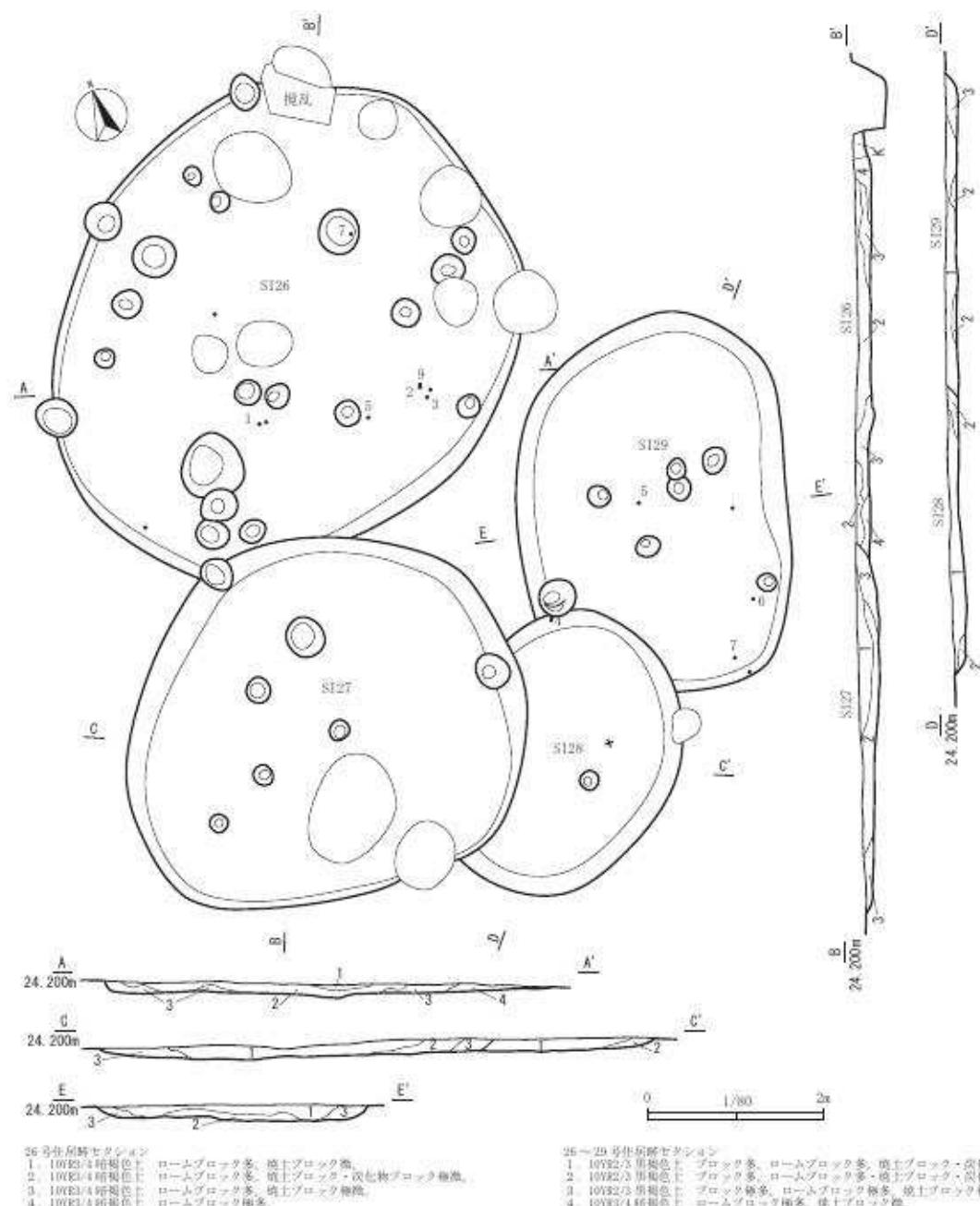
10点を掲載したSI25の遺物の内、01～06は第3群第3種の浮島式土器である。01～05は平行沈線を用いるものでb類。06～08は変形爪形文を施文するものでc類。09は貝殻腹縁による鋸歯文が施文されるe類。10は縦方向に施文される撚糸文a・b類であろう。

出土遺物から推測されるSI23の時期は、最も資料的にまとまるのが第3種c類であることから、浮島2式と判断される。出土遺物のないSI24は、重複関係から想定できる時期は第三群第3種以前の遺構と推測され、

SI25 の時期は浮島 1 式新段階と判断される。遺構の切り合い関係からも SI25 → 24 → 23 の構築と考えられ、遺物の時期と符合すると考えられる。



第 48 図 SI25 出土遺物



第 49 図 SI26 ~ 29

SI26・27・28・29（第49～53図、遺構図版6、遺物図版6・7）

E・F-5・6グリットで検出。確実なところで、SI29はSI28に切られ、SI28がSI27に切られる。一方、SI27はSI26の一部も壊している。検出した各住居跡の法量と形状は以下の通りである。SI26は長軸約5.8m、短軸約5.0m、残存深度は約22cm、円形に近い形状を呈す。SI27は長軸約4.4m、短軸約4.2m、残存深度約22cmで、これも円形に近い。SI28は長軸約3.3m、短軸約2.7m、残存深度約16cmを検出し楕円形に近い。SI29はやや長楕円形を呈し、長軸約4.4m、短軸約3.2m、残存深度約16cmである。いずれの住居跡も残存深度が浅いため住居壁面はほとんど残ってなく、壁の立ち上がりは確認しがたい。残ったわずかな立ち上がりで推測すれば、SI27・28・29は緩やかであった可能性がある。覆土の堆積状況は、上層部に黒褐色土が混入し、他は暗褐色土を主体とする。柱穴の可能性があるピットはSI26で20基、SI27で5基、SI28で1基、SI29で7基が検出された。炉跡は検出されていない。

遺物はSI26～29のすべての遺構で出土しており、SI27がやや多い。SI26は住居床面付近の遺物だけが出土している。SI29は住居覆土内からの出土の可能性が高い。

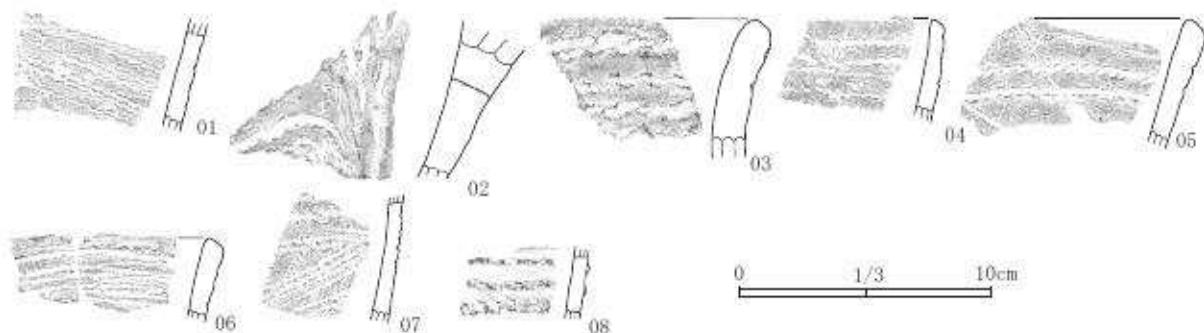
総量933.3gを出土したSI26で掲載したのは8点である。01はやや幅広平行沈線を斜め方向に施文する。02は大波状の把手部分で側面には棒状工具による単沈線が施文される波頂部直下には変形爪形文による円形の文様が描かれる。03～07は幅広の変形爪形文が口唇に沿って描かれ、07では平行沈線が変形爪形文に伴う。いずれも第三群第3種c類浮島2式土器である。08は単節RLの縄文を地文とし、浮線が2条平行して付される。浮線上には縄による圧痕が施される。第5種b類諸磯b式土器である。

1523.7gの出土量の内、18点を掲載したSI27の01は、撚糸地文に平行沈線を描くもので第3種a・b類。02・03は平行沈線による文様構成でb類。04～08は変形爪形でc類。9・10は棒状または指頭状工具による刺突を加えるものでd類。11・12は貝殻復縁文による鋸歯文を描くe類。13は底部の破片、浮島式であろう。14～16は第5種b類諸磯b式土器である。器面に特徴的な浮線が付されるものであるが、胴部下半から底部直上の破片で浮線が下半にまで付される点で、b類でも新しい段階になるものであろう。17はガラス質安山岩の剥片。原石は扁平な小礫を用いるもので両面に表皮を残す。18は片面表皮の剥片。安山岩質で端部に微細な使用痕が認められる。

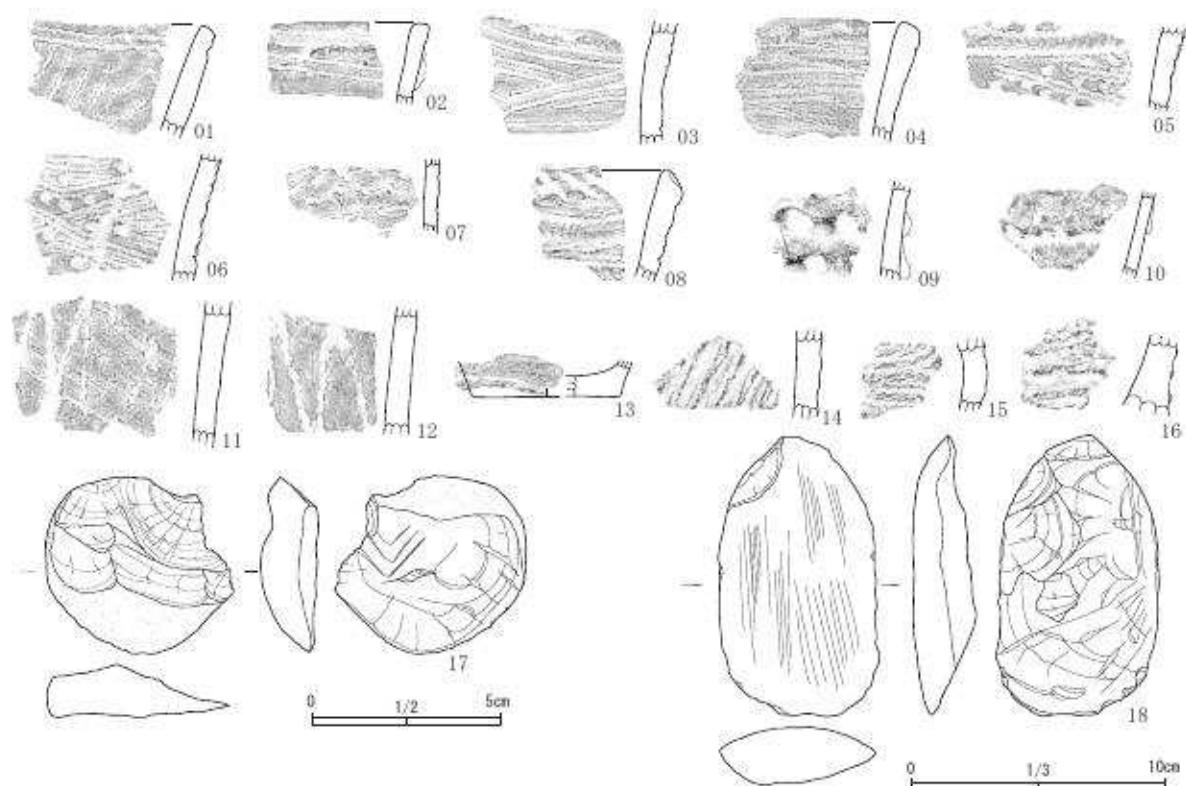
SI28では559.1gが出土した。01～05は第3種の浮島式土器である。01は肋骨文でa類、02は平行沈線を用いるb類、03・04は変形爪形文を用いるc類、05は肋脈を有する貝殻腹縁文による鋸歯文が施文される。06は凝灰岩製の磨石である。周縁は自然礫の形状が判明できないほどに敲打され変形している。07はガラス質安山岩の剥片である。打面は表皮で、先端部は折損している。二次的な加工痕は観察されない。

SI29からは790.9gの出土量、9点を掲載した。01～05は平行沈線により文様構成を行う土器である。第3種b類浮島1式新段階土器に相当する。06は幅広の変形爪形を描くc類。07は折り返し部分に刺突が施されるd類の土器である。08は肋脈を有する貝殻復縁による鋸歯文が地文に施文される。09は浮線紋を有する第5種b類諸磯b式土器である。

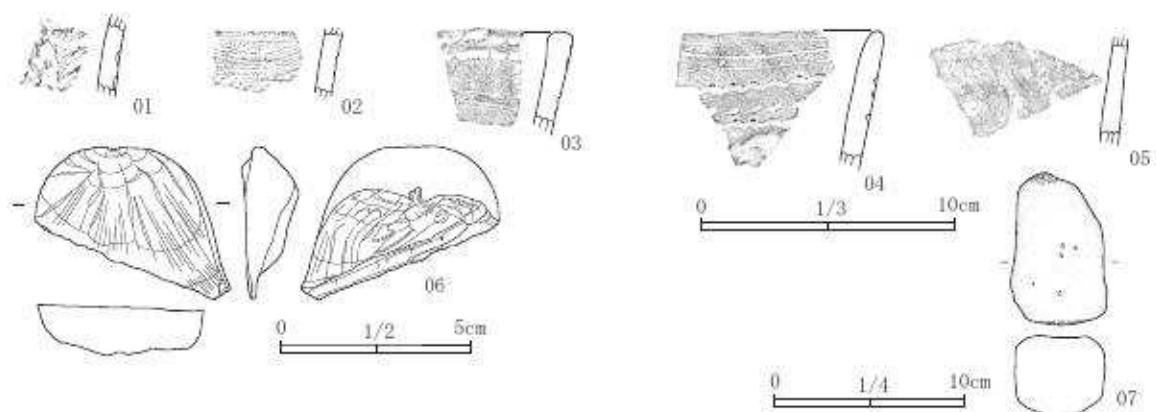
出土遺物から、SI26は諸磯b式に平行する浮島2式段階になろう。SI27は、第三群第3種b類を中心とする。SI28は第3種浮島式期で1式から2式にかかるものであろう。SI29は遺物の中心となる平行沈線を多用する第3種b類浮島1式新段階の遺物から該期の遺構と判断される。一方、遺構の切り合い関係からSI29→28→27と構築され、SI26がSI27以前の構築であることも確実である。よって、遺物の時期と切り合い関係による遺構の新旧関係には齟齬が生じてしまい、詳細は不明である。



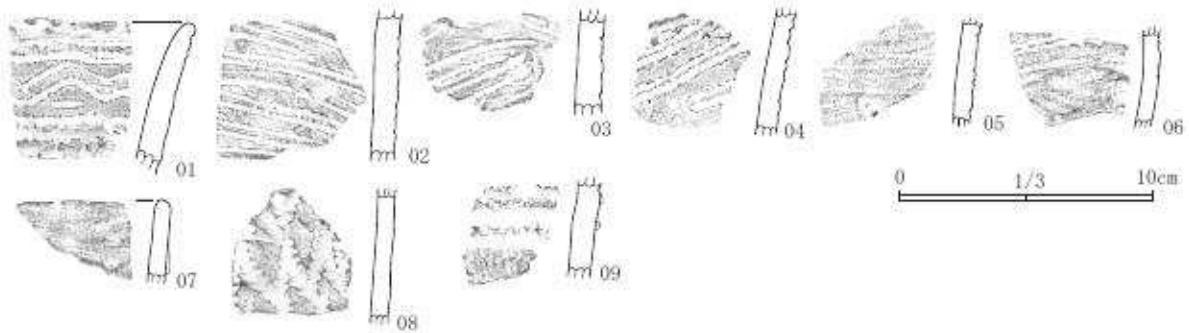
第50図 SI26出土遺物



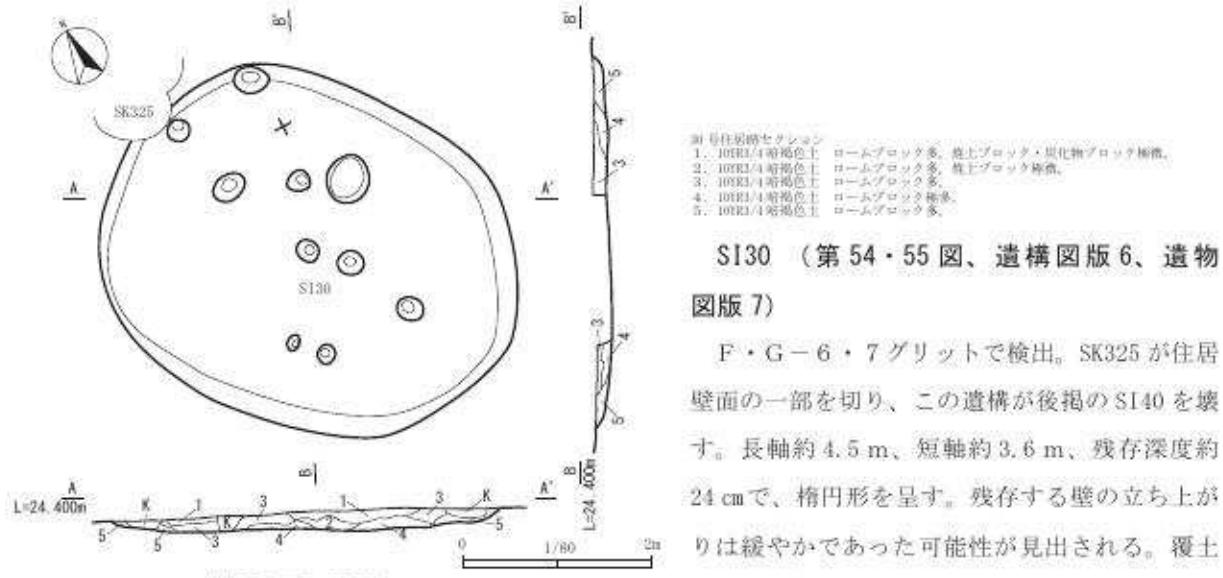
第51図 SI27出土遺物



第52図 SI28出土遺物

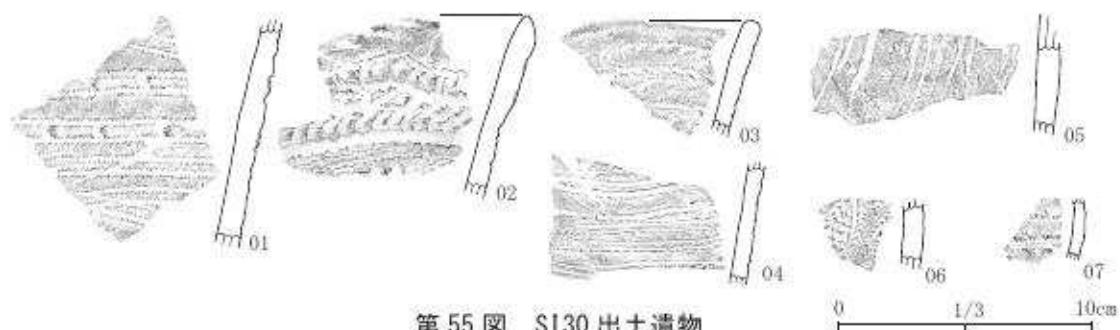


第53図 SI29出土遺物

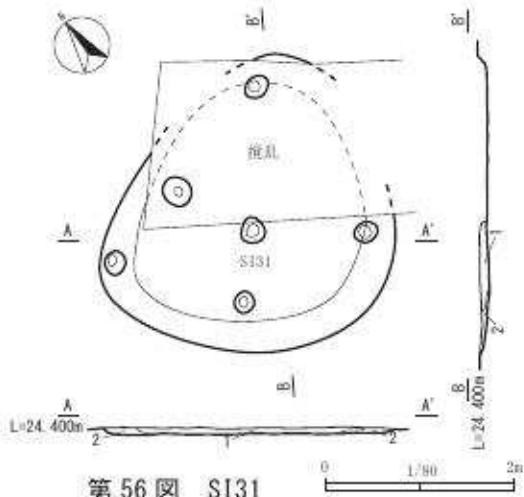


るピットは10基検出された。炉跡は検出できなかったが、住居床面付近にあったと思われる遺物が出土している。

372.3gが出土量したSI30の遺物の中で、7点を掲載した。01～05は浮島式土器である。01は平行沈線にC字の爪形文付される第3種b類の土器である。02～04は変形爪形文と平行沈線が用いられる土器で、第3種c類の土器である。04・05は平行沈線が施文されるもので04は胴部中央付近、05は下半部の破片で平行沈線が施文される。やや粗雑な平行沈線で、c類の遺物と判断される。06は半截竹管による木ノ葉状の入組文が描かれる。第5種a類・b類の双方に見られる。07は浮線文が口縁に平行して回る。浮線上には斜方向の刻みが施され、5種b類の典型的な様相である。搬入されたものであろうか。浮島1式新段階に平行するものである。出土した遺物から、遺構も該期に伴うものと推測される。



第55図 SI30出土遺物



第 56 図 SI31

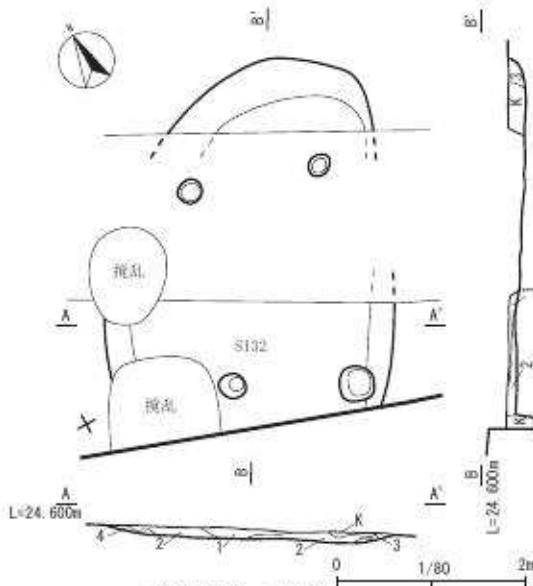
SI31 号住居跡セクション
1. 10V3/2 暗褐色土 ロームブロック多、焼土ブロック複数。
2. 10V3/2 暗褐色土 ロームブロック複数。

SI31 (第 56 図、遺構図版 6)

G-6・7 グリットで検出。この遺構を壊す遺構はないが、試掘トレンチ (T-25) で検出されていたため、住居の一部は試掘で失っている。検出されたのは長軸約 3.3 m、短軸約 3.0 m、残存深度約 10 cm で、試掘で確認されているプランとあわせて、検出した遺構のプランを推測すると円形の住居であった可能性が考えられる。わずかに分かる住居壁面の立ち上がりは緩やかであったと思われる。覆土は、暗褐色土を中心とする土層である。柱穴の可能性があるピットは 6 基

検出されたが、炉跡は検出できていない。

覆土の残りが良好とは言い難いため、本調査で出土した遺物は少なく、今回の調査で出土した遺物はない。試掘トレンチ (T-25) では 10 点の浮島期と思われる縄文土器片が出土している。試掘で出土した遺物から、浮島式期の竪穴住居跡の可能性が考えられる。



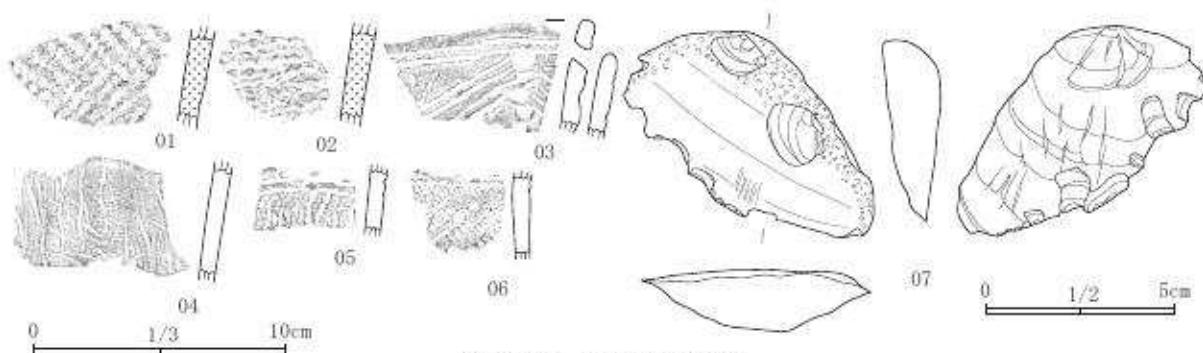
第 57 図 SI32

SI32 号住居跡セクション
1. 10V3/4 暗褐色土 ロームブロック多、炭化物ブロック少。
2. 10V3/4 暗褐色土 ロームブロック多、炭化物ブロック少。
3. 10V3/6 暗褐色土 ロームブロック多。
4. 10V3/6 暗褐色土 ロームブロック多、焼土ブロック複数。

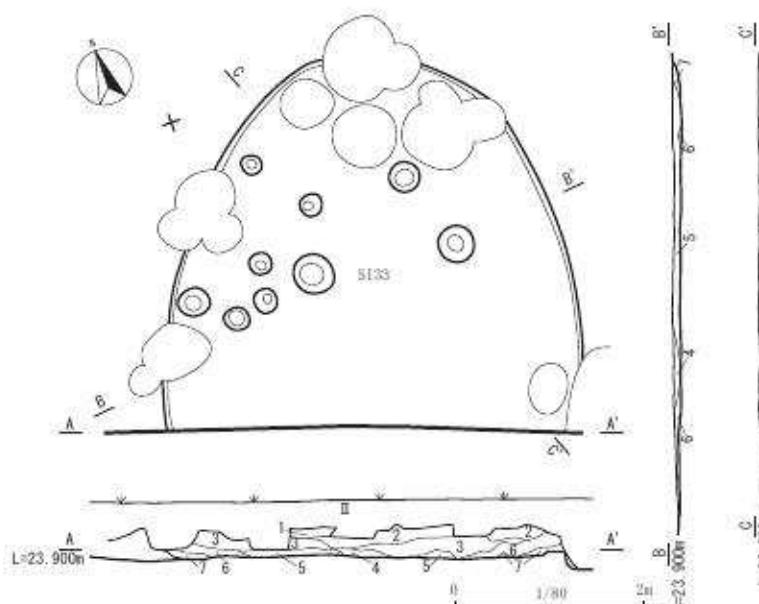
SI32 (第 57・58 図、遺構図版 6、遺物図版 7)

G-7・8 グリットで検出。壊乱以外にこの遺構を壊す遺構はないが、試掘トレンチ (T-26) で検出されていたため、住居掘方や覆土の一部は試掘で失っている。遺構は調査区外にも延長するため全体は不明であるが、長軸約 3.8 m、短軸約 3.1 m が検出された。柱穴の可能性がある 4 基のピットがやや長方形に残っている位置関係も加味して、楕円形を呈していた住居と考えられる。覆土の残存深度や約 17 cm で、残る住居壁面の立ち上がりは緩やかである。覆土は、暗褐色土による。柱穴の可能性があるピット 4 基以外に検出された遺構はなく、炉跡も検出できていない。

試掘トレンチ (T-26) から 2 点の黒浜期と思われる縄文土器片が出土している。今回の調査で出土した遺物は 436.6g 出土した中で、7 点を掲載した。01・02 は胎土中に纖維を混入するもので、01 は第三種 e 類に含まれるもので、01 では単節 RL と LR の羽状縄文。02 は肋脈を有する貝殻腹縁の鋸歯状文様が施文される。03 は波状を呈する口縁部の破片で地文に撚糸文を配し、口縁に沿って爪形文、平行沈線により肋骨文が描かれる。浮島式土器でも 1 式の古段階になる。04・05 は胴下半の土器片で縦方向の撚糸文が施文される。やはり浮島 1 式の古段階であろう。06 は直前段反撚りの縄文を地文にするもので、第 5 種 a・b 類の資料と判断される。07 はチャートの剥片である。自然面を打点にし、横長の剥片をはがしているが、二次的な加工は見られない。出土遺物より本遺構は浮島 1 式古段階と判断される。



第58図 SI32出土遺物



第59図 SI33

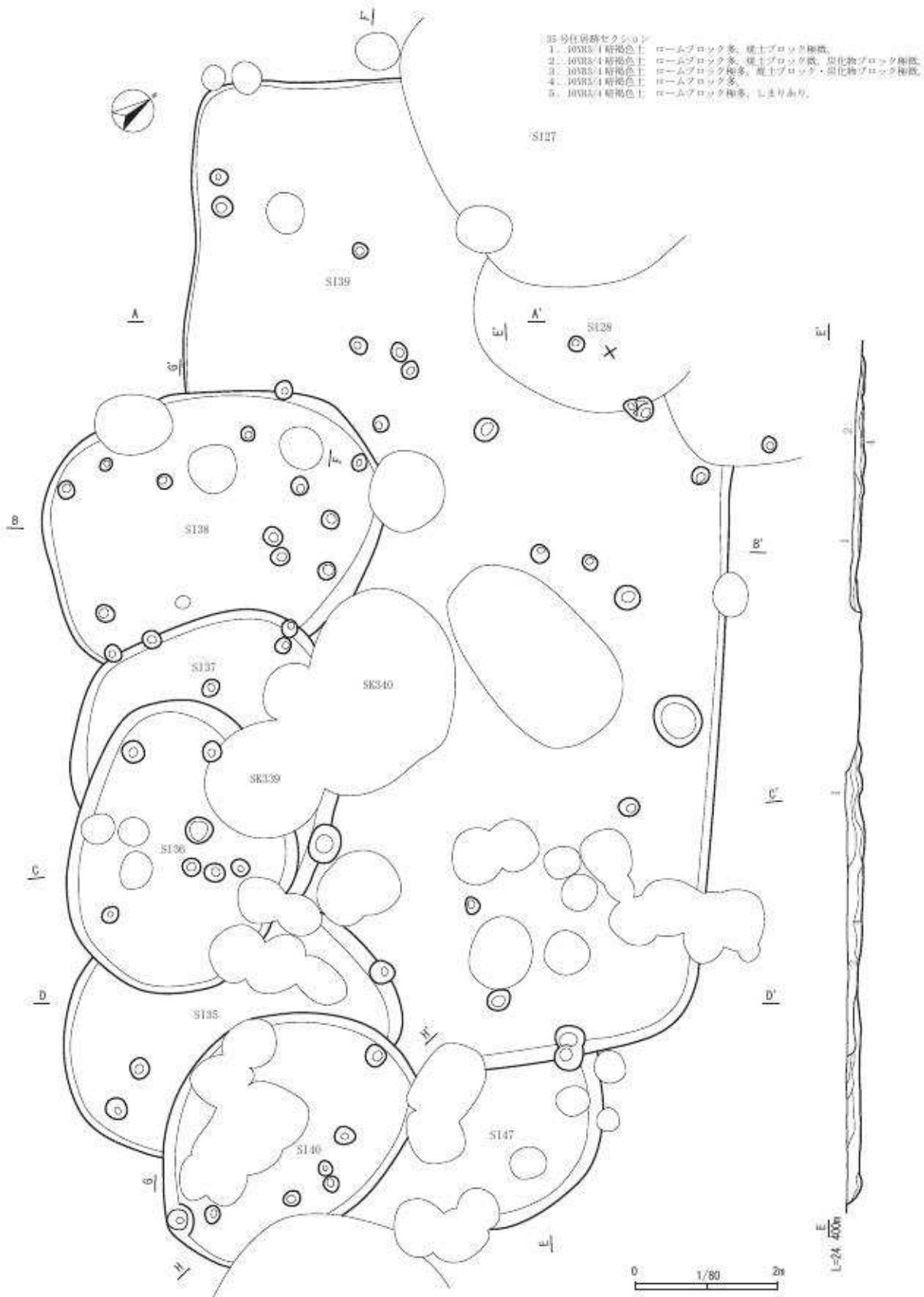
1. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。炭化物ブロック極微。
2. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。焼土ブロック・炭化物ブロック極微。
3. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。燒土ブロック微。炭化物ブロック中。
4. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。焼土ブロック極微。炭化物ブロック極微。
5. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。焼土ブロック極微。
6. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。黒褐色土ブロック甚。
7. 10932/4暗褐色土 ロームブロック極多。

SI33 (第59図、遺構図版6)

D・E-7グリットで検出。遺構の一部は調査区外に伸延するため全体像は不明であるが、検出できた部分で長軸約4.3m、短軸約3.9mの楕円形を呈する住居と考えられる。覆土の残存深度は約13cmで、残る住居壁面の立ち上がりは緩やかである。覆土は、暗褐色土と地山のロームブロックによる。柱穴の可能性があるピットは9基が検出され、炉跡は検出されていない。この住居跡からの出土遺物はない。よって、時期は不明である。

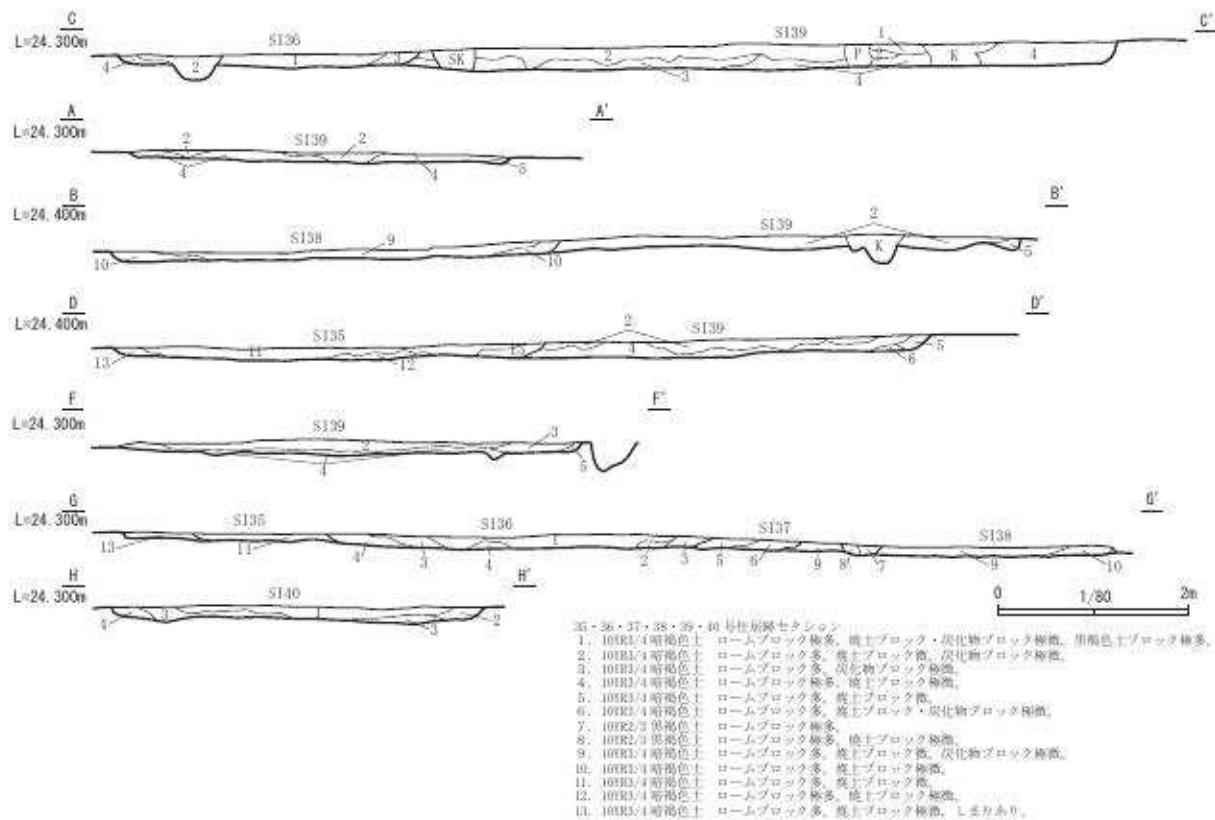
SI35～38・40（第60・61・63図、遺構図版7、遺物図版7）

E・F・G-6・7グリットで検出。SI35がSI36・40に切られ、SI40は前掲のSI30に切られる。また、SI38はSI37に切られ、SI37がSI36に切られる。これらの住居の一部はSK339・340などの土坑類にも壊されている。一方で、これらの住居跡は後述するSI39の上にある遺構でもある。各住居跡の法量と形状は以下の通りである。SI35は長軸約4.8m、短軸約2.9m、残存深度は約13cm、楕円形を呈していた可能性がある。SI36は長軸約4.2m、短軸約3.2m、残存深度約15cmで、楕円形である。SI37は長軸約3.5m、短軸約1.6m、残存深度約15cmを検出し、遺構の半分近くが壊されているので形状は不明である。SI38はやや長楕円形を呈し、長軸約4.9m、短軸約3.9m、残存深度約16cmである。SI40は長軸約4.1m、短軸約3.0m、残存深度約23cmで楕円形を呈していたと思われる。いずれも住居壁面の残りが少なく、それで立ち上がりを推測すれば、全般的に緩やかであった可能性がある。覆土は一部に黒褐色土の土層を含むものの、暗褐色土を主体とする。柱穴の可能性があるピットはSI35で2基が見出され、SI36で10基、SI37で3基、SI38で16基、SI40で7基が検出された。炉跡はいずれの住居跡でも検出されていない。



40号住居跡セクション
 1. 10YR5/4 嫌褐色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少。
 2. 10YR8/4 嫌褐色土 ロームブロック極多。
 3. 10YR5/4 嫌褐色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少、炭化物ブロック極少。
 4. 10YR6/6 棕褐色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少、じ土りあり。

第60図 SI35～40・47(1)



第 61 図 SI35 ~ 40 · 47 (2)

遺物は主に SI35・38 で出土している。SI35 では浮島式土器細片 1 点 (10.8g) のみが出土しているが掲載に至っていない。SI36 では住居覆土内や床面付近から 111g の遺物が出土し、浮島式縄文土器片 3 点を掲出した。01 は変形爪形文を口唇部に沿って 1 条巡らせ、以下に平行沈線による文様が描かれる。地文は明瞭ではない。第 3 種 c 類浮島 2 式土器である。02・03 は平行沈線及び平行端沈線を用いる。第 3 種 b 類～c 類の遺物である。SI38 でも住居覆土内や床面付近から浮島式縄文土器片が見出され、454.8g の遺物の中から 7 点を掲載した。01・02 は変形爪形文及び平行沈線が描かれるもので、第 3 種 c 類浮島 2 式土器である。03・04 は同一個体である。第 3 種 e 類とした土器である。外 223 の土器と同一個体の可能性もある。06 は折り返し部分に棒状刺突を加える第 3 種 d 類土器である。07 はやはり第 3 種 e 類とした土器で、浮島 2～3 式に比定されるものである。

出土遺物から SI36 は浮島 1 式新段階から 2 式にかかるものと判断される。SI38 は上述の通り、浮島 2～3 式と判断される。一方、遺構の切り合い関係から (SI39 →) SI38 → 37 → 36 と構築されたと考えられ、全く逆となる。さらに SI35 → 40 (→ SI30) と構築されていることも確実である。

SI39 (第 60・61・64 図、遺構図版 8、遺物図版 7)

E・F・5・6 グリットで検出。
SI27～29 や SI35～40 などによつて住居壁面の北西隅や南東隅の壁面が壊されており、住居南側の壁面も



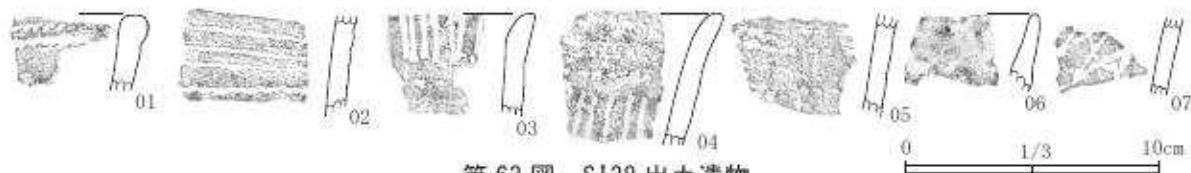
第 62 図 SI36 出土遺物

削平によって失っている。他に土坑やピットによっても壊されている。検出された法量及び形状は長軸約 13.9 m、短軸約 7.5 m を測る。切り合い以外に後世の削平も著しいので不明な点も多いが、長方形を呈していた可能性が高い。本遺跡最大の遺構である。壁の立ち上がりが確認できる住居北壁では壁面はほぼ垂直に立ち上がっていたと思われる。覆土は暗褐色土を中心とする堆積である。柱穴の可能性があるピットは多数検出されたが、

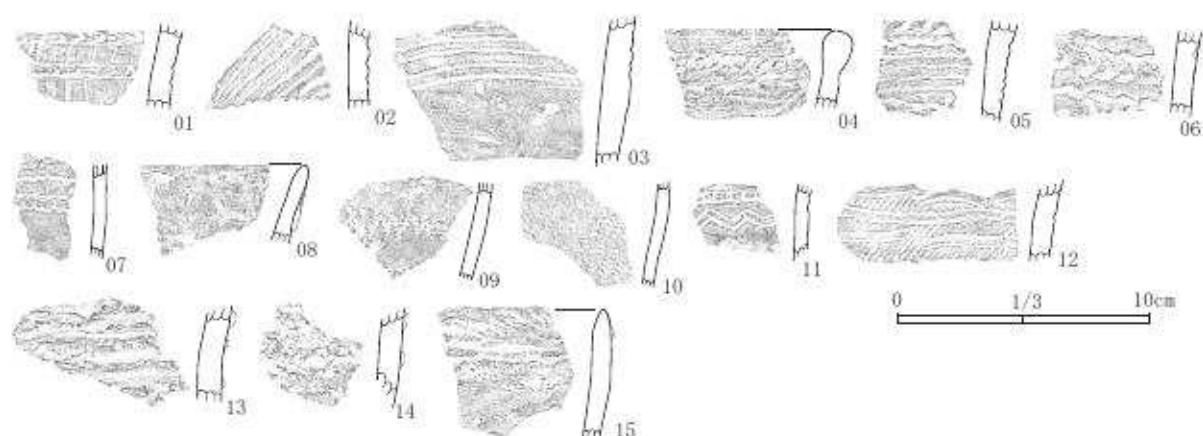
明確に柱穴と判断できるものはない。炉跡の可能性のある焼土等の集中域は見出せていない。

出土遺物の全重量は 919.3g であるが、そこから 15 点を掲出した。01～10 は第三群第 3 種浮島式土器である。01 は平行沈線状にまばらな爪形を施文するもので、地文には撚糸文が施された a 類である。02・03 は平行沈線が描かれる b 類、04～07 は変形爪形文が施文される c 類、08 は指頭状工具による刺突を行う d 類に分類される。09・10 は貝殻腹縁文を連続的に刺突するもので、第 4 種 a 類の可能性がある。11 は薄手の外反口縁で爪形文の下位に鋸歯状の平行沈線が施文される。12 は端説 L R の縄文に平行沈線が施文されるものである。いずれも第 5 種 a 類であろう。13 は浮線文が付されるもので第 5 種 b 類の遺物である。

本遺構の時期は混在が激しく明確ではないが、出土遺物から概ね、浮島 1 式の新段階が中心と考えられる。一方、SI39 の上にある SI27～29・SI35～40 との関係を照合すると、SI27～29 は浮島 1 式及び同 1～2 式に係るので、切り合い関係上も問題ないように思われる。しかし、SI35～40 とは課題がないわけではない。上述したように SI36～38 が遺構上の切り合い関係と遺物の時期が一致していないためである。それ故、SI36 などの下に確認された SI39 とも遺物の時期が符合しているとは言い難い。ただ、出土遺物が浮島式土器片を中心とすることからこの時期の最も古い段階の住居跡とは考えられる。



第 63 図 SI38 出土遺物

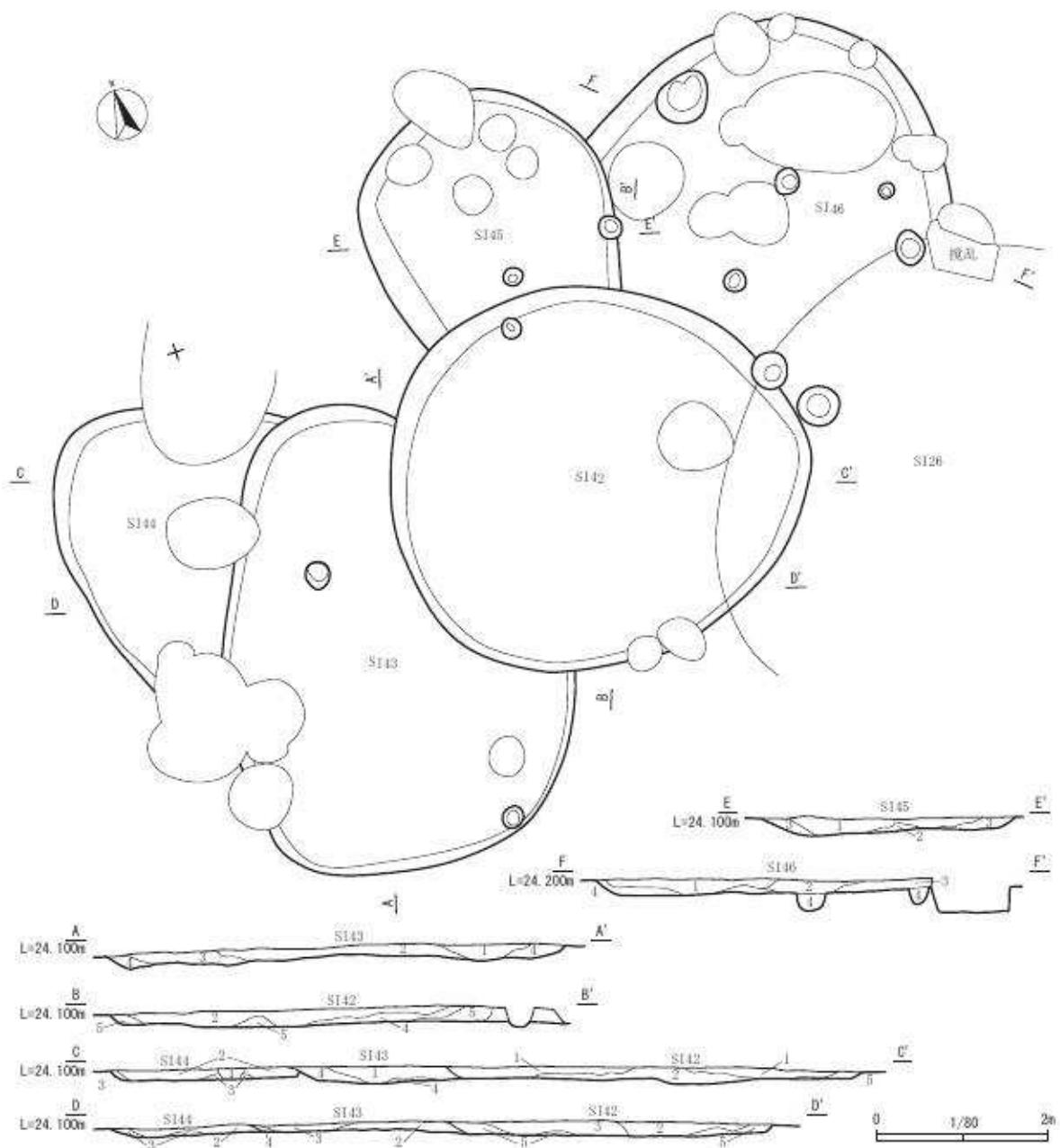


第 64 図 SI39 出土遺物

SI47 (第 60・61 図、遺構図版 9)

F-6 グリットで検出。SI39 や SI30・40 などによって切られる。また SK325～329 や SK320・335・396 などの土坑によっても覆土や壁面の一部が壊される。検出した部分は長軸約 4.2 m、短軸約 2.6 m である。残存部分から本来の住居の形状を推測することも困難である。残存深度も約 19 cm しかなく、わずかな住居壁面から推測すると、壁の立ち上がりは急傾であったと思われる。覆土は、暗褐色土を主体とする。柱穴の可能性があるピットは 2 基検出され、炉跡の可能性のある焼土等も見出せていない。

遺物の出土もなく、時期を推測することも難しいが、周辺の住居跡から浮島式が多く出土しているので、この住居跡も同じ時期と考えられる。切り合い関係も踏まえると、SI39 の浮島 1 式の新段階よりも古く、SI46 などと同様に浮島式の古い段階の可能性が考えられる。



第65図 SI42～46

SI42
1. 10HS/1 研磨色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少。

2. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多。

3. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少。

4. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極少。

5. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極少、焼土ブロック極少。

SI43
1. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少。

2. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少。

3. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少、炭化ブロック極少。

4. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多。

SI44
1. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多。

2. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少。

3. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多。

SI45
1. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多、焼土ブロック極少。

2. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多。

3. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック多、焼土ブロック極少、炭化ブロック極少。

4. 10HS/4 研磨色土 ロームブロック極多。

SI42・43・44・45（第65～68図、遺構図版7・8、遺物図版7・8）
E・F-4・5グリットで検出。SI44はSI43に切られ、SI43はSI42に切られる。また、SI42はSI45・46とSI26を切る。各住居跡の法量と形状は以下の通りである。SI42は長軸約5.0m、短軸約4.7m、残存深度は約13cmでほぼ円形を呈す。SI43は長軸約5.7m、短軸約3.6m、残存深度は約12cmで、長楕円に近い形状である。SI44は残っている長軸が約4.5m、短軸約2.3m、残存深度約13cmで概ね半分程度しか残存していないが、

円形か楕円形であったと推測される。SI45は長軸約3.0m、短軸約2.5m、残存深度約21cmを検出し、楕円形であった可能性が考えられる。残った壁面から立ち上がりを推測すれば、SI42・43はやや急傾であった可能性が考えられるが、SI44・45はそれらと比較して緩やかである。覆土は、暗褐色土を主体とする堆積状況である。柱穴の可能性があるピットはSI42で1基だけ検出され、SI43では2基、SI45で1基が検出された。SI44では検出されていない。炉跡はいずれの住居跡でも見出されなかった。

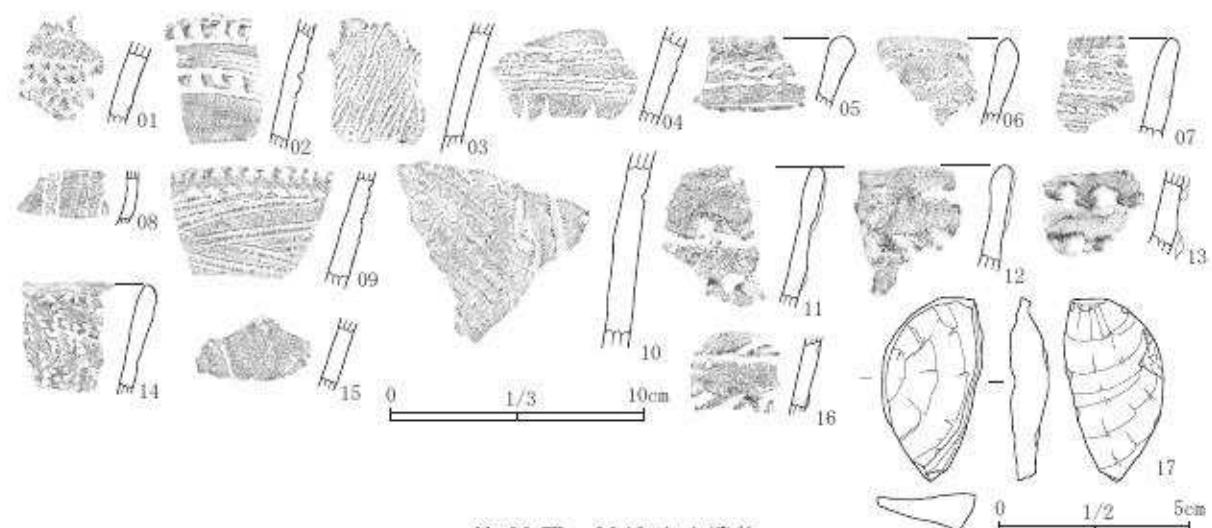
遺物はSI42で651.5gを出土し、そこから17点を掲載した。SI43では490.6gの遺物から黒浜式1点と浮島式縄文土器片5点を選出した。SI44の出土遺物はなく、SI45も出土が37.2gしかない中で2点だけを掲出した。遺物の詳細は以下の通りである。

SI42の01・02はC字の爪形文が描かれるもので、03はこれらの胴部下半であろうか、縦方向の撚糸文が施文される。第三群第3種a類である。04～09は変形爪形文が施文される一群で第3種c類。10は第4群第1種の土器の可能性がある。11～13は折り返し口縁で指頭による圧痕が施される3種d類浮島3式である。15・16は第5種b類諸磯b式土器。17はガラス質安山岩の剥片である。打面は表皮である。原石は小形の河原石と考えられる。

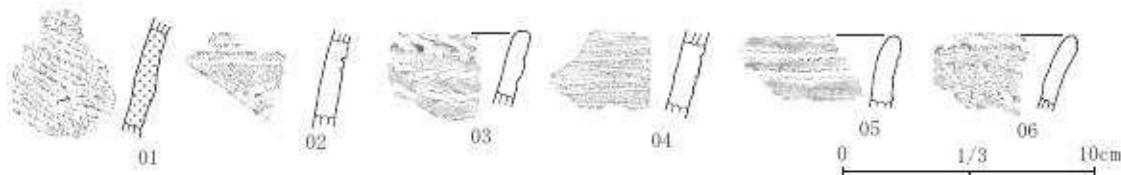
SI43の01は第3群第2種黒浜式土器e類。02～06は第3種浮島式土器である。02・05は平行沈線、03は幅広の変形爪形、04は平行沈線、06は肋脈の明瞭な貝殻復縁文が密に施文される。

SI45の01は平行沈線を用いる土器で、第3種c類の遺物である。02は胴部下半の破片で無文。第3種浮島式の土器であろう。

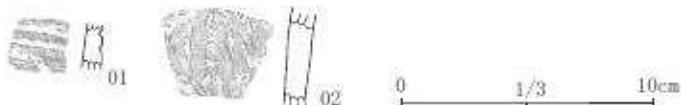
出土遺物から、SI42は浮島2式～3式と判断される。SI43は第3種浮島式と判断される。SI45も第3種浮島式のものと判断される。一方、遺構の切り合い関係からはSI44→43→42(→SI26)と構築され、さらに(SI46→)SI45→SI42と構築されていることも明らかとなっている。



第66図 SI42出土遺物



第67図 S143出土遺物



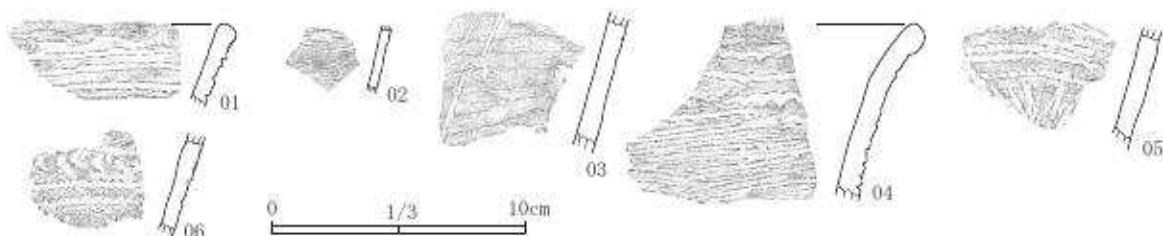
第68図 S145出土遺物

S146（第65・69図、遺構図版8、遺物図版8）

E-4・5グリットで検出。S126やS142・45によって壊されており、さらに多数の土坑によって覆土や住居壁面などが壊されている。検出した遺構の法量は長軸約5.5m、短軸約3.9mを測る。残存深度は約25cmである。住居壁面の立ち上がりは緩やかであった可能性が推測される。覆土は、暗褐色土を主体とした土層が堆積する。柱穴の可能性があるピットは4基である。炉跡は見出せていない。

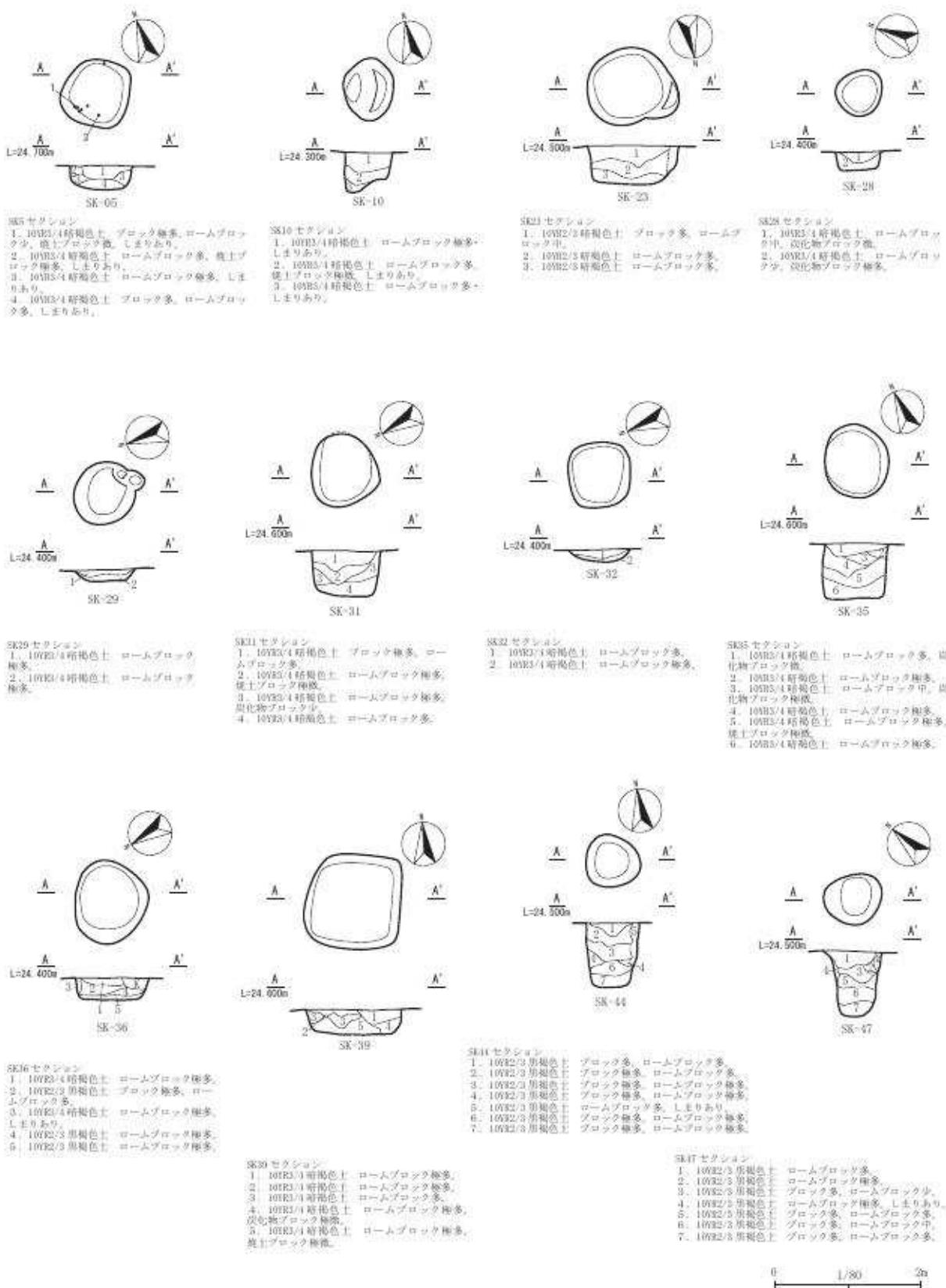
遺物は752.1gが出土しており、浮島式縄文土器片6点を掲出した。第3種浮島式土器である。01～03は平行沈線を施文する第3種b類の土器群である。この中で、02は薄手で赤彩が施される。この種の遺物は他の遺構でも出土しており、口唇直下に細い平行沈線にC字の爪形文が付されることから浮島1式段階と判断している。04～05は変形爪形文を施文する。第3種c類浮島2式土器である。これらの遺物からS146の所属時期は浮島2式期と判断される。

一方、S142～45でも言及したように、この住居跡は切り合っている住居の中では最も古い可能性が高い。S142～45も浮島式2～3式とされているのに対し、S146は浮島2式とすれば切り合い関係ともほぼ符合し、浮島期の中でも最も古い段階の住居跡と考えられる。

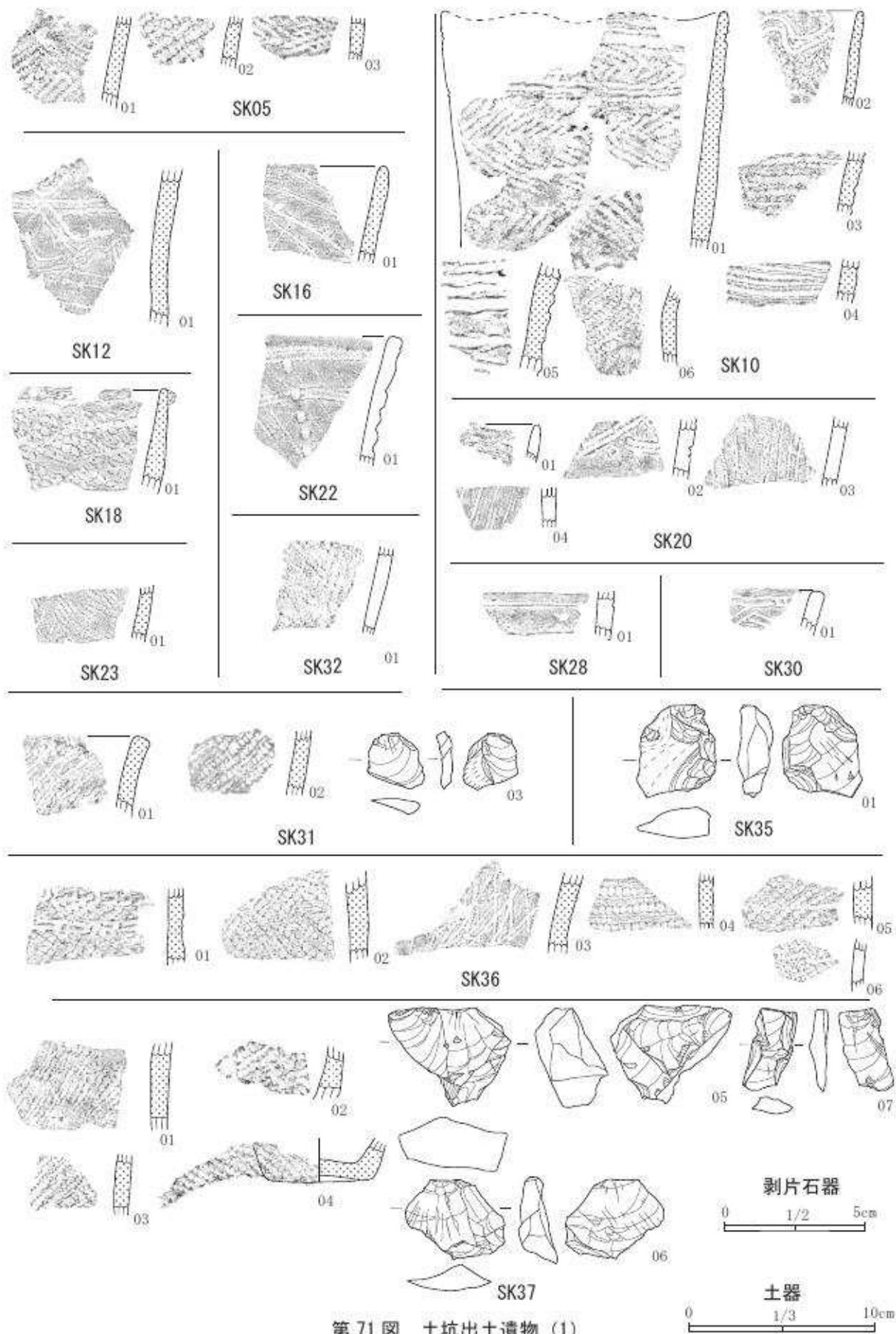


第69図 S146出土遺物

第2項 土坑



第70図 SK05・10・23・28・29・31・32・35・36・39・44・47



第71図 土坑出土遺物(1)

SK05 (第 70・71 図、遺物図版 8)

F-2・3 グリッドにおいて検出された。S105 を切って構築される。長軸 95 cm、短軸 85 cm の不整円形を呈している。残存深度は 17 cm を測り鍋底状の断面形である。覆土は 4 層に分層され、堆積状況から人為堆積と判断され墓坑の可能性がある。

遺物は第 1・4 層から黒浜式土器が検出され、計 786.4 g が出土した。掲載遺物は 3 点である。01～03 はいずれも胎土中に纖維を混入する土器である。01 は単節 RL と LR の羽状。02 は単節 LR、03 は無節 L の繩文が施文される。第三群第 2 種 e 類黒浜式土器である。

SK10 (第 70・71 図、遺物図版 8)

F-3 グリッドにおいて検出された。S107 を切って構築されている。長軸 95 cm、短軸 86 cm の梢円形を呈している。残存深度は 54 cm を測る。覆土は 3 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は黒浜式土器を主体に 1223.8 g 検出された。掲載遺物は 6 点である。01～06 はいずれも胎土中に纖維を混入する土器である。01 は平行沈線で区画し、胴部には単節 RL と LR の結束羽状繩文が施文される。02 は口縁直下に波状の平行沈線が描かれ地文には単節繩文が施文される。03～05 は複数段に渡り平行沈線が横方向に施文される。以上は第三群第 2 種 b 類であるが、02・03 は植房式に類似する資料である。06 は単節 RL の繩文が施文され、同種 e 類になる。本遺構の所属時期は第 2 種 b 類黒浜式 2 式である。

SK23 (第 70・71 図、遺構図版 9、遺物図版 8)

F-G-4 グリッドにおいて検出された。長軸 119 cm、短軸 96 cm のほぼ円形を呈するが、北西側が突出している。残存深度は 53 cm を測り、鍋底状の断面形状である。北西側の突出した部分には、ピットが重複していた可能性がある。覆土は 3 層に分層され、自然堆積とみられるものの、形状から墓坑の可能性がある。

遺物は諸磯式土器 14.3 g が第 1 層から検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は微量纖維を混入する土器で、0 段多条の繩文が施文される。第三群第 5 種 a 類諸磯 a 式土器である。諸磯 a 式に平行するならば、浮島 1 古段階よりも古く、黒浜段階の可能性が想定される。

SK28 (第 70・71 図、遺構図版 9、遺物図版 8)

H-3 グリッドにおいて検出された。長軸 53 cm、短軸 50 cm のほぼ円形を呈し、残存深度は 28 cm を測る。断面形状は鍋底であり、覆土は 2 層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は浮島式土器 17.6 g が検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は平行沈線が用いられるもので第三群第 3 種 b 類浮島 1 式新段階である。

SK29 (第 70 図、遺構図版 9、遺物図版 8)

H-3・4 グリッドにおいて検出された。長軸 92 cm、短軸 77 cm の円形を呈する。残存深度は 19 cm を測り、底部は平坦である。南側には新旧関係不明のピットが重複している。ピットは長軸 29 cm、短軸 25 cm の規模であり、確認面より 25 cm の深度を測る。覆土は 2 層に分層され、自然堆積と判断される。

遺物は黒浜式土器と近世以降の瓦片の計 15.7 g が検出された。掲載遺物はない。

SK31 (第 70・71 図、遺構図版 9、遺物図版 8)

G-4 グリッドにおいて検出された。長軸 92 cm、短軸 90 cm の不整円形を呈する。残存深度は 59 cm を測り、箱型の断面形状である。覆土は 4 層に分層され、自然堆積とみられるものの、形状から墓坑の可能性がある。

遺物は黒浜式土器を主体に 99.7 g 検出された。掲載遺物は 3 点である。01 は無節 L の繩文を施文する。02 は直前段反撲の繩文を施文する。いずれも胎土中の纖維混入より第三群第 2 種 e 類黒浜式と判断される。03 はチャートの剥片である。一部に表皮を残す貝殻状の横長剥片である。

SK32 (第 70・71 図、遺構図版 10、遺物図版 8)

H-4 グリッドにおいて検出された。長軸 86 cm、短軸 81 cm の不整円形を呈する。残存深度は 15 cm を測り、断面形はレンズ状である。覆土は 2 層に分層され自然堆積を示している。

遺物は、第 1 層から諸磯式土器が検出され、計 28.7 g が確認されている。掲載遺物は 1 点である。01 はやや薄手の土器の胴部下半部の破片である。全面に単節 LR の縄文が施文される。纖維の混入は見られない。第三群第 5 種 a 類諸磯 a 式土器である。

SK35 (第 70・71 図、遺構図版 10、遺物図版 8)

H-4・5 グリッドにおいて検出された。長軸 98 cm、短軸 81 cm の円形を呈する。残存深度は 80 cm を測り、床が平坦な箱型の断面形状である。覆土は 6 層に分層され、第 2・4・5・6 層にはロームブロックが極多量含まれる。覆土の状態と堆積状況から人為堆積であると思われる。

遺物は 27.4 g が検出されている。掲載遺物は 1 点である。本遺構から出土した遺物は縄文土器片 1 点とチャートの剥片である。土器は器面に縦方向の撚糸文を施文する第三群第 3 種 b 類の土器が出土している。土坑の覆土から判断して、第三群の遺構と判断している。

SK36 (第 70・71 図、遺構図版 10、遺物図版 8)

H-4 グリッドにおいて検出された。長軸 110 cm、短軸 97 cm の不整円形を呈する。残存深度は 30 cm を測り、底部が平坦な浅い箱型の断面形状である。覆土は 5 層に分層され、全層にわたりロームブロックが極多量含まれる。人為堆積と判断される。

遺物は黒浜式土器を主体に 267.7 g 検出されている。掲載遺物は 6 点である。本遺構から出土した遺物は 01～05 は第三群第 2 種黒浜式土器である。爪形文を用いることからやや古い段階 a 類に含まれる。06 は纖維の混入は見られず薄手で結節縄文が施文される。第三群第 5 種 b 類と判断した。

SK39 (第 70・73 図、遺構図版 10、遺物図版 8)

G-4 グリッドにおいて検出された。南北 130 cm、東西 124 cm のゆるやかな方形を呈する。残存深度は 33 cm を測る。床は東側に向けてやや傾斜し、壁は外傾する。覆土は 5 層に分層され、人為堆積であると判断される。

遺物は土器片など計 343.4 g が検出された。掲載遺物は 5 点である。01・02 は第三群第 3 種 b 類浮島 1 式新段階、03 は微量に纖維を混入する土器で器面には付加条第 1 種の縄文が施文される。04 は薄手の土器で単節 RL の縄文が施文。05 は撚糸文が施文され区画帯には爪形文が施文される。第 3 種 a・b 種浮島 1 式及び第 5 種 a 類諸磯 a 式土器が供伴する。そのほか混入資料であろう中期前半の第四群第 1 種の土器がある。

SK44 (第 70・73 図、遺構図版 10、遺物図版 9)

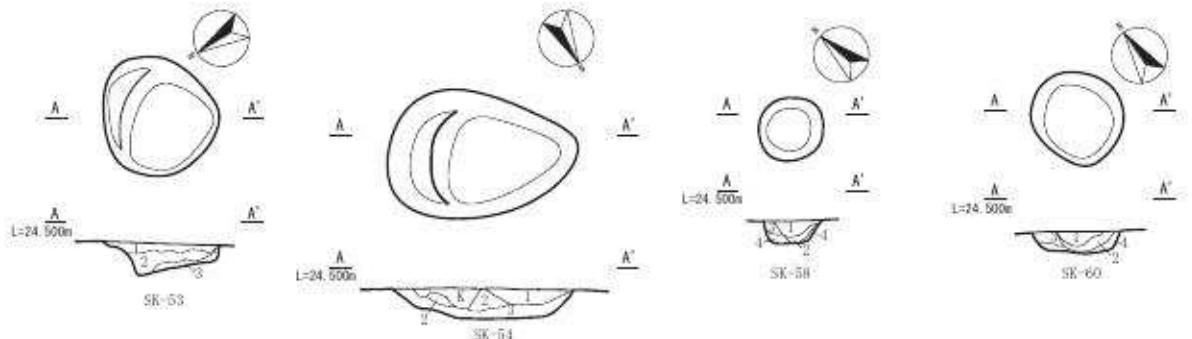
G-5 グリッドにおいて検出された。長軸 66 cm、短軸 57 cm の不整円形を呈する。残存深度は 85 cm を測り、底部は平坦で壁面はやや外傾する。覆土は黒褐色を基調とした 7 層に分層され、第 3・4・6・7 層にはロームブロックを極多量含み、人為堆積と考えられる。

遺物は浮島式土器を主体に 99.8 g 検出されている。掲載遺物は 3 点である。01 は第三群第 2 種黒浜式土器で e 類、02・03 は第 3 種 b 類の土器である。

SK47 (第 70・73 図、遺構図版 10、遺物図版 9)

F-4 グリッドにおいて検出された。長軸 64 cm、短軸 61 cm の円形を呈している。残存深度は 87 cm を測り、U 字状の断面形状である。覆土は 7 層に分層され、第 2・4 層にはロームブロックが極多量含まれる。覆土とその堆積状況から本土坑は人為堆積であると判断される。

遺物は黒浜式土器 24.8 g が検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は第三群第 2 種 e 類黒浜式土器である。

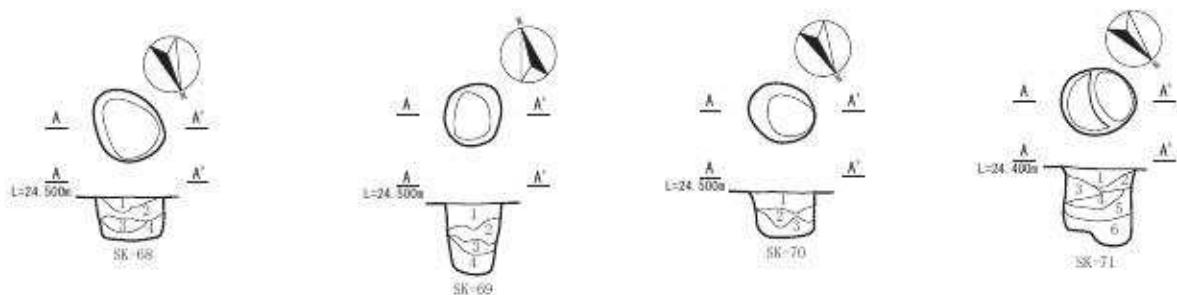


SK88セクション
1. 101B3/4暗褐色上 ロームグロテク多
2. 101B3/4暗褐色上 ロームグロテク極多
3. 101B3/4暗褐色上 ロームグロテク極多

SKS1セクション

5855 セタション
 1. 10SH2/3 黄褐色土 ロームプロリ
 ュ極多。
 2. 10SH2/3 黄褐色土 ロームプロリ
 ュ多。
 3. 10SH2/3 黄褐色土 ロームプロリ
 ュ少。
 4. 10SH4/3 黄褐色土 ロームプロリ
 ュ極多。土壌より有り。

SK40 セクション
 1. 10ER3 1J 黄褐色上 ロームブロック多
 橙土ブロック少
 2. 10ER3 1J 黄褐色上 ロームブロック中
 3. 10ER2 1J 黄褐色上 ブロック多、ロー
 ムブロック少
 4. 10ER3 1J 黄褐色上 ロームブロック多



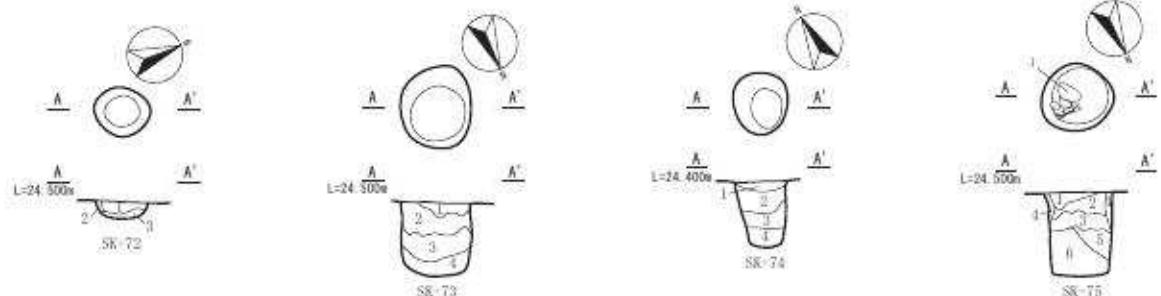
SK68 セクシーリン
 1. DMR2/4暗褐色土 ロームブロック多。炭化物ブロック極微
 2. DMR3/4暗褐色土 ロームブロック多。炭化物ブロック少
 3. DMR3/4暗褐色土 ロームブロック極多
 4. DMR3/4暗褐色土 ロームブロック多。

強相セクション
 1. 1002J2 黒褐色土 ブロック多。ローム
 2. 1002J3 黑褐色土 ブロック多。ローム
 3. 1002J4 黑褐色土 ブロック多。ローム
 4. 1002J5 黑褐色土 ブロック多。ローム
 ブロック多。

SK70-セクション

1. 10WRH1暗褐色土 ロームプロック多、焼土^{レトナ}リック少、炭化物プロック少、
2. 10RH1暗褐色土 ロームプロック多、炭化物プロック少、
3. 10RH1暗褐色土 ロームプロック極多、炭化物プロック少、

SAT1セクション
 1. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 2. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 3. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 4. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 5. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 6. 100%A4暗褐色土 ロームゾロア
 7. 2本



SK72セリノン
 1. 10%RS/4硝酸亜鉛 ロームプロテクタ
 多量 現物モルダバ特徴。
 2. 10%RS/4硝酸亜鉛 ロームプロテ
 クタ多量。
 3. 10%RS/4硝酸亜鉛 ロームプロテ
 クタ多量。

SK73-セクション
 1. 10畠/4階褐色土 ロームブロック中。塊状ブロック微。
 2. 10畠/4階褐色土 ロームブロック多。炭化物ブロック微。
 3. 10畠/4階褐色土 ロームブロック極多。
 4. 10畠/4階褐色土 ロームブロック極多。

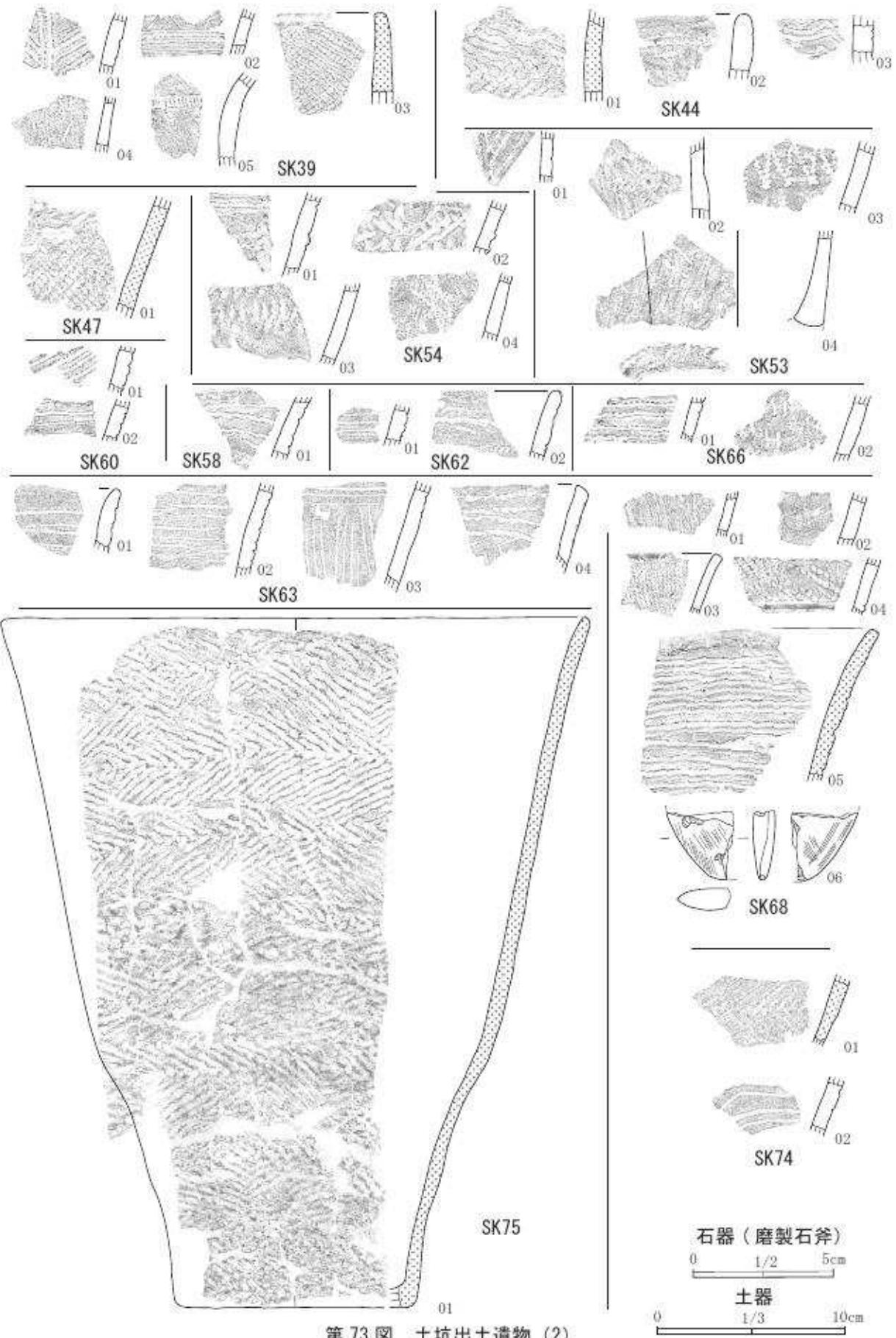
SK74セクション

1. 10KV2/3 黒褐色土 ロームブロック極多、
ランブロック極少
2. 10KV2/3 男褐色土 ブロック多、ローム
ブロック中。
3. 10KV2/3 男褐色土 ブロック多、ローム
ブロック多。

SK75セクション
 1. 10YR2/3 男褐色土 ロームブロック多、
 硅化物ゾータク多、
 2. 10YR2/3 男褐色土 ロームブロック多、
 3. 10YR2/3 男褐色土 ロームブロック多、
 4. 10YR4/6 棕褐色土 ロームブロック多、
 5. 10YR2/3 女褐色土 ロームブロック多、

$$0 \qquad \qquad \frac{1}{80} \qquad \qquad 2\pi$$

第 72 図 SK53・54・58・60・68～75



第73図 土坑出土遺物 (2)

SK53（第72・73図、遺構図版10、遺物図版9）

F-4グリッドにおいて検出された。長軸122cm、短軸121cmの不整梢円形を呈している。掘り込みは北側が深く、残存深度は最深部で32cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器を主体として174.3gが検出された。掲載遺物は4点である。01は平行沈線による文様構成。第三群第3種b類浮島1式土器新段階、02～04はe類である。

SK54（第72・73図、遺物図版9）

F-4グリッドにおいて検出された。長軸243cm、短軸169cmの不整梢円形を呈する。残存深度は37cmを測る。長軸はおむね皿状の断面形状であるが、土坑の南よりには段がある。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器121.6gが検出された。掲載遺物は4点である。01・02は変形爪形文を用いるもので、第三群第3種c類浮島2式土器。03・04は貝殻腹縁による鋸齒文。e類である。

SK58（第72・73図、遺物図版9）

E-4グリッドにおいて検出された。長軸65cm、短軸58cmの円形を呈する。残存深度は25cmを測り、擂鉢状の断面形状である。覆土は4層に分層され、黒褐色を基調とする1・2層が落ち込むように堆積する。この部分は柱の痕跡である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器36.4gが検出された。掲載遺物は1点である。01は平行沈線で曲線文様を描く。第三群第3種浮島1式土器新段階である。

SK60（第72・73図、遺物図版9）

E-4グリッドにおいて検出された。長軸98cm、短軸90cmの不整円形を呈する。残存深度は23cmを測り、覆土は4層に分層される。黒褐色を基調とする1・2層が落ち込むように堆積し、柱の痕跡である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器48.2gが検出された。掲載遺物は2点である。01・02は平行沈線を描く。第三群第3種浮島1式土器新段階である。

SK68（第72・73図、遺構図版10、遺物図版9）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸77cm、短軸75cmの梢円形を呈し、残存深度は47cmを測る。箱型の断面形状である。覆土は4層に分層され、ロームブロックを全層にわたって多量以上含む。覆土とその堆積状況から人為堆積と判断される。

遺物は142.9gが検出された。掲載遺物は6点である。01・02は撚糸文を施文するもので第三群第3種b類浮島1式の遺物である。03・04は胴部に繩文が施文される土器で、第5種a類諸磯a式であろう。05は第三群第2種b類の遺物でも植房式の可能性がある。06は磨製石斧の刃部片である。石材は緑泥片岩である。出土遺物より、本土坑の所属時期は黒浜2式期から浮島1式期古段階と判断される。

SK69（第72図、遺構図版11）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸65cm、短軸61cmのほぼ円形を呈している。残存深度は76cmを測り、壁はやや外傾する。覆土は黒褐色を基調とする4層に分層され、人為堆積と判断される。

遺物は93.1gが検出された。掲載遺物はないが、出土した外16・17は器面に浅い沈線を巡らすもので、第二群第2種田戸下層式土器と考えられる。遺構の所属する時期は覆土の状況から判断して第三群とみられるために遺構外出土遺物とした。

SK70（第72図、遺構図版11）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸73cm、短軸76cmの楕円形を呈している。残存深度は51cmを測り、箱型の断面形状である。覆土は3層に分層され炭化ブロックが全層に含まれ、人為堆積を示している。

本土坑から遺物は検出されなかった。

SK71（第72図、遺構図版11）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸74cm、短軸64cmの楕円形を呈している。残存深度は89cmを測り、東側底部は弧状に段を持ち、壁面はほぼ垂直である。覆土は暗褐色を基調に6層に分層され、第5層にはロームブロック（1mm～30mm）が極多量含まれる。人為堆積と考えられる。

遺物は田戸下層式土器を含む計25.1gが検出された。遺構に伴う掲載遺物はない。外14・15はSK69出土遺物同様、器面に浅い沈線を巡らすもので、第二群第2種田戸下層式土器と考えられるもので遺構外遺物とした。遺構の所属する時期は少量ながら第三群第3種の遺物が出土しているために該期と判断される。

SK72（第72図、遺構図版11）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸51cm、短軸46cmの楕円を呈している。残存深度は確認面下23cmであり、插鉢状の断面形である。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は29.4g検出された。遺構に伴う掲載遺物はない。外7は第一群第1種b類花輪台2式土器で器面は磨かれ無文である。遺構の所属する時期は覆土の状況から判断して第三群と判断されるために花輪台1式土器は遺構外出土遺物とした。

SK73（第72図、遺構図版11）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸89cm、短軸81cmの不整円形を呈し、残存深度は121cmを測る。覆土は暗褐色を基調とした4層に分層され、第2・3層にはロームブロックが多く含まれ、堆積状況は人為堆積とみている。

本土坑から遺物は検出されなかった。

SK74（第72・73図、遺構図版11、遺物図版9）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸66cm、短軸56cmの不整円形を呈している。残存深度は90cmを測る。覆土は黒褐色を基調とした4層に分層され、自然堆積である。

遺物は黒浜式土器を主体として44.6gが検出された。掲載遺物は2点である。01は第三群第2種e類黒浜式土器である。02は第3種b類浮島1式新段階の土器である。

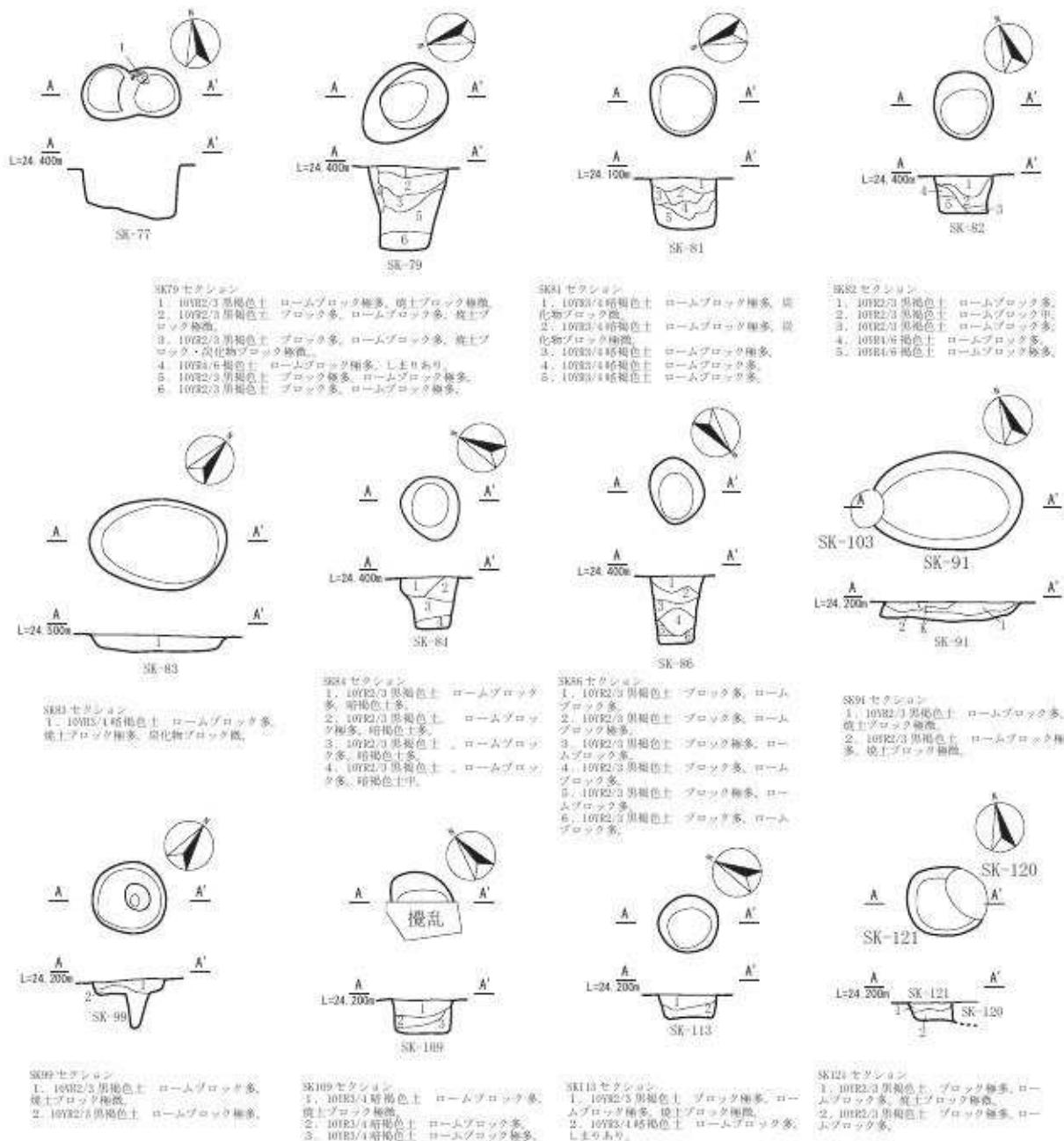
SK75（第72・73図、遺構図版11、遺物図版9）

F-5グリッドにおいて検出された。長軸70cm、短軸69cmのやや楕円形を呈する。残存深度は88cmを測る。覆土は黒褐色を基調とした6層に分層され、堆積状況は人為堆積を示している。

遺物は第6層中から黒浜式土器が押しつぶされた状況で出土するなど、計1977gが検出された。掲載遺物は1点である。01は第三群第2種e類の土器である。ほぼ完形で底部及び口縁の一部を欠損する。胴部には無節のしとRを結束させた羽状の縦文を全面に規則正しく多段に施文する。器形はバケツ形に開くものであるが胴部下半付近に接合字のふくらみを有したのち胴部下半に向かって垂直に近くなる。底部は平底である。

SK77（第74・75図、遺構図版12、遺物図版9）

E・F-3グリッドにおいて検出された。SI09の覆土を除去した後、検出された。当初、同住居跡に伴うピットとして調査したところ、長軸119cmの双円形のプランを示した。残存深度はSI09の床から68cmを測る。本遺構は2つの土坑が重複したものと推測される。底部は平坦であり、壁の下部はやや内傾し、上部は垂直である。



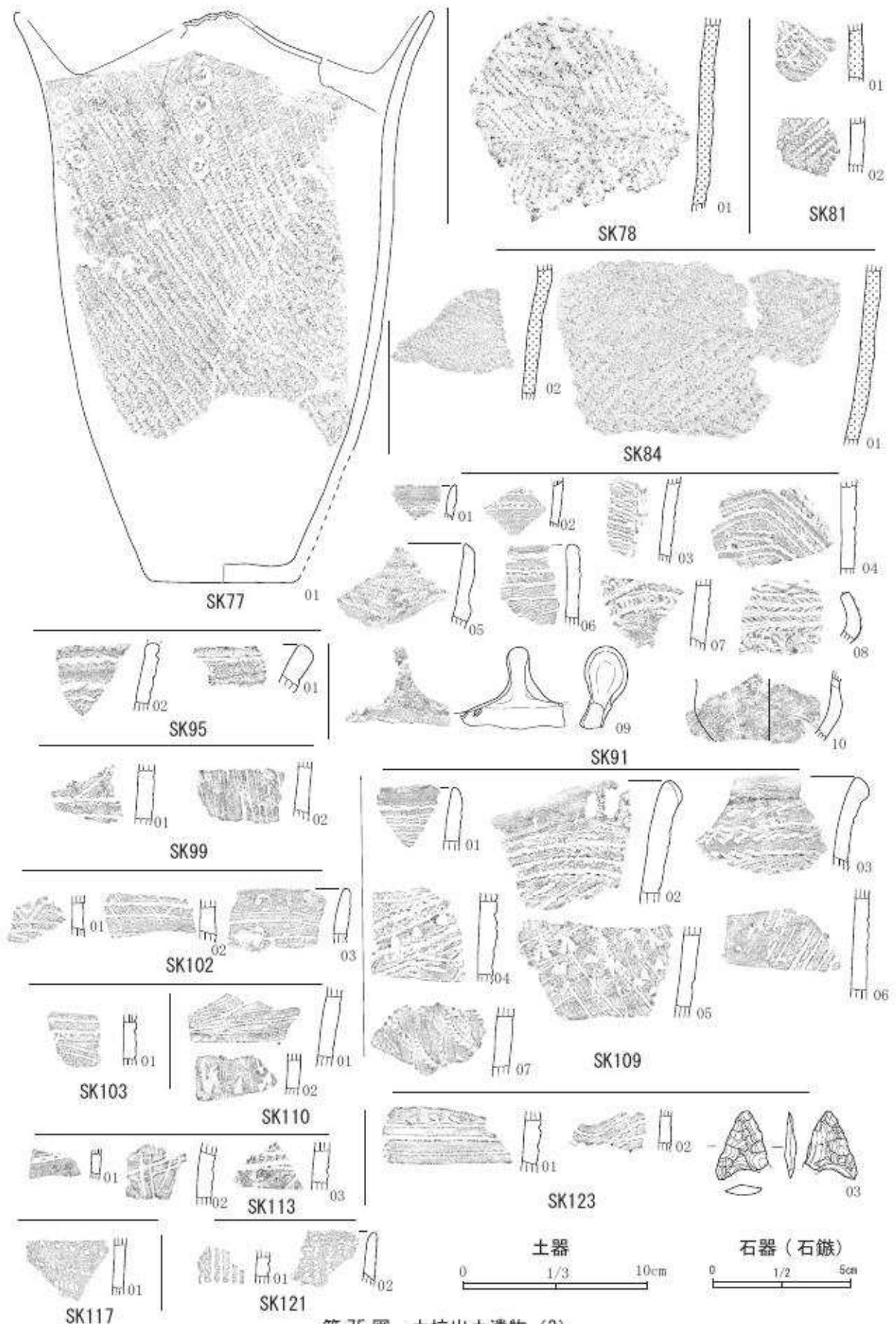
第74図 SK77・79・81～84・86・91・99・109・113・120・121

0 1/80 2m

遺物は床面から 17 cm の地点で諸磯 a 式土器が器形を留める状態で検出されるなど計 1012.9 g が出土した。掲載遺物は 1 点である。01 は第三群第 5 種諸磯 a 式土器である。底部は平底で、胴部はやや膨らみを有した後口縁は大きく外反して開き、波状口縁となる。波頂部分には刻みが施される。器面は全面に付加条第 1 種 L R + L の繩文が施文される。波頂部から円管状の刺突列が綫方向に施文される。器壁は薄く、纖維の混入はない。胴下半より底部にかけては、二次焼成を受け、器面の遺存状況が悪く、採拓は行えていない。

SK79 (第74図、遺構図版12)

G-5 グリッドにおいて検出された。長軸 95 cm、短軸 64 cm の梢円形を呈する。残存深度は 108 cm を測り、底



第75図 土坑出土遺物 (3)

部は平坦で壁面は外傾する断面形状である。覆土は黒褐色を基調とした6層に分層され、第6層は水平堆積を示し人為堆積と判断される。

遺物は浮島式土器を主体として65.1gが検出された。細片ながら第三群の土器が出土している。掲載遺物はない。

SK81（第74・75図、遺構図版12、遺物図版10）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸87cm、短軸72cmの不整円形を呈する。残存深度は48cmを測り、断面形状は箱型である。覆土は暗褐色を基調とした5層に分層され、人為堆積を示している。

遺物は41.7gが検出された。掲載遺物は2点である。01は胎土中に纖維を含み平行沈線による文様が描かれる第三群第2種b類黒浜2式土器である。02は単節LRの縄文が施文され胎土中に纖維の混入は見られない。第5種a・b類の諸磯式土器と判断される。

SK82（第74図、遺構図版12）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸80cm、短軸70cmの不整円形を示している。残存深度は50cmを測り、断面形状は箱型である。覆土は5層に分層され、黒褐色を基調とする1・2層は落ち込む堆積状況を示している。

本土坑から遺物は検出されていない。

SK83（第74図）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸163cm、短軸110cmの楕円形を呈している。残存深度は22cmを測り、浅い皿状の土坑である。火床面は確認されなかったが、单層である覆土からは焼土ブロックが極多量検出され、本土坑は屋外炉である可能性が考えられる。

遺物は計17.3gが検出された。細片ながら第三群第3種浮島式土器、剥片が出土している。掲載遺物はない。

SK84（第74・75図、遺構図版12、遺物図版10）

G-5グリッドにおいて検出された。長軸88cm、短軸74cmの円形を呈し、残存深度は75cmを測る。底部は平坦である。覆土は黒褐色を基調とする4層に分層され、人為堆積とみられる。

遺物は床面から黒浜式土器が検出されたほか計50.8gが確認された。掲載遺物は2点である。01・02はいずれも胎土中に纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01は屈曲部に平行沈線が施文されることからb類、02はe類と判断される。そのほか覆土中から僅かながら第三群第3種の遺物の混入が見られるものの、遺構の時期は黒浜式期と判断した。

SK86（第74図、遺構図版12）

F-5グリッドにおいて検出された。長軸71cm、短軸69cmの円形を呈し、残存深度は86cmを測る。断面形状は縦長の箱型である。覆土は黒褐色を基調とした6層に分層され、第3・5層はロームブロック(1~30mm)を多量含む。覆土と堆積状況から本土坑は人為堆積であると判断される。

本土坑から遺物は検出されていない。

SK91（第74・75図、遺物図版10）

E-4・5グリッドにおいて検出された。浮島1式新段階のSI46を切って構築され、SK103に切られている。短軸120cmの楕円形を呈し、残存深度は確認面から21cmを測る。覆土は黒褐色を基調とした2層に分層され、レンズ状の自然堆積を示す。

遺物は第三群第3種を主体として433gが検出された。掲載遺物は10点である。01~09は第三群第3種浮

島式土器である。01・02は薄手で平行沈線に爪形が付される。第3種b類浮島1式新段階と判断される。赤彩は観察されない。03・04は厚手で平行沈線による文様が描かれるやはりb類。05～07は変形爪形文が施文されるもので、c類浮島2式土器。08は浮線文が施文される第5種b類。09は第5種b類諸磯b式に見られる獸面把手が形骸化されたものと判断される。10は塊形を呈する小形の浅鉢であろうか、ミニチュアの土器である。胎土から本種に含めたが型式不明である。浮島2式と諸磯b式新段階の共伴は興味深い。

SK99（第74・75図、遺物図版10）

E-4グリッドにおいて検出された。SI46を切って構築されている。長軸62cm、短軸51cmの不整円形を呈し、残存深度は27cmを測る。中央には長軸35cm、短軸29cmのピットが穿たれており、深度は本土坑の底部より49cmを測る。本土坑の覆土は2層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は浮島式土器を主体に44.3g検出された。掲載遺物は2点である。01・02は平行沈線により文様が描かれるもので、第三群第3種b類浮島1式新段階と判断される。

SK109（第74・75図、遺物図版10）

E-5グリッドにおいて検出された。SI46を切って構築されている。遺構の南西に攪乱があるため規模は不明である。残存深度は39cmを測り、箱形の断面形状である。覆土は3層に分層され、自然堆積と判断される。

遺物は浮島式土器を主体に423.6g検出された。掲載遺物は7点である。01は平行沈線により文様が描かれるもので、第三群第3種b類浮島1式新段階と判断される。02～04は変形爪形による文様が施文されるもので、c類浮島2式である。05・06は平行短決線が描かれe類、07も肋脈が明瞭な貝殻腹縁文が鋸歯状に施文されるe類である。

SK113（第74・75図）

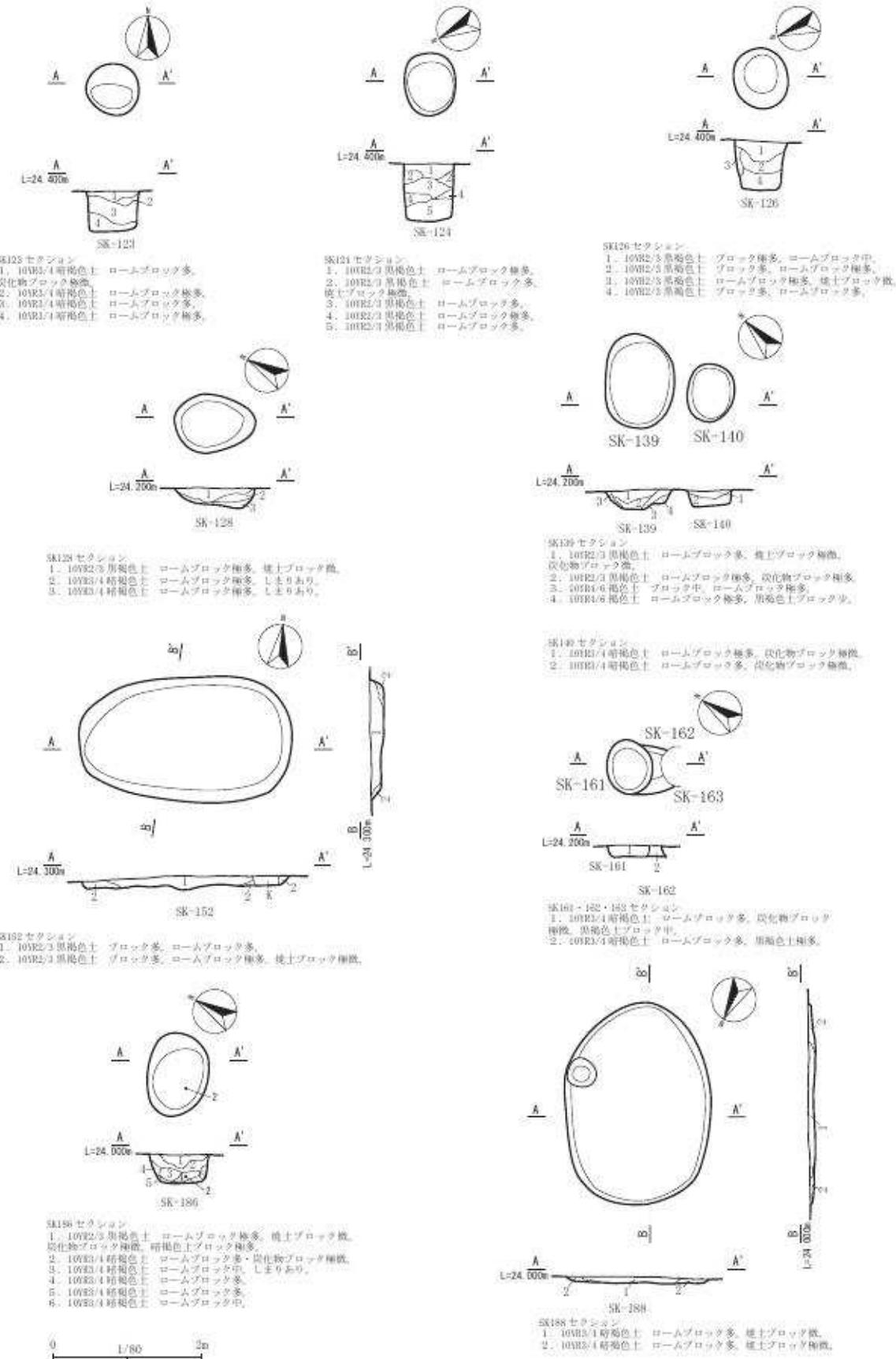
D-4グリッドにおいて検出された。長軸70cm、短軸65cmの不整円形を呈している。残存深度は最深部で確認より51cmを測る。箱形の断面形状であり、壁面がやや外傾している。覆土は黒褐色を基調とした2層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は浮島式土器29.6gが検出された。掲載遺物は3点である。01～03は平行沈線による文様を描くもので、01の外面には薄手で外面には赤彩が施されている。いずれも第三群第3種b類浮島1式新段階と判断される。

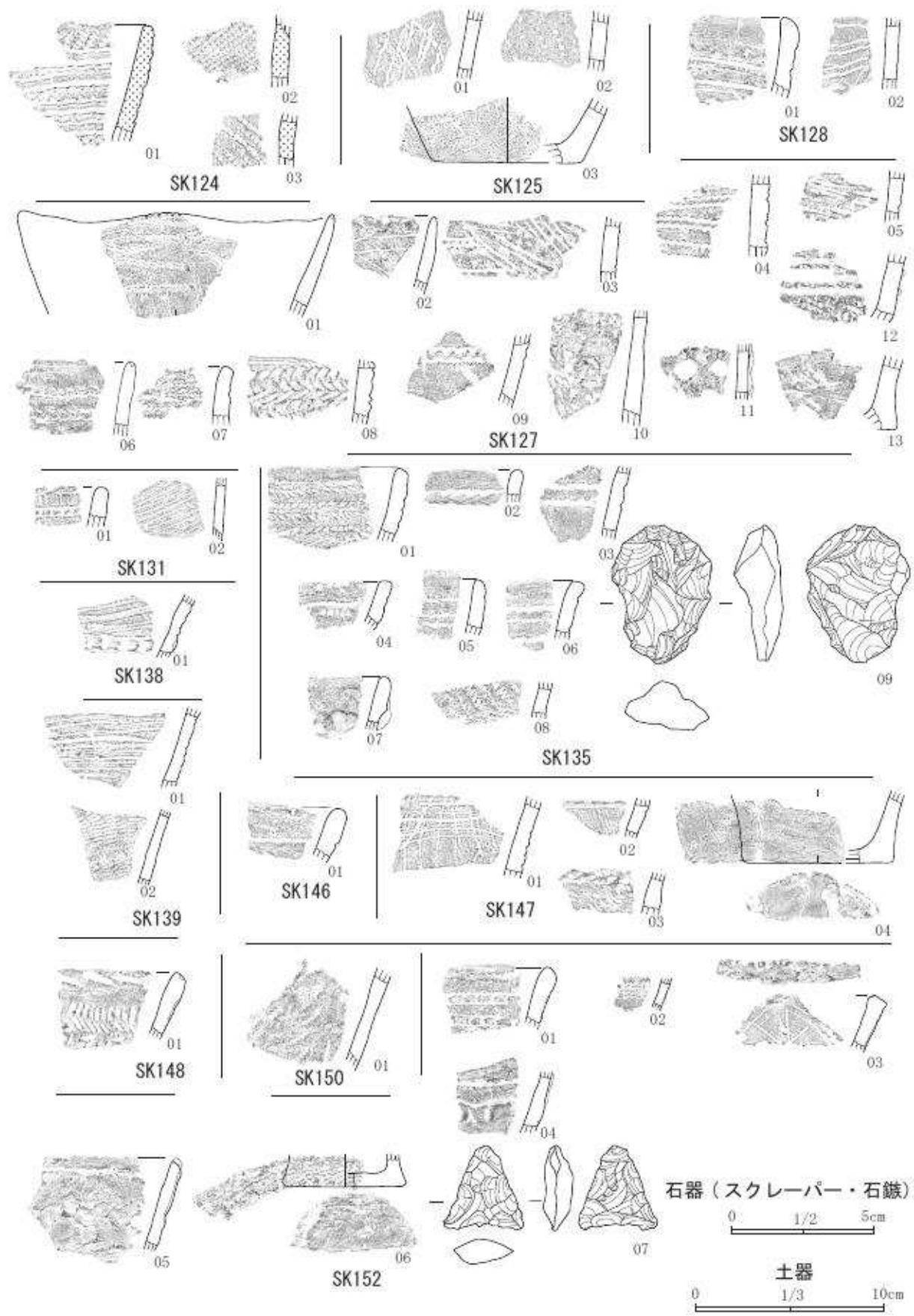
SK121（第74・75図、遺物図版10）

D-5グリッドにおいて検出された。SI44を切って構築されている。東側をSK120に切られ、短軸83cmの梢円形を呈しているとみられる。残存深度は51cmを測り、底部は平坦である。覆土は2層に分層され、自然堆積と判断される。

遺物は浮島式土器を主体に91.3gが検出された。掲載遺物は2点である。01は平行沈線により文様が描かれるもので、第三群第3種b類浮島1式新段階と判断される。02は口縁直下に櫛歯状の工具による刺突が施されるもので、型式不明としたが、第四群土器の可能性がある。



第 76 図 SK123・124・126・128・131・140・152・161～163・186・188



第77図 土坑出土遺物 (4)

SK123（第75・76図、遺構図版12、遺物図版10）

F-5グリッドにおいて検出された。長軸70cm、短軸66cmのゆるやかな楕円形を呈している。残存深度は56cmを測り、断面形状は箱型である。土層は4層に分層され自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器を主体に159.4gが検出された。掲載遺物は3点である。01は平行沈線による文様を描く第三群第3種b類浮島1式新段階、02は変形爪形文を用いるc種浮島2式。03はガラス質安山岩性の石鏃である。側面はほぼ直線状で基部は大きく凹む。凹基三角鏃である。ガラス質安山岩が浮島期の石鏃に用いられたとすれば、本遺跡から出土するガラス質安山岩の剥片類が前期にまで下る可能性が出てきた。

SK124（第76・77図、遺構図版12、遺物図版10）

F-5グリッドにおいて検出された。長軸76cm、短軸70cmの楕円形を呈している。残存深度は確認面より81cmを測り、縦長の箱型の断面形状である。覆土は黒褐色を基調とした5層に分層される。ロームブロックを多く含み、堆積状況と考え併せて人為堆積と判断される。

遺物は黒浜式土器を主体に152.4gが検出された。掲載遺物は3点である。01～03は胎土中に纖維を混入する第三群第2種黒浜式土器である。01は口縁直下に多段の平行沈線が描かれ、胴部には無節の縄文が施文される。植房式の可能性も考えられる。b類黒浜2式と判断した。02・03は単節縄文が施文されるもので同種e類とした。

SK126（第76図、遺構図版13）

F-5グリッドにおいて検出された。長軸80cm、短軸75cmの楕円形を呈している。残存深度は66cmを測り、断面形状は壁が外傾した箱型である。覆土は黒褐色を基調とした4層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は31.2gが検出された。細片ながら第三群第3種の土器が出土している。掲載遺物はない。

SK128（第76・77図、遺物図版11）

E-5グリッドにおいて検出された。SI26を切って構築されている。長軸97cm、短軸80cmの楕円形を呈している。残存深度は25cmを測り、浅い皿状の断面形状である。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器56.3gが検出された。掲載遺物は2点である。01・02はいずれも平行沈線による文様が描かれるもので第三群第3種b類浮島1式新段階である。

SK139・140（第76・77図、遺構図版13、遺物図版11）

以下の土坑はE-5グリッドにおいて検出された。

SK139はSI27を切って構築されている。長軸125cm、短軸89cmの楕円形を呈している。残存深度は27cmを測り、播鉢状の断面形態である。覆土は4層に分層される。黒褐色を基調とする1・2層が土坑の最深部に向かって落ち込む堆積状況を示す。

遺物は浮島式土器を主体として72.8gが検出された。掲載遺物は2点である。01は平行沈線による文様が描かれる第三群第3種b類浮島1式新段階。02は肋脈が明瞭な貝殻腹縁による文様で、連続刺突を行う。興津式手法にも似ているが、浮島式の鋸歯文と判断した。

SK140はSI27を切って構築されている。長軸75cm、短軸58cmの楕円形を呈し、残存深度は24cmを測る。断面形状は薄い箱型である。覆土は2層に分層され、自然堆積を示している。

本土坑から遺物は検出されなかった。

SK152（第76・77図、遺構図版13、遺物図版11）

F-6グリッドにおいて検出された。SI39を切って構築されている。長軸386cm、短軸166cmの楕円形を呈している。残存深度は19cmを測り、浅い皿状の土坑である。覆土は2層に分層され、自然堆積と判断される。

遺物は浮島式土器を主体に427.1g検出された。掲載遺物は7点である。01は平行沈線にややまばらなC字の爪形文が施文される。第三群第3種a類。02は薄手の土器で細い竹管による平行線を2条描いたのち、C字の爪形文を施文する。また外面には赤彩が施されている。第3種b類浮島1式新段階と判断している。03は丸みを帯びた三角形の把手部分の破片である平行沈線により肋骨文を意識するものであろうか、放射状の文様が描かれる。同種b類とした。04は口縁部に折り返しを有する破片で指頭による圧痕が施される。下端に僅かながら変形爪形文が施文される。このことから指頭圧痕を有する土器の出現は第3種c類浮島2段階の可能性がある。問題のある資料である。05は口縁部に折り返しが見られ、指による荒いナデ調整が加わる。第3種e類とした。06は底部の資料である。胴部下端まで肋脈が明確な貝殻腹縁により鋸歯状文様が施文されている。同種e類。07はガラス質安山岩性の石鏃である。側面はほぼ直線状で基部は大きく凹む。四基三角鏃である。SK123出土遺物同様第3種にガラス質安山岩の石鏃が出土している。

SK161・162（第76・79図、遺物図版11）

以下の土坑はD-6グリッドにおいて検出された。

SK161はSK162を切って構築されている。長軸71cm、短軸64cmの円形を呈し、残存深度は16cmを測る。底部は平坦である。覆土は単層である。

遺物は浮島式土器を主体に30.9g検出された。掲載遺物は1点である。01は口唇部に刻み目を有し、以下に変形爪形文が描かれる。第三群第3種c類浮島2式土器である。

SK162はSK161・163に東西を切られているため規模は不明である。残存深度は19cmを測る。覆土は単層である。

遺物は浮島式土器15.3gが検出された。掲載遺物は1点である。01は変形爪形文が施文される。第三群第3種c類浮島2式土器である。

SK186（第76・79図、遺構図版13、遺物図版11）

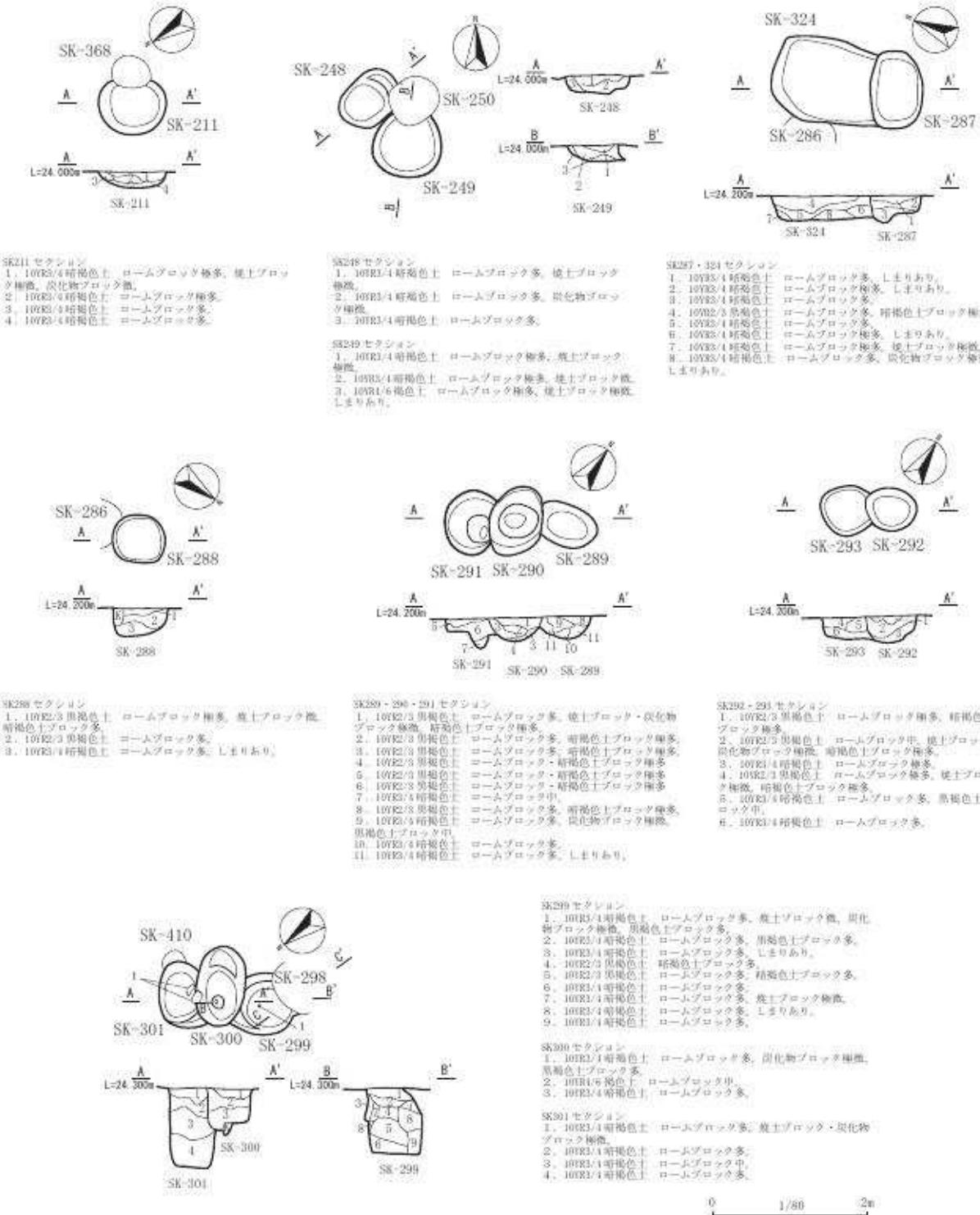
D-6・7グリッドにおいて検出された。長軸112cm、短軸84cmの楕円形を呈している。残存深度は39cmを測る。覆土は6層に分層され、人為堆積を示している。

遺物は、第4層より縦型石匙が検出されるなど計144.7gが出土した。掲載遺物は2点である。01は第三群第2種e類黒浜式土器である。器面は剥落して明瞭でないが、縄文が施文されるようである。02は頁岩質の縦長石匙である。材質は山形県朝日連峰に産出する頁岩に極めてよく似ている。板状の素材からポイント状の剥離を刃部のみに全周するように加える。同様な石匙は山形県押出遺跡にみられるもので、大木2a・b式の影響を感じさせるものである。製作技法的にみても平行剥離を規則正しく加える点など大木式のテクニックが見える。表皮部分は褐色が強くやや磨かれたようになる。図ではトーンを貼り表示した。

SK188（第76・79図、遺物図版11）

E-6グリッドにおいて検出された。長軸112cm、短軸84cmの楕円形を呈し、楕円形を呈している。残存深度は39cmを測り、浅い皿状の遺構である。覆土は2層に分層され、自然堆積を示す。

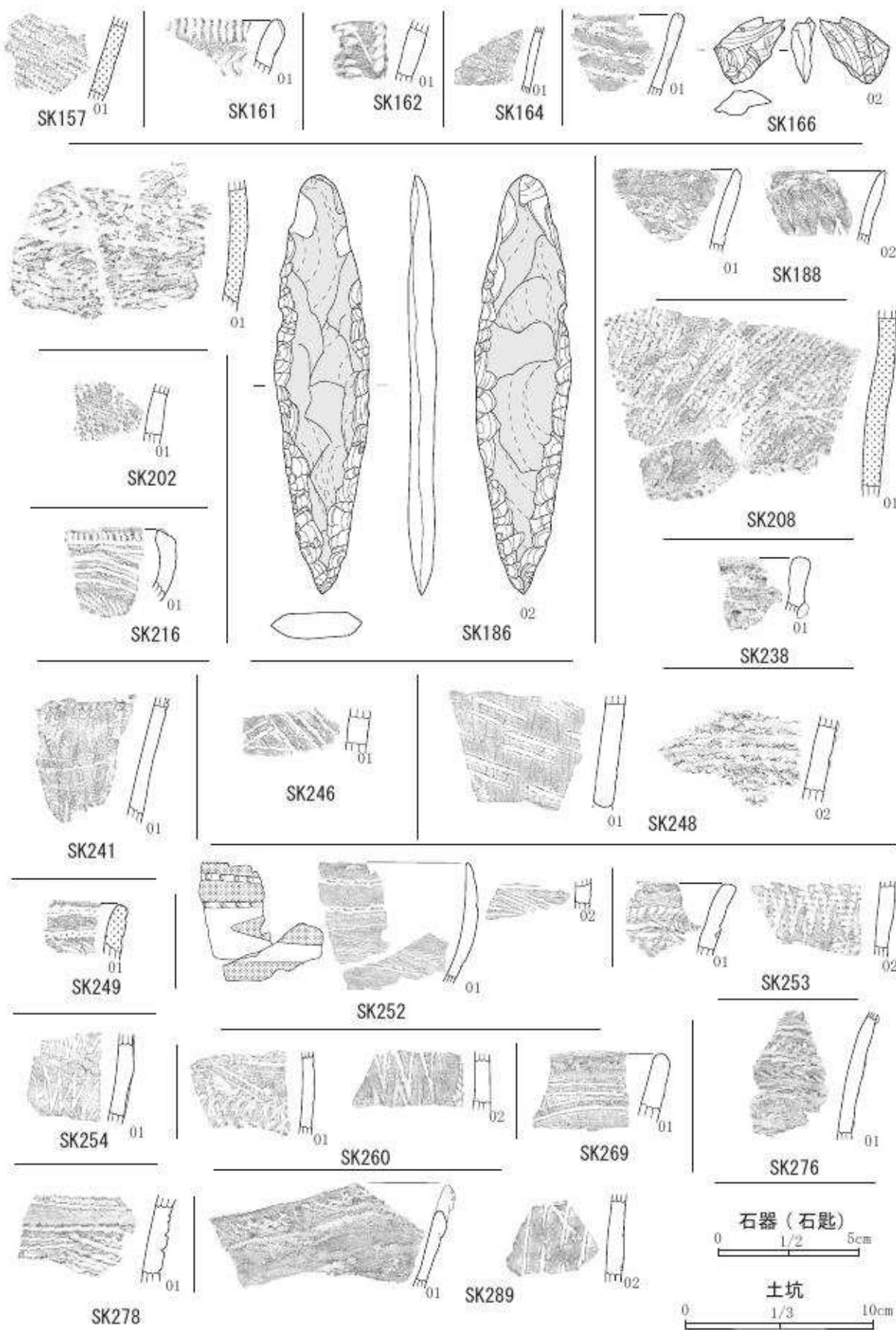
遺物は浮島式土器59.8gが検出された。掲載遺物は2点である。01は変形爪形文が施文される。第三群第3種c類。02は肋脈を有さない貝殻腹縁による鋸歯状文様が描かれる。同種e類とした。



第 78 図 SK211・248・249・287・324・288～293・299・300・301

SK211 (第 78 図、遺構図版 13)

E - 6・7 グリッドにおいて検出された。SI33 を切って構築される。東側を SK368 に切られているが、おおむね長軸 86 cm の楕円形を呈している。残存深度は 23cm を測り、ゆるやかな播鉢状の土坑である。覆土は暗褐色を基調として 4 層に分層され、自然堆積とみられる。本土坑から遺物は検出されていない。



第79図 土坑出土遺物(5)

SK248（第78・79図、遺物図版11）

E-7グリッドにおいて検出された。北東部をSK250に切られているが、長軸82cm、短軸58cmの楕円形を呈している。残存深度は24cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は縄文土器110.7gが検出された。掲載遺物は2点である。01は平行短沈線を描くもので、第三群第3種b類浮島1式新段階の土器である。02は地文に縄文を施し、浮線を多段に貼りつける。浮線上には斜め方向の刻みが施される。第5種b類諸磯b式土器である。浮島1式新段階と諸磯b式の共伴関係では良好な資料である。

SK249（第78・79図、遺物図版12）

E-7グリッドにおいて検出された。北側をSK250に切られるが、短軸83cmの不整楕円を呈している。残存深度は23cmを測り、覆土は3層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は黒浜式土器12.4gが検出された。掲載遺物は1点である。01は口唇に沿って爪形文が2条めぐり、地文には単節縄文が施文される。第三群第2種a類黒浜1式土器であろう。

SK287・324（第78・81図、遺構図版13・15、遺物図版13）

以下の土坑はF-7グリッドにおいて検出された。

SK287はSI40・SK324を切って構築され、長軸95cm、短軸58cmの不整楕円形を呈している。残存深度は36cmを測る。底部は平坦であり、壁はやや外傾する。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は11gが検出された。浮島式土器の碎片が出土しているものの掲載できる資料はなかった。第三群第3種の遺構であろう。

SK324はSI40・SK286を切って構築され、南側をSK287に切られるが、短軸104cmの不整楕円形を呈している。底部は北にいくにつれて深くなり、残存深度は最深部で32cmを測る。覆土は5層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器を主体に450.9gが検出された。掲載遺物は5点である。01～03は平行沈線と変形爪形文が同時に施文される第三群第3種c類の土器である。04は肋脈が明瞭な貝殻腹縁による鋸歯文を密に施文する土器である。第3種d類の可能性がある。05は底部の資料である。無文であるが第3種に伴うものである。

SK288（第78図、遺構図版13）

F-6グリッドにおいて検出された。SI40・SK286を切って構築されている。長軸78cm、短軸61cmの楕円形を呈し、残存深度は38cmを測る。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。本土坑から遺物は検出されていない。

SK289～291（第78・79・81図、遺構図版13・14、遺物図版12）

以下の土坑はF-6グリッドにおいて検出された。

SK289はSI35を切って構築され、後にSK290に南側を削平されている。短軸は55cmを測り、楕円形を呈していると思われる。残存深度は28cmを測り、擂鉢状の土坑である。覆土は4層に分層され、第9・10層が底部に落ち込むように堆積し、柱の痕跡である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器が70.5g検出された。掲載遺物は2点である。01は口唇部にピンセットの先端状の刺突文を施すもので第三群第4種c類形式不明の土器で前期終末の土器であろう。02は平行短沈線による文様が描かれる第3種b類浮島1式新段階であろう。

SK290はSI35、SK289・291を切り構築される。長軸96cm、短軸70cmの楕円形を呈している。残存深度は28cmを測り、擂鉢状の土坑である。覆土は黒褐色を基調とした4層に分層され、1・2層が落ち込むように堆

積するため柱穴である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器 59.6 g が検出された。掲載遺物は 2 点である。01 は口唇部に沿ってやや太い C 字の爪形文を配するもので、第三群第 3 種 a 類浮島 1 式古段階と判断した。02 は平行沈線を描くもので、同種 b 類浮島 1 式新段階。なお、本遺構出土の遺物で第 4 種 b 類の諸磯 b 式土器は SK293 出土遺物と接合した為、SK293 に掲載している。

SK291 は SI35・36 を切って構築され、後に SK290 に北側を削平されている。長軸 84 cm の不整円形を呈すと思われ、残存深度は 38 cm を測る。主体となる部分の底部は平坦であり、東よりにはピット状の落ち込みがある。覆土は 3 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は、形式不明の土器細片 11.4 g が検出された。掲載遺物はない。

SK292・293 (第 78・81 図、遺構図版 14、遺物図版 12)

以下の土坑は F-6 グリッドにおいて検出された。

SK292 は SI35・SK293 を切って構築されている。長軸 66 cm、短軸 47 cm の梢円形を呈し、残存深度は 34 cm を測る。断面形状は插鉢状である。覆土は 3 層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は 15.7 g が検出された。浮島式土器の細片が出土しているものの掲載できる資料はなかった。第三群第 3 種の遺構であろう。掲載遺物はない。

SK293 は SI36 を切って構築され、後に SK292 に北東側を削平されている。短軸 64 cm の不整円を呈し、残存深度は 27 cm を測る。箱形の断面形状である。覆土は 3 層に分層され、人為堆積を示している。

遺物は諸磯式土器を主体とした 104 g が検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は SK290 出土遺物と接合した資料である。地文に単節縄文を施文したのち、浮線によって文様が描かれる。浮線上には縄文が施文され、刻みは見られない。第三群第 5 種 b 類である。そのほか細片ながら第 3 種浮島式土器も出土しているものの掲載できる資料はない。

SK299・300・301 (第 78・81・83 図、遺構図版 14・15、遺物図版 12)

以下の土坑は F-6 グリッドにおいて検出された。

SK299 は SI39 を切って構築され、後に SK300 に北側、SK298 に南側を削平されている。短軸 78 cm の円形を呈し、残存深度は 85 cm を測る。底部はほぼ平坦で、壁は垂直である。覆土は 9 層に分層され、堆積状況から人為堆積と判断される。

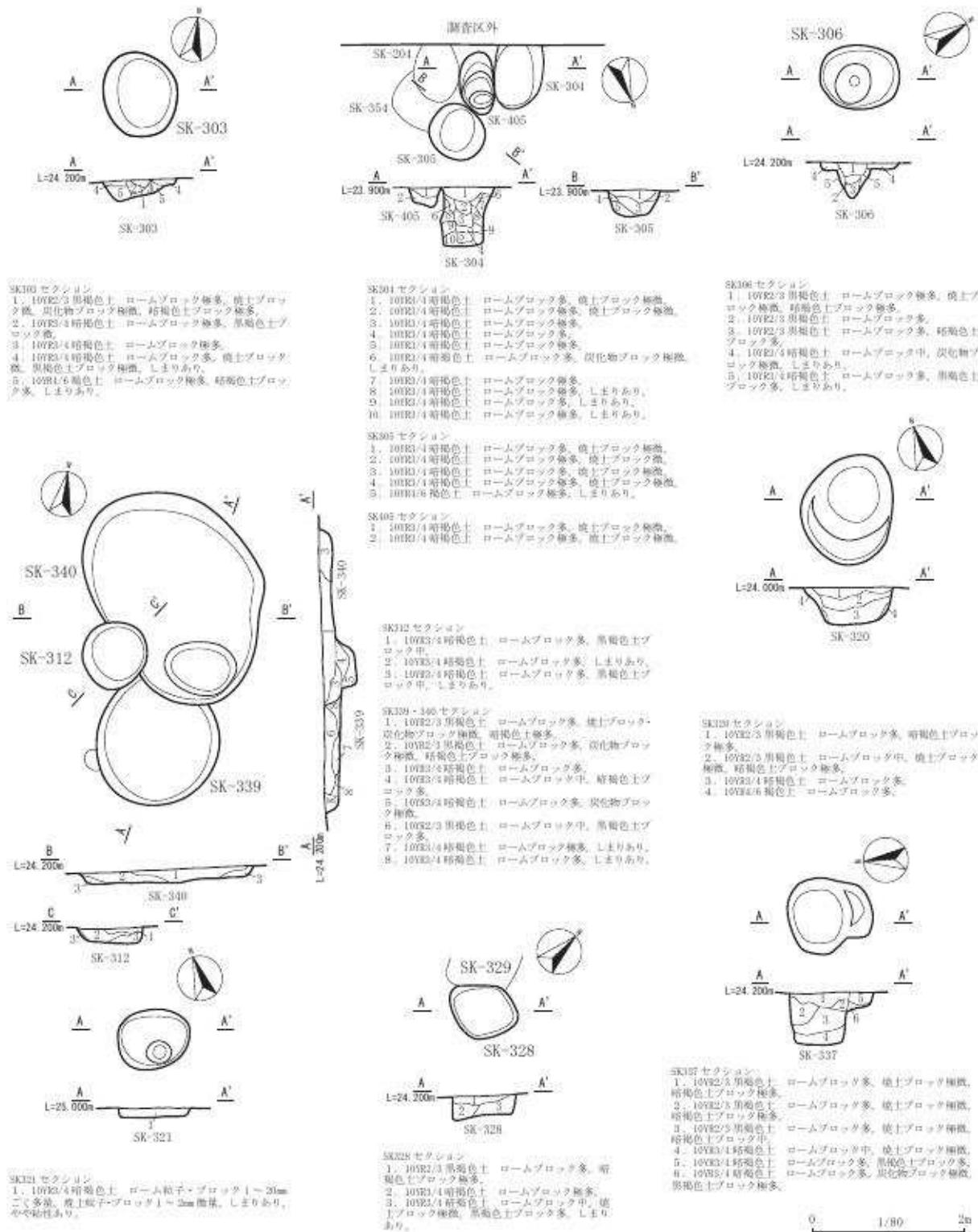
遺物は、底部より黒浜式土器が出土するなど計 169 g が検出された。掲載遺物は 2 点である。01 は第 3 群第 2 種 e 類黒浜式土器である。口縁部はほぼ直立し、器面には無節の縄文により羽状構成の文様施文される。02 は平行沈線により文様が描かれるもので、纖維の混入はない。同群第 3 種 b 類浮島式 1 式新段階である。

SK300 は SI39・SK299・301 を切って構築される。長軸 93 cm、短軸 64 cm の梢円形を呈し、残存深度は 52 cm を測る。

覆土は 3 層に分層され、第 3 層の堆積状況は人為堆積を示している。本土坑から遺物は検出されていない。

SK301 は SK410 を切って構築され、南側の上部を SK300 に削平されている。長軸 86 cm の梢円形を呈し、残存深度は 101 cm を測る。断面形状は縦長の箱形である。覆土は暗褐色を基調とした 4 層に分層され、2・3・4 層にはロームブロックを多く含む。覆土の状態と堆積状態から人為堆積と判断される。

SK301 より遺物は 486.9 g 検出され、底部より黒浜式土器が出土した。掲載遺物は 3 点である。01 は口縁から胴部下半にかけての大形資料である。器面には単節縄文がやや粗雑に施文され、第三群第 2 種 e 類黒浜式土器である。02 はガラス質安山岩の剥片である。一部微細な使用痕が観察される。03 はチャート質の凹基三角族である先端部は欠損している。

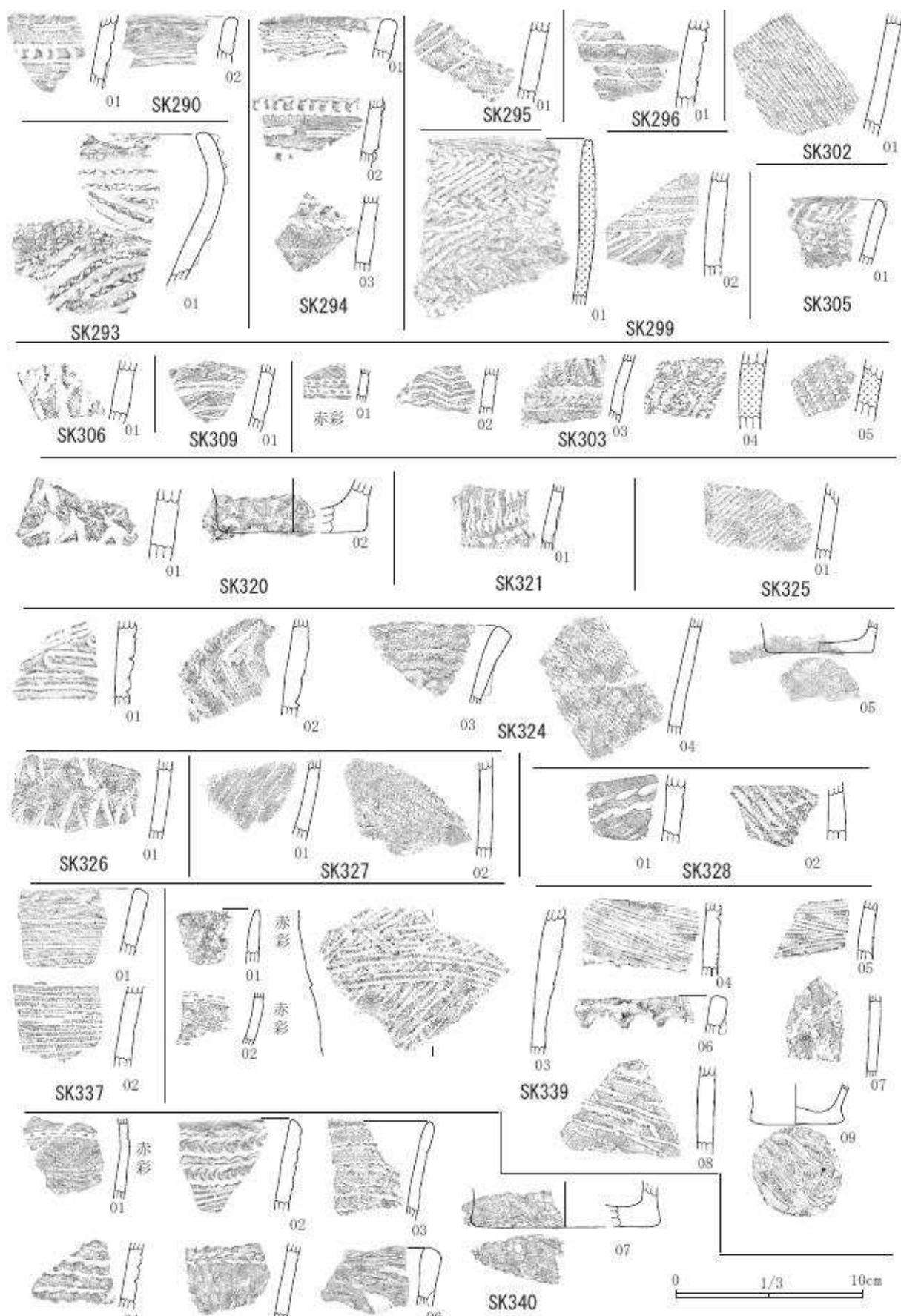


第 80 図 SK303・304・305・405・306・312・339・340・320・321・328・337

SK303 (第 80・81 図、遺物図版 12)

E・F-6 グリッドにおいて検出された。SI38・39 を切って構築されている。長軸 117 cm、短軸 96 cm の不整円形を呈し、残存深度は 32 cm を測る。覆土は 5 層に分層される。本遺構は覆土の堆積状況から柱穴である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器を主体として 140.9 g が検出された。掲載遺物は 5 点である。01 は薄手で赤彩が施される



第81図 土坑出土遺物 (6)

口唇部直下の破片であろうが細い平行線に間隔の広い爪形文が施文される。第三群第3種b類浮島1式新段階であろう。02は平行沈線による波状文が描かれるやはり同種b類である。03は変形爪形文が施文されるc類浮島2式である。04・05は縄文が地文に施文される細片である。第5種b類諸磯b式である。

SK304・305・405（第80・81・83・88図、遺構図版15、遺物図版12～14）

以下の土坑はD-7グリッドにおいて検出された。

SK304の南側の一部は調査区外になるため未調査であるが、短軸62cmの不整梢円を呈していると思われる。残存深度は58cmを測る。底部は平坦であり、壁の下部は垂直で上部は外傾する。覆土は10層に分層される。覆土の堆積状況から本遺構は柱穴である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器を主体に713.6gが検出されている。掲載遺物は4点である。01は口縁部から同下半までの資料である。口縁部文様帶には平行沈線による曲線を多用しない直線的な文様が描かれる。地文には縦方向の撚糸文が荒く施文される。02は肋骨文を意識する文様が施文されるが文様部と胴部の境にはやや変形爪形に近い平行線が描かれている。地文は縦方向の撚糸文。03は胴部下半の破片で撚糸文のみが施文される。04は口縁部から胴部下半にかけての資料であるが、接合できない同一個体の破片である。平行沈線による三角形の区画文を描くものであるが、口縁部直下には変形爪形文が施文される。胴部は短沈線が紗方向に描かれる。

本遺構の遺物は、概ね第三群第3種b類からc類にかかる資料と判断される。

SK305はD-7グリッドにおいて検出された。長軸74cm、短軸66cmの不整円形を呈し、残存深度は35cmを測る。播鉢状の土坑である。覆土は4層に分層され、人為堆積を示している。

遺物は浮島式土器16.2gが検出された。掲載遺物は1点である。01は口唇部に刻みを有し、直下に変形爪形文が施文される。第三群第3種c類である。

SK405は長軸80cm、短軸42cmの不整円を呈し、残存深度は47cmを測る。覆土は2層に分層され、自然堆積を示す。

遺物は浮島式土器61.1gが検出された。掲載遺物は3点である。01・02は胴部下半の資料であるが、いずれにも燃り糸文が施文される。第三群第3種a・b類浮島1式段階である。03は変形爪形文が施文されるもので、第3種c類である。

SK306（第80・81図、遺物図版13）

E-6グリッドにおいて検出された。SI38を切って構築されている。長軸102cm、短軸86cmの梢円形を呈している。残存深度は最深部で53cmを測る。底部は段を持ち、浅い皿状の部分の下に、上部に向け広がる三角錐の部分が付く断面形状である。覆土は5層に分層される。覆土の堆積状況から本土坑は柱穴である可能性が考えられる。

遺物は浮島式土器33.7gが検出された。掲載遺物は1点である。01は肋脈の無い貝殻腹縁による鋸歯文が描かれる胴部の破片である。第三群3種e類の土器である。

SK312・339・340（第80・81図、遺構図版15、遺物図版13）

以下の土坑はF-6グリッドにおいて検出された。

SK312はSI37、SK339・340を切って構築されている。長軸87cm、短軸79cmの不整円を呈し、残存深度は20cmを測る。底部は平坦な土坑である。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は8.7gが検出された。浮島式土器の碎片が出土しているものの掲載できる資料はなかった。第三群第3種の遺構であろう。掲載遺物はない。

SK339はSI36・37を切って構築され、SK312・340に北側を切られている。短軸151cmの不整円形を呈している

と思われる。残存深度は23cmを測り、浅い皿状の土坑である。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器を主体に351.4g検出された。掲載遺物は9点である。01・02は薄手で細い平行沈線状に爪形文が付され、外面に赤彩が施される土器である。第三群第3種b類浮島1式新段階。03～05は平行沈線による文様が描かれるもので03には地文に撚り糸文が施文されるやはり3種b類である。06は口縁部の折り返し部分に指頭による圧痕を加える土器で、第3種d類浮島3式土器である。07は肋脈が明瞭な貝殻腹縁による鋸歯状文様を描く。また、08は胴部下半の破片で、撚糸文が施文される。第3種e類と判断される。09は薄手の土器で底部の資料である纖維の混入はない。第3種浮島式土器のミニチュア土器の可能性がある。

SK340はSI37・39、SK339を切って構築され、SK312に切られている。長軸275cm、短軸209cmの不整楕円形を呈している。残存深度は27cmを測る。覆土は5層に分層され、第4・5層は浅い皿状の主体部に切られた播鉢状の土坑である可能性がある。

遺物は浮島式土器を主体に291.3g検出された。掲載遺物は7点である。01は薄手の土器で内湾がきつい小形の土器である。口縁直下には平行沈線が描かれ爪形文が間隔をおいて施文される。外面には赤彩が施される。第三群第3種b類浮島1式新段階。02～05は変形爪形文が施文される土器である。第3種c類浮島2式土器である。06は指頭による圧根を加える土器で、第3種d類浮島3式土器である。07は第3種の底部の破片である。

SK320（第80・81図、遺構図版15、遺物図版13）

E-6グリッドにおいて検出された。長軸150cm、短軸130cmの不整楕円形を呈している。残存深度は51cmを測る。覆土は4層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は浮島式土器を主体に105.8gが検出された。掲載遺物は2点である。01は肋脈の無い貝殻腹縁による鋸歯文が描かれる胴部の破片である。02は底部の破片である。いずれも第三群3種e類の土器である。

SK321（第80・81図、遺物図版13）

E-6グリッドにおいて検出された。長軸92cm、短軸82cmの楕円形を呈している。残存深度は14cmを測り、浅い皿状の土坑である。南よりにはピットが穿たれている。ピットは長軸34cm、短軸29cmの楕円形であり、深度は本土坑の床面より17cmを測る。本土坑の覆土は単層である。

遺物は浮島式土器13.5gが検出された。掲載遺物は1点である。01は変形爪形文を施文するものであるが、やや三角文に類似する。第三群第3種d類浮島3式土器の可能性がある。

SK328（第80・81図、遺物図版13）

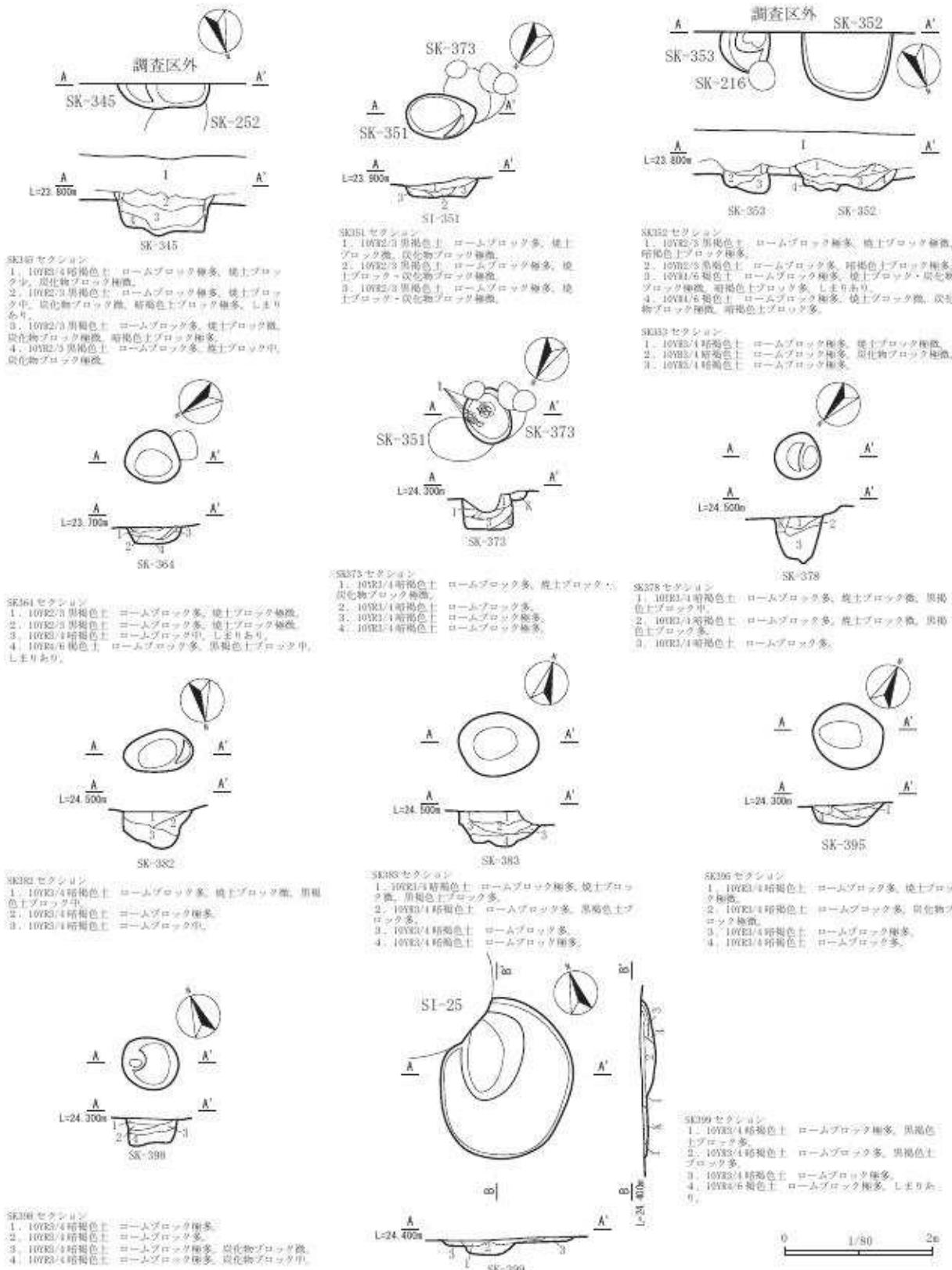
F-6グリッドにおいて検出された。SI40・47、SK329を切って構築されている。長軸77cm、短軸75cmの不整楕円形を呈している。残存深度は30cmを測り、断面形状は浅い箱状である。覆土は3層に分層され、第2層はロームブロック（1～10mm）を極多量含み、覆土とその堆積状況から人為堆積と考えられる。

遺物は49.9gが検出された。掲載遺物は2点である。01は変形爪形文を施文するもので第三群第3種c類浮島2式土器である。02は0段多条の単節RLを施文する土器で胎土中に纖維の混入は見られない。第5種b類である。

SK337（第80・81図、遺構図版15、遺物図版13）

F-6グリッドにおいて検出された。SI39を切って構築されている。長軸106cm、短軸103cmの双円形を呈している。南側の突出した部分には、土坑が重複する可能性がある。残存深度は72cmを測り、主体部は箱型の断面形状である。覆土は6層に分層され、人為堆積を示している。

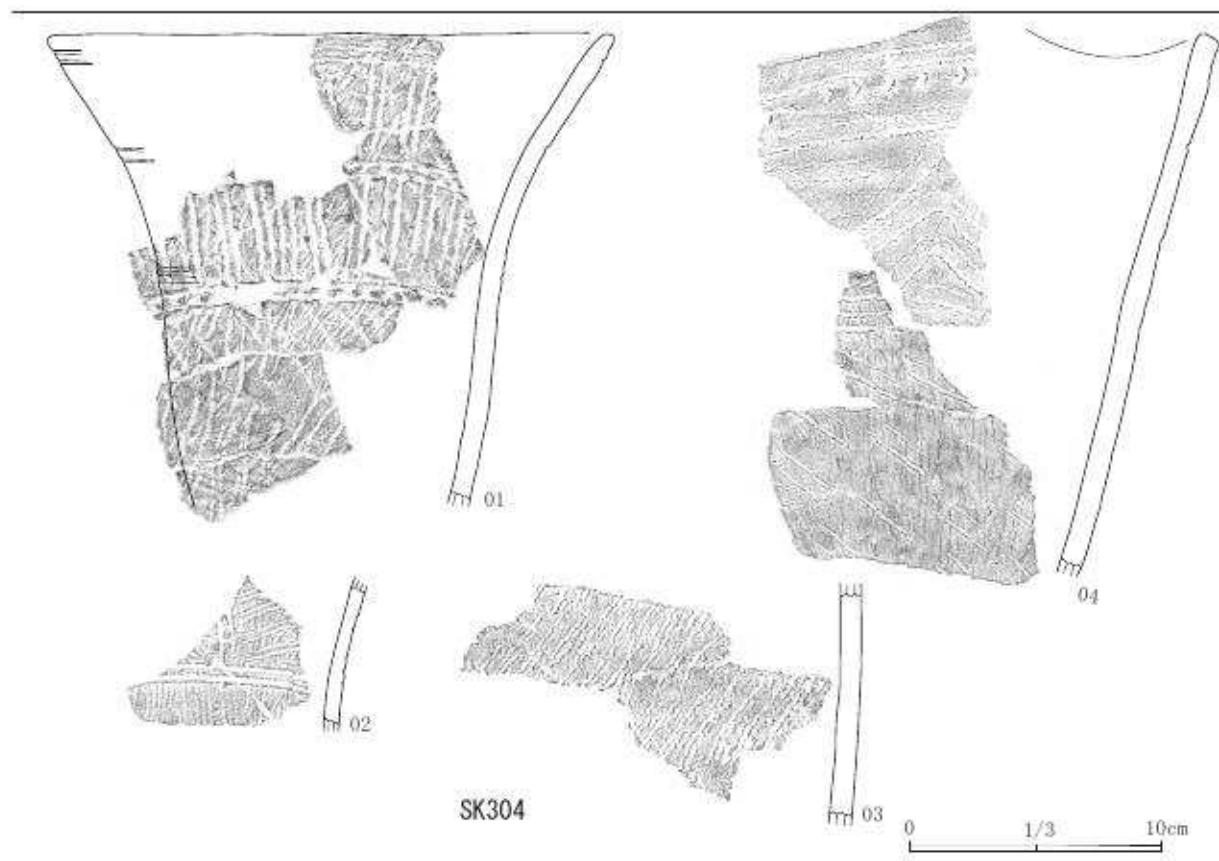
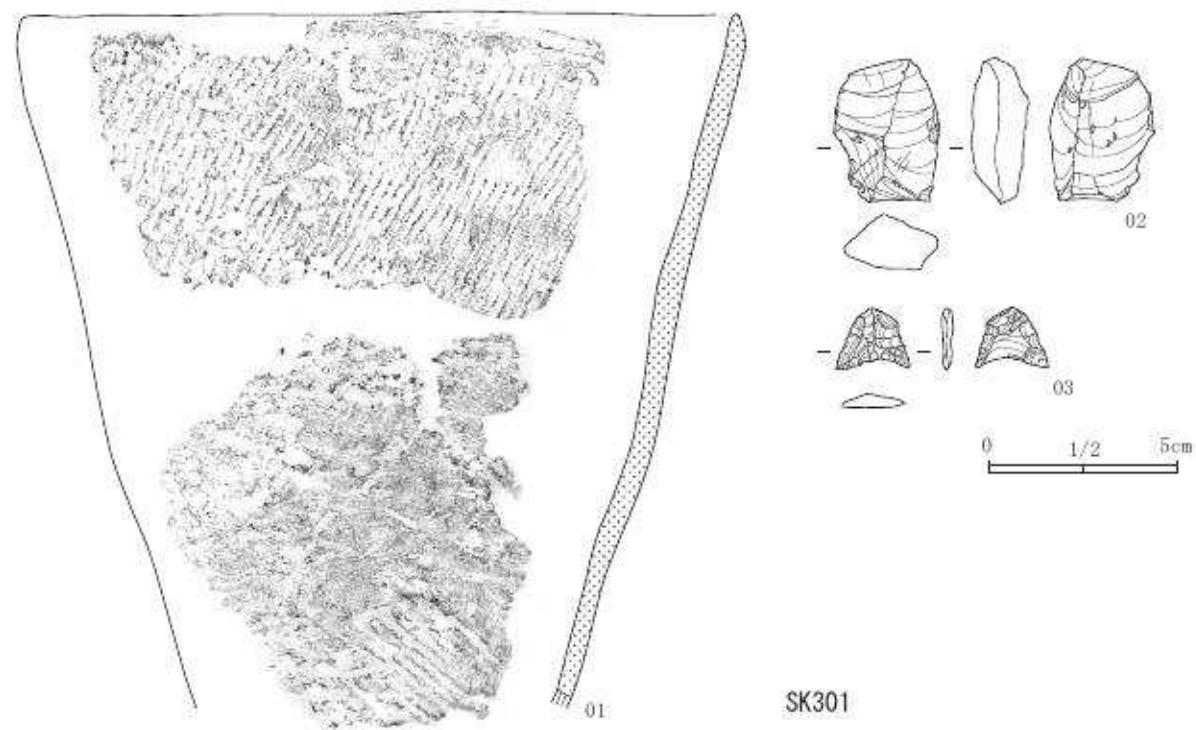
遺物は浮島式土器を主体に289gが検出された。掲載遺物は2点である。01・02は平行沈線を施文する土器である。第三群第3種b類浮島1式新段階。



第82図 SK345・351・352・353・364・373・378・382・383・395・398・399

SK345 (第 82・87 図、遺物図版 13)

E-7グリッドにおいて検出された。SK257を切って構築される。南側は調査区外であるため未調査であるが、長軸128cmの梢円形を呈しているとみられる。残存深度は47cmを測り、箱型の断面形状である。覆土は4層に



第 83 図 土坑出土遺物 (7)

分層され、自然堆積を示している。

遺物は浮島式土器を主体に 467.8 g 検出された。掲載遺物は 6 点である。01 は平行沈線を用いる第三群第 3 種 b 類浮島 1 式新段階である。02 は肋脈を有する貝殻腹縁により鋸歯状の文様を密に施文するもので 3 種 d 類浮島 3 式の可能性がある。03 は薄手の土器で細変である外面に赤彩が施される。3 種 b 類。04 ~ 06 は変形爪形文が施文される土器で、c 類。

SK351 (第 82・87 図、遺物図版 14)

F-5 グリッドにおいて検出された。SI23 の完掘後、精査したところ検出され、SK373 の南側を切って構築され、SI23 に上部を削平されている。長軸 96 cm、短軸 58 cm の梢円形を呈し、残存深度は SI23 の床面より 32 cm を測る。覆土は 3 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は諸磯式土器・浮島式土器など 64.2 g が検出されている。掲載遺物は 1 点である。01 は屈曲する頸部に爪形文で区画された内部に縄文を充てんする木ノ葉状の入り組み文が描かれる。第 5 種 a 類諸磯 a 式土器である。そのほか少量であるが第 3 種浮島式の遺物も出土している。

SK352 (第 82 図、遺構図版 15)

E-7 グリッドにおいて検出された。SI33 を切り構築されている。南側は調査区外であるため、規模は不明である。残存深度は 21 cm を測る。覆土は 4 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は 11.8 g 検出されている。浮島式土器の碎片が出土しているものの掲載できる資料はなかった。第三群第 3 種の遺構であろう。

SK353 (第 82・87 図、遺物図版 14)

E-7 グリッドにおいて検出された。北側を SK216 に切られる。南側は調査区外であるため、規模は不明である。残存深度は 28 cm を測る。覆土は暗褐色を基調とした 3 層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は浮島式土器 63.2 g が検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は幅広の変形爪形文が施文される。第三群第 3 種 c 類浮島 2 式土器である。

SK364 (第 82・87 図、遺物図版 14)

E-5 グリッドにおいて検出された。SI26 を切って構築されている。長軸 75 cm、短軸 65 cm の不整円形を呈している。残存深度は 27 cm を測る。底部は平坦で壁は外傾する。覆土は 4 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は 93.9 g 検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は変形爪形文が施文される。第三群第 3 種 c 類浮島 2 式土器である。そのほか第四群第 1 種中期五領ヶ台式土器の出土もある。混入品と判断した。

SK373 (第 82・87 図、遺物図版 14)

F-5 グリッドにおいて検出された。SI23・24 の完掘後、精査したところ検出された。SK351 に北側を切られ、SI23・24 に上部を削平されている。短軸 58 cm 梢円形を呈していると思われ、残存深度は 48 cm を測る。覆土は 4 層に分層され、自然堆積を示している。

遺物は、第 1 層から黒浜式土器が検出されたほか、計 817.3 g が確認された。掲載遺物は 1 点である。01 は深鉢胴部の大破片である。胎土中に纖維を混入し、器面には附加条第 1 種の縄文が密に施文される。第三群第 2 種黒浜式土器である。

SK378 (第 82・87 図、遺物図版 14)

F-3 グリッドにおいて検出された。SI21 の完掘後精査したところ検出された。長軸 65 cm、短軸 60 cm の梢円形を呈し、残存深度は SI21 の床面から 59 cm を測る。覆土は暗褐色を基調とした 3 層に分層され、自然堆積と考えられる。

遺物は五領ヶ台式土器を主体に 105.8 g 検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は深鉢胴部から頸部にかけて括れ部分の破片である。刻みを有す隆帯がめぐり、隆帯から Y 字に懸垂文が施文される。地文は LR の縄文が縦方向に回転施文される。第四群第 1 種 b 類五領ヶ台 2 式土器である。本資料が最大の破片で他には第三群 2 種及び 3 種の土器が混ざる。

SK382 (第 82・87 図、遺物図版 14)

F-3 グリッドにおいて検出された。SI21 の完掘後精査したところ検出された。長軸 86 cm、短軸 54 cm の楕円形を呈し、残存深度は SI21 の床から 59 cm を測る。覆土は 3 層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は黒浜式土器を主体に 135 g 検出された。掲載遺物は 5 点である。01 は口唇直下の破片で平行沈線が多段に描かれる。第三群第 2 種 b 類黒浜 2 式土器でも植房式に類似している。02 は爪形文が描かれるもので同種 a 類黒浜 1 式の可能性がある。03 は同種の底部の破片であるやや上げ底気味になる。下端にまで単節縄文が施文される。同種 e 類。04・05 は平行沈線が描かれ地文に撚糸文を施す。胎土中に纖維の混入は見られない。第 3 種 b 類浮島 1 式新段階である。

SK383 (第 82・88 図、遺物図版 14)

F-3 グリッドにおいて検出された。SI21 を切って構築されている。長軸 94 cm、短軸 83 cm の楕円形を呈し、残存深度は 56 cm を測る。覆土は 4 层に分層され、自然堆積を示している。

遺物は 256.2 g が検出された。掲載遺物は 2 点である。01 は平行沈線による弧状の文様の間に、円形の刺突文を加える。薄手で、地文には撚糸文が観察される。第三群第 3 種 a 類浮島 1 式古段階の資料である。02 は凝灰岩の自然礫を用いる凹石である。およそ半分に折損するもので端部は敲き石として用いられている。

SK395 (第 82 図、遺構図版 16)

F-6 グリッドにおいて検出された。長軸 85 cm、短軸 82 cm の不整円を呈している。深度は確認面より 35 cm を測り、床には凹凸があるが、おおむね擂鉢状の断面形状である。覆土は褐色を基調とした 4 層に分層され、自然堆積を示している。

本遺構から遺物は検出されていない。

SK398 (第 82・88 図、遺構図版 16、遺物図版 14)

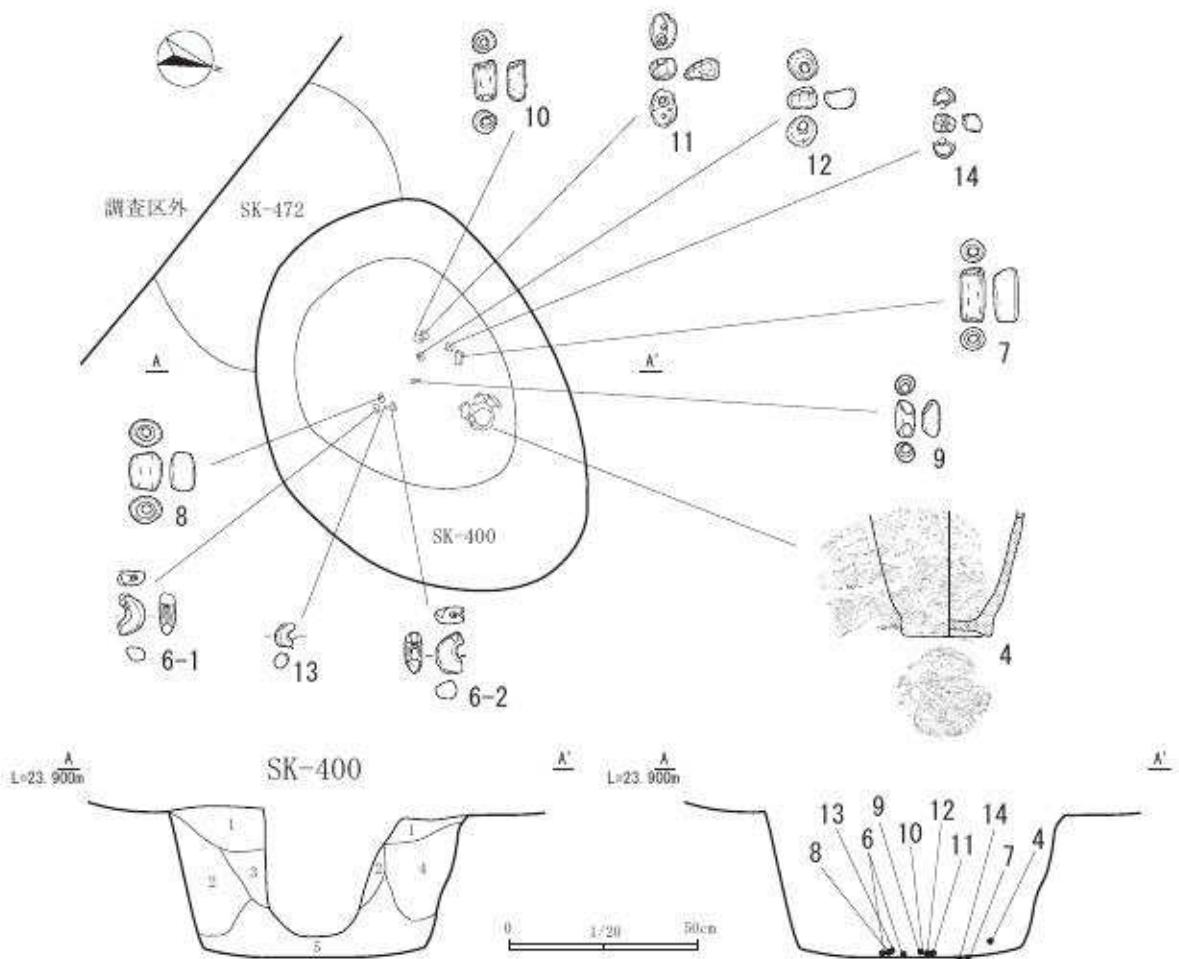
F-2 グリッドにおいて検出された。SI48 を完掘した後、精査したところ検出された。長軸 93 cm、短軸 70 cm の円形を呈し、残存深度は SI48 の床面より 38 cm を測る。覆土は 4 層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は黒浜式土器を主体に 54.3 g 検出された。掲載遺物は 1 点である。01 は胎土中に纖維を混入するもので器面には単節 RL および LR による羽状縄文が施文される。第三群第 2 種 e 類黒浜式土器である。

SK399 (第 82・88 図、遺構図版 16、遺物図版 14)

F-5 グリッドにおいて検出された。北西の一部を SI25 に切られる。長軸 219 cm、短軸 181 cm の不整楕円を呈し、残存深度は 20 cm を測る。浅い皿状の遺構である。覆土は 4 層に分層され、第 2 層に接する底部が深くなってしまっており、根攪乱か本土坑を切った土坑である可能性がある。薄い皿状の土坑であったものが攪乱あるいは切られ、その後堆積したのが第 1 層であるとみられる。

遺物は浮島式土器を主体とした土器片と磨り石の計 444.8 g が検出された。掲載遺物は 3 点である。01 は胴部下半の土器片である。撚糸文が施文される。第三群第 3 種 a・b 類浮島 1 式土器。02 は肋脈が明確な貝殻腹縁による鉗歯状文様が密に施文される。第 3 群 3 種 e 類浮島式土器。03 は安山岩製の凹石。全体に楕円形に整形を行い、側面は磨石に用いられる。



第 84 図 SK400

SK400 考古資料
 1. 10TR3/4 斜面土 ロームブロック極多、焼上ブロック極微。しまりあり。
 2. 10TR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック極多。しまりあり。
 3. 10TR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック極多、地土ブロック極微。しまりあり。
 4. 10TR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック極多。しまりあり。
 5. 10TR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック極多。炭化物ブロック微。しまりあり。

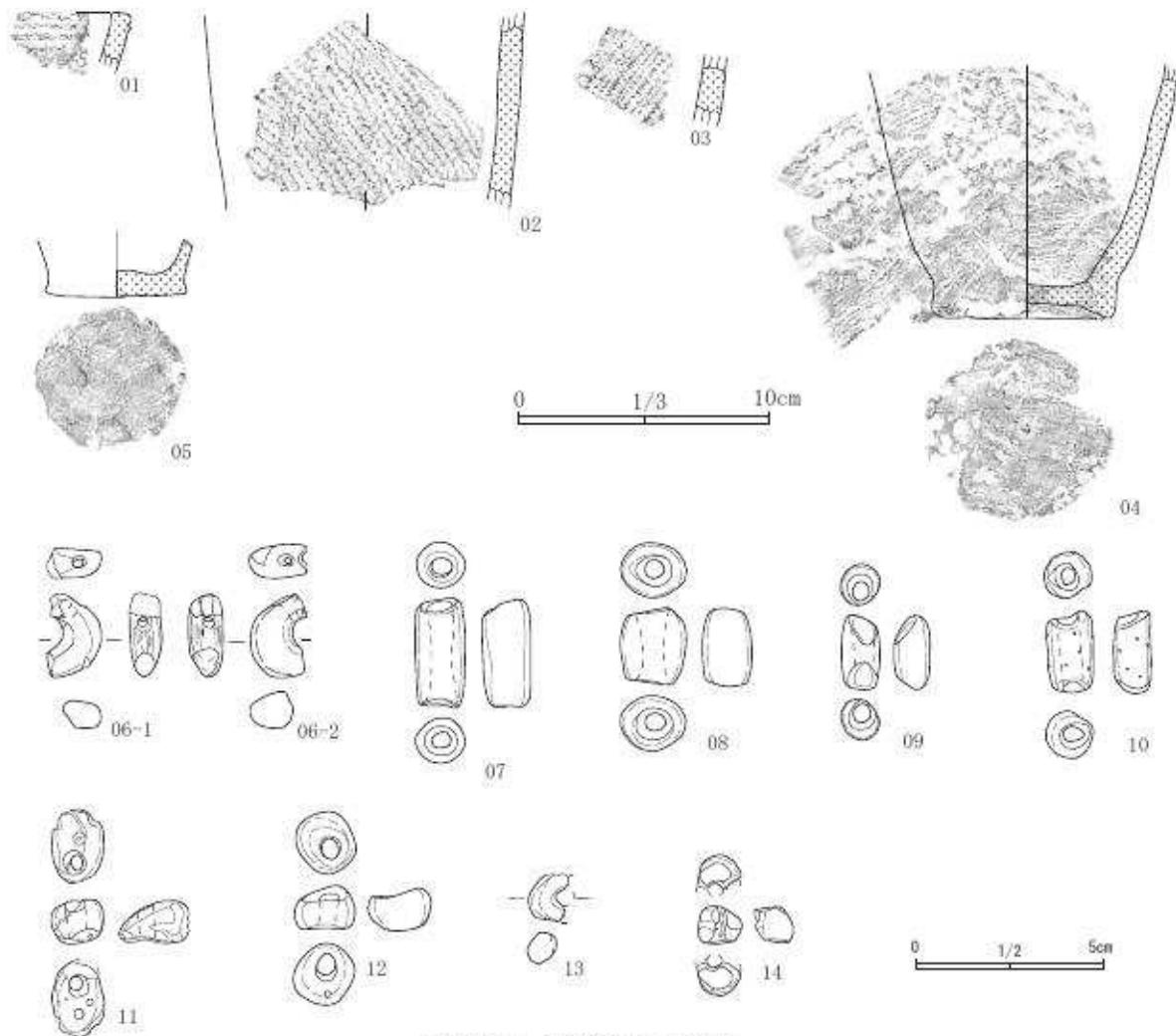
SK400 (第 84・85 図、遺構図版 16、遺物図版 14)

E-7 グリッドにおいて検出された。当初、SI33 に伴うビットとしてとらえていたが、装身具が検出されたため精査したところ、同住居に上部を削平された遺構であると判断された。SK472 を切って構築される。長軸 110 cm、短軸 82 cm の梢円形を呈し、残存深度は最深部で SI33 の床面から 40 cm を測る。覆土は 5 層に分層され、人為堆積を示す。

遺物は覆土最下層において玦状耳飾り、管玉、丸玉、黒浜式土器が検出されている。その他、諸磯式土器を含め計 450.9 g が検出されているが、諸磯式土器は SI33 から流れ込んだものとみられる。本土坑は、梢円形である形態と遺物から墓坑であると判断される。掲載遺物は 14 点である。01～05 は胎土中に纖維を混入する第三群第 2 種黒浜式土器である。01 は口縁部に平行沈線を描く土器で b 類黒浜 2 式土器、02・03 は単節 RL の繩文が施文される胴部片。第 2 種 e 類。04・05 は底部の資料である。05 で平底、04 はやや上げ底気味である。

06 は玦状耳飾りである。材質は白色の滑石中央部分で 2 つに折損し、出土状況は互いに逆方向の X 字状で出土している。いずれも欠損部分に穿孔が施され、左側の資料には 2 か所の補習孔が穿たれるが 1 孔は穿孔途中に欠損した為であろうか再度横に穿孔している。穿孔は両側面から行われている。切り目は若干の擦痕が見えるものの、技法は断定できない。

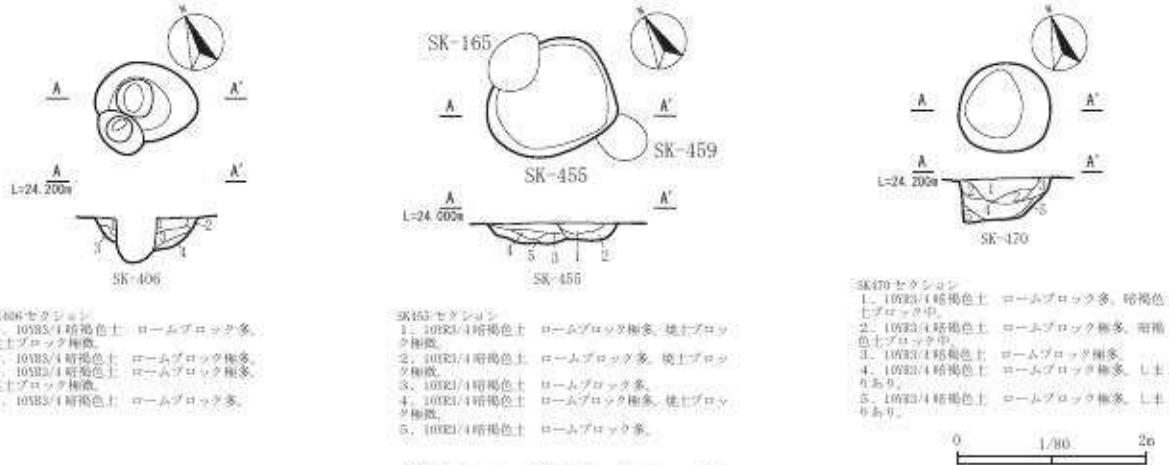
07～10 は管状を呈する玉である。07・09・10 は円筒状で 08 のみやや胴部が膨らむ壺状になる。穿孔はいず



第85図 SK400出土遺物

れも両方からの穿孔である。石材はいずれも緑色の斑点を有する滑石製である。10には輝石の混入が顕著で、常陸太田周辺で産する滑石にはこれらの輝石を多く含有することが知られており、石材の産地は近隣であることが想定される。

11～14は琥珀製の丸玉である。いずれも濃い褐色の飴色を呈する。蓑科哲夫氏よりご教示で、自然界に産する琥珀はいわゆる琥珀色で黄色味が強いが、空気に触れると酸化により赤みを帯びるとのことである。11はやや楕円形を呈するもので、ほぼ完形。2か所に穿孔の痕跡があるが1か所は途中で中断し未貫通である。穿孔は円筒状に開けられる。12はやや扁平な玉で完形品である。穿孔は円筒状。13は折損している。穿孔は円筒状に開けられる。14はやや厚みのある小型の玉であり、やはりほぼ半分に折損している。穿孔は円筒状。



第 86 図 SK406・455・470

SK406 (第 86 図、遺構図版 16)

本土坑は E - 6 グリッドに位置し、SK188 の覆土を掘削したところ検出された。長軸 110 cm、短軸 64 cm のおおむね楕円形を呈するが、南西側が突出している。残存深度は 36 cm を測り、擂鉢状の遺構である。覆土は 4 層に分層され、自然堆積を示す。

本土坑から遺物は検出されていない。

SK455 (第 86 図、遺構図版 16)

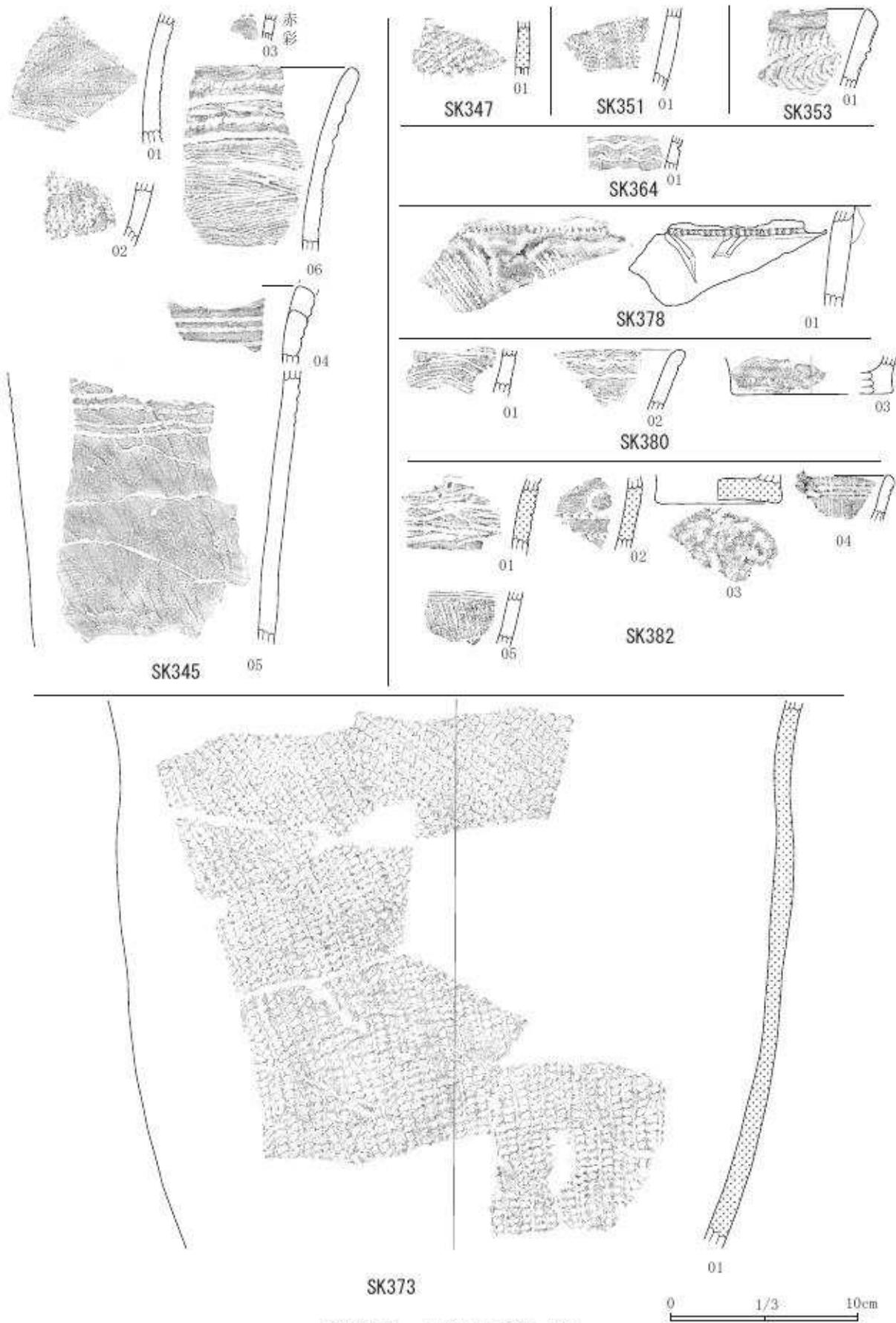
D - 6 グリッドにおいて検出された。SK459 を切って構築され、SK165 に切られる。長軸 136 cm の楕円形を呈しており、残存深度は 26 cm を測る。床に段があるものの、おおむね皿型の断面形である。覆土は 5 層に分層され、第 1・2 層は本土坑の主体部を切った遺構である可能性がある。

本土坑から遺物は検出されていない。

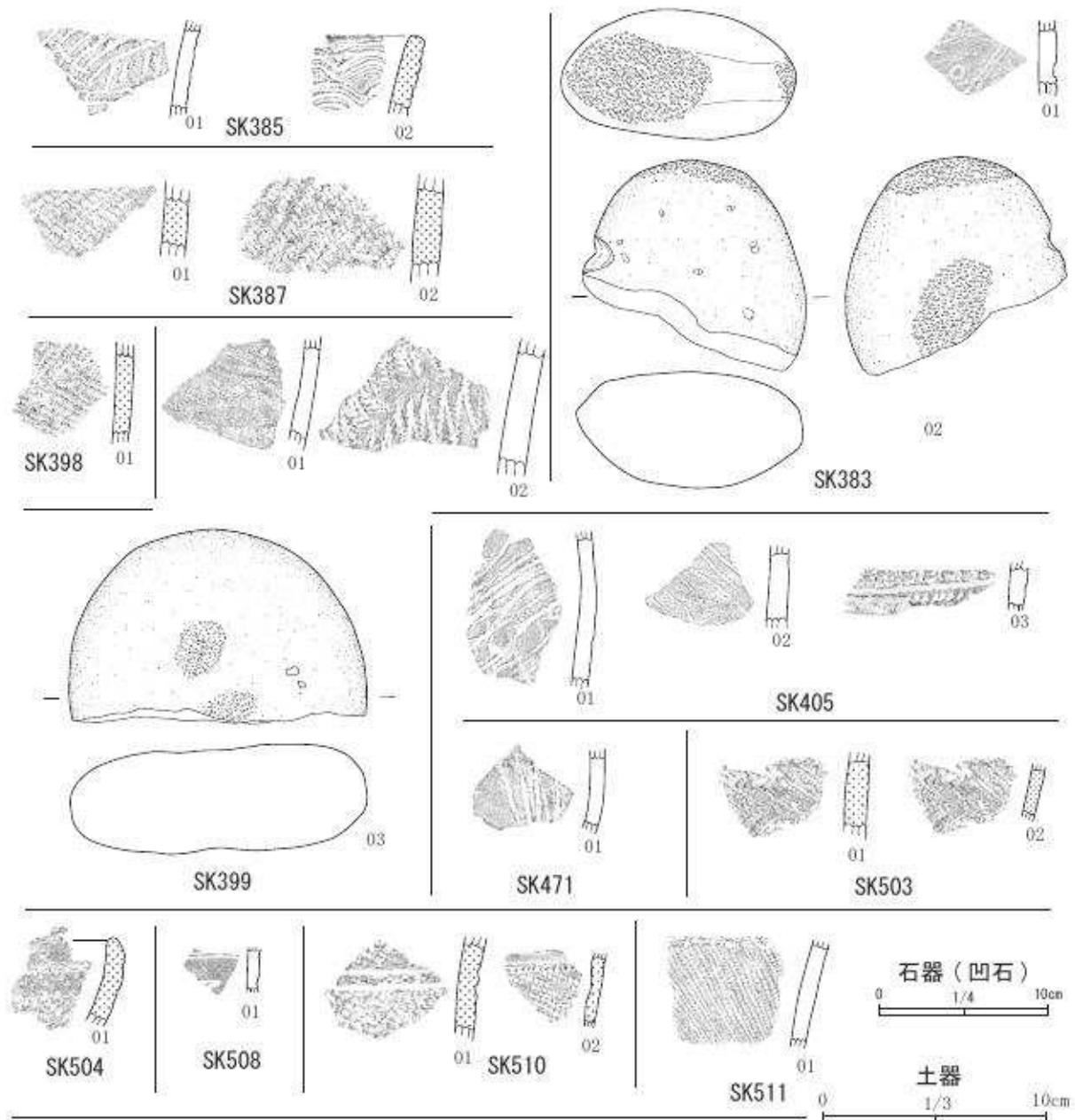
SK470 (第 86 図)

E・F - 5 グリッドにおいて検出された。長軸 95 cm、短軸 90 cm の円形を呈し、残存深度は 47 cm を測る。擂鉢状の断面形状であり、覆土は 5 層に分層される。第 2・3・4・5 層にはロームブロックが極多量含まれる。本土坑は覆土とその堆積状況から人為堆積であると考えられる。

掲載遺物はないが、細片ながら第三群第 3 種浮島式土器 16.8 g が出土している。



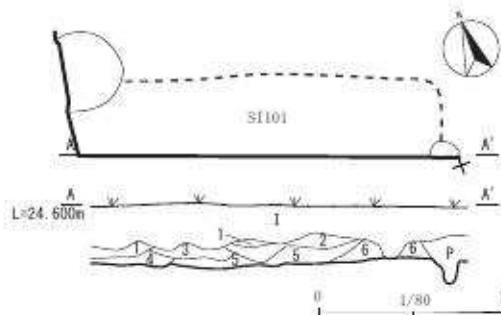
第 87 図 土坑出土遺物 (8)



第88図 土坑出土遺物 (9)

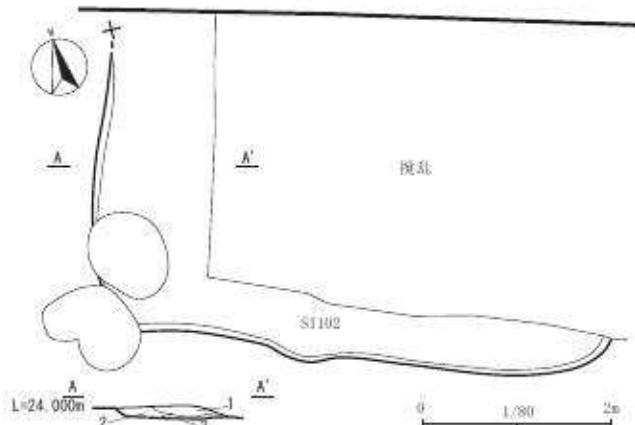
第6節 西区の遺構と遺物

第1項 住居跡



第89図 SI1101

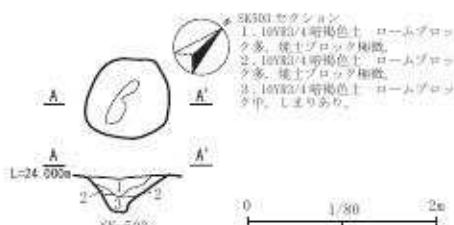
SI1101 は A-A' グリッドで検出された。西壁付近で SK502 に切られ、南壁付近では SK512 に壊される。SI1101 自体は調査区外に伸延するが、調査区内でも平面プランを検出できなかったため住居跡の法量などは不明である。調査区壁面で検出した住居覆土などから推測すると、方形を呈していた可能性が推測される。削平著しい住居北壁はほとんど残っていないため壁の立ち上がり傾斜は明らかにできなかった。覆土は、暗褐色土が一部混入するものの、黒褐色土による。柱穴の可能性があるピットや炉跡は検出されていない。出土遺物もなく、遺構の切り合い関係もないため、不明である。



第90図 SI1102

SI1102 は A-A' グリッドで検出された。住居の大半は搅乱に壊され、さらに住居の南西隅も SK503 ~ 506 によって切られる。残存検出した範囲で長軸約 5.6 m、短軸約 3.4 m、方形を呈していた可能性がある。削平によって残っている深度も浅く、確認できたのは最大約 4 cm で、住居壁面の立ち上がりをあえて推測すれば、緩やかであった可能性が見出される。覆土は暗褐色土による堆積である。柱穴の可能性があるピットや炉跡も検出できていない。遺物は検出されず、遺構の切り合い関係もないため、詳細は不明である。

第2項 土坑



第91図 SK503

SK503 は A-A' グリッドにおいて検出された。SI1102 を切って構築されている。長軸 88 cm、短軸 84 cm の楕円形を呈する。残存深度は 41 cm を測る。覆土は 3 層に分層され、自然堆積とみられる。

遺物は 28.8 g が検出された。掲載遺物は 2 点である。01・02 はいずれも繊維を混入する土器で第三群第 2 種黒浜式土器である。01

は LR と RL で羽状の構成、02 は単節 RL の縄文が施文される。いずれも e 類とした。

表3 土坑計測一覧表(1)

遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考	遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考
SK001	D-3	88	75	18	—	—	—		SK065	E-4	50	49	31	—	—	—	
SK002	D-3	71	41	10	—	—	—		SK066	E-4	53	45	27	第三群第3種c類浮島2式土器(01・02)	73	—	
SK003	D-3	129	108	35	第三群第2種c類浮島式土器	—	—		SK067	H-5	63	62	65	—	—	—	
SK004	F-2	69	60	21	—	—	—		SK068	G-5	77	75	47	別記	73	72	
SK005	F-2	95	85	34	別記	71	70		SK069	G-5	65	61	76	—	—	72	
SK006	E-3	26	23	33	—	—	—		SK070	G-5	73	67	51	—	—	72	
SK007	E-3	50	49	24	—	—	—		SK071	G-5	74	84	89	別記	—	72	
SK008	E-3	31	26	26	—	—	—		SK072	G-5	51	46	23	別記	—	72	
SK009	F-3	46	44	19	—	—	—		SK073	G-5	89	81	121	—	—	72	
SK010	F-3	95	86	54	別記	71	70		SK074	G-5	66	56	90	別記	73	72	
SK012	F-2	151	126	29	第三群第2種黑底式土器(01)	71	—		SK075	F-5	70	69	88	別記	73	72	
SK013	F-3	26	23	24	—	—	—		SK076	E-3	65	54	59	—	—	—	
SK015	G-2	—	34	20	—	—	—		SK077	E-3	119	61	68	別記	75	74	
SK016	G-2	—	41	20	第三群第2種黒底式土器(01)	71	—		SK078	E-3	54	45	47	第三群第2種c類黒底式土器(01)	75	—	
SK017	G-2	35	31	25	—	—	—		SK079	G-5	95	84	108	別記	—	74	
SK018	G-3	74	73	15	第三群第2種c類黒底式土器(01)	71	—		SK080	G-5	87	72	48	別記	75	74	
SK019	G-3	38	35	18	—	—	—		SK082	G-5	80	70	50	—	—	74	
SK020	F-3	190	175	19	第三群第3種b類浮島1式新段階(01~04)	71	—		SK083	G-5	163	110	22	別記	—	74	
SK021	F-4	48	30	22	第三群第3種浮島式土器	—	—		SK084	G-5	88	74	75	別記	75	74	
SK022	F-4	47	96	26	第三種第3種b類浮島1式新段階(01)	71	—		SK086	F-5	71	69	86	—	—	74	
SK023	F-4	119	98	53	別記	71	70		SK089	F-5	—	65	34	—	—	—	
SK024	F-4	29	25	19	—	—	—		SK090	F-5	94	—	51	—	—	—	
SK025	G-3	92	92	14	—	—	柱穴の可能性		SK091	E-4	—	120	21	別記	75	74	
SK026	G-3	36	30	16	第三群第2種黒底式土器	—	—		SK092	E-4	31	30	40	第三群第4種c類浮島式土器	—	—	
SK027	H-3	30	23	38	第三群第2種黒底式土器	—	—		SK094	E-5	—	30	17	—	—	—	
SK028	H-3	53	50	28	別記	71	70		SK095	E-5	—	44	26	第三群第6種c類浮島式土器(01・02)	75	—	
SK029	H-3	92	77	19	—	—	70		SK096	F-5	39	24	39	—	—	柱穴の可能性	
SK030	G-4	46	43	40	第三群第3種b類浮島1式新段階(01)	71	—		SK097	E-4	33	22	62	—	—	—	
SK031	G-4	92	90	59	別記	71	70		SK098	E-4	73	58	32	—	—	—	
SK032	H-4	86	81	15	別記	71	70		SK099	E-4	82	51	27	別記	—	74	
SK033	H-4	90	81	29	—	—	—		SK100	E-5	95	84	25	不明	—	—	
SK034	H-4	50	49	28	—	—	—		SK101	E-5	52	49	35	—	—	—	
SK035	H-4	98	81	80	別記	71	70		SK102	E-5	—	77	32	第三群第種c類浮島式土器(01・02)	75	—	
SK036	H-4	110	97	30	別記	71	70		SK103	E-4	46	38	33	第三群第種c類浮島式土器(01)	75	—	
SK037	H-4	137	111	73	第三群第2種c類黒底式土器(01~04)・チャート剥片(05~07)	71	—		SK104	E-5	46	37	65	—	—	柱穴の可能性	
SK038	H-4	54	48	33	—	—	—		SK105	F-5	43	40	52	—	—	—	
SK039	G-4	130	124	33	別記	73	70		SK106	E-4	41	35	72	—	—	—	
SK040	G-4	42	37	34	—	—	—		SK107	E-4	30	22	30	—	—	—	
SK041	H-4	53	47	21	第三群第2種黒底式土器	—	—		SK108	E-4	38	32	20	—	—	—	
SK042	F-4	75	66	29	—	—	—		SK109	E-5	—	74	39	別記	75	74	
SK043	G-4	31	31	24	—	—	—		SK110	F-5	69	65	38	第三群第3種c類浮島2式土器(01・02)	—	—	
SK044	G-5	66	57	85	別記	73	70		SK111	F-5	65	59	52	—	—	—	
SK045	F-4	89	50	45	—	—	—		SK112	F-5	73	69	38	不明	—	—	
SK046	F-5	22	22	36	—	—	—		SK113	D-4	70	65	51	別記	75	74	
SK047	F-4	64	61	87	別記	73	70		SK114	D-4	55	54	34	—	—	—	
SK052	G-5	27	24	54	—	—	—		SK115	D-4	44	42	17	—	—	—	
SK053	F-4	122	121	32	別記	73	72		SK116	D-4	37	30	43	—	—	—	
SK054	F-4	243	189	37	別記	73	72		SK117	D-4	40	32	39	第三群第4種c類浮島式土器(01)	75	—	
SK055	G-5	23	23	44	—	—	—		SK118	D-4	62	45	32	—	—	—	
SK056	G-5	67	52	45	—	—	—		SK119	D-4	48	31	42	不明	—	—	
SK057	E-4	42	40	17	—	—	—		SK120	D-5	74	44	64	—	—	74	
SK058	E-4	65	58	25	別記	73	72		SK121	D-5	—	83	27	別記	75	74	
SK059	E-4	46	45	46	第三群第2種c類黒底式土器	—	—		SK122	F-5	70	68	56	別記	75	76	
SK060	E-4	98	90	23	別記	73	72		SK123	F-5	76	70	81	別記	77	76	
SK061	E-4	32	30	23	—	—	—		SK124	F-5	49	49	19	第三群第3種c類浮島式土器(01~03)	77	—	
SK062	E-4	67	64	27	第三群第2種c類浮島2式土器(01・02)	73	—		SK125	F-5	80	75	66	別記	—	76	
SK063	E-4	65	53	26	第三群第3種b類浮島1式土器新段階(01)・c類浮島2式土器(02~04)	73	—		SK126	F-5	68	49	26	第三群第3種c類浮島2式土器(01~13)	77	—	
SK064	E-4	55	45	33	第三群第3種c類浮島2式土器	—	—		SK127	E-5	97	80	25	別記	77	76	

表4 土坑計測一覧表(2)

追構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考	追構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考
SK134	E-5	55	51	39	第三群第種e類浮島式土器・第組部第1種五頭ケ台式土器	—	—		SK193	D-5	42	34	20	—	—	—	
SK135	E-5	47	32	29	第三群第種e類浮島式土器(01~08)・スクリーパー(09)	77	—		SK194	D-5	—	30	34	—	—	—	柱穴の可能性
SK136	E-5	47	40	21	第三群第5種b類諸頭b式土器	—	—		SK195	D-5	30	23	32	—	—	—	柱穴の可能性
SK137	E-5	40	30	16	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK196	E-5	—	25	34	—	—	—	
SK138	E-5	69	62	38	第三群第3種e類浮島式土器(01)	77	—		SK197	E-5	35	25	45	—	—	—	
SK139	E-5	125	89	27	別記	77	76		SK198	E-6	40	35	31	—	—	—	
SK140	E-6	75	58	24	—	—	76		SK199	E-6	38	25	26	—	—	—	
SK141	D-5	52	46	29	—	—	—		SK200	E-5	55	51	51	—	—	—	
SK142	D-5	39	32	29	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK201	E-5	52	47	22	—	—	—	
SK143	D-5	—	35	21	—	—	—		SK202	E-6	37	33	20	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—	
SK144	D-5	—	30	—	—	—	—		SK203	E-6	40	39	27	—	—	柱穴の可能性	
SK145	D-5	—	24	—	—	—	—		SK204	D-7	40	37	54	—	—	柱穴の可能性	
SK146	D-5	—	22	22	第一群第2種花輪右式土器(01)	77	—		SK205	D-7	—	29	14	—	—	—	
SK147	D-5	—	—	31	第三群第3種e類浮島式土器(01~04)	77	—		SK206	D-7	—	58	23	—	—	—	
SK148	D-5	—	—	20	第三群第3種e類浮島式土器(01)	77	—		SK207	D-7	—	48	13	—	—	—	
SK149	D-5	—	—	18	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK208	E-7	58	48	19	第三群第2種e類黒浜式土器(01)	79	—	
SK150	D-5	—	—	23	第三群第3種e類浮島式土器(01~04)	77	—		SK209	E-7	41	39	13	—	—	—	
SK151	D-5	77	70	23	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK210	E-7	55	54	18	—	—	—	
SK152	F-6	386	166	19	別記	77	76		SK211	E-7	86	—	23	—	—	78	
SK153	C-3	40	39	12	—	—	—		SK212	E-7	—	37	19	—	—	—	
SK154	D-6	57	47	10	—	—	—		SK213	E-7	—	46	17	不明	—	—	
SK155	D-6	55	46	9	—	—	—		SK214	E-7	—	78	28	—	—	—	
SK156	D-6	61	39	29	—	—	—		SK215	E-7	—	—	—	—	—	—	
SK157	D-6	38	35	19	第三群第2種e類黒浜式土器(01)	79	—		SK216	E-7	36	30	29	第四群第1種五頭左右式土器(01)	79	—	
SK158	D-6	84	69	17	—	—	—		SK217	E-7	51	38	18	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK159	D-6	41	31	22	—	—	—		SK218	E-7	—	—	—	—	—	—	
SK160	D-6	54	46	26	—	—	—		SK219	E-7	—	—	—	—	—	—	
SK161	D-6	71	64	18	別記	79	76		SK220	E-7	38	42	18	—	—	—	
SK162	D-6	—	63	19	別記	79	76		SK221	E-7	—	36	19	—	—	—	
SK163	D-6	53	40	80	—	—	76		SK222	E-7	42	36	19	—	—	—	
SK164	D-6	56	50	33	第三群第5種b類諸頭b式土器(01)	79	—		SK223	E-7	—	45	20	—	—	—	
SK165	D-6	62	46	16	—	—	—		SK224	E-7	—	38	24	—	—	—	
SK166	D-6	62	52	21	第三群第3種e類浮島式土器(01)・スルーハー(02)	79	—		SK225	E-7	—	54	16	—	—	—	
SK167	D-5	34	29	20	—	—	—		SK226	E-7	—	34	12	—	—	—	
SK168	D-5	36	36	18	—	—	—		SK227	E-7	35	22	11	不明	—	—	
SK169	D-5	31	29	34	—	—	—		SK228	E-7	51	43	19	—	—	—	
SK170	D-6	26	23	9	—	—	—		SK229	E-7	46	39	34	—	—	—	
SK171	D-5	86	55	17	—	—	—		SK230	E-6	44	43	39	—	—	—	
SK172	D-6	—	49	15	—	—	—		SK231	E-6	85	83	15	—	—	—	
SK173	D-6	36	29	26	—	—	—		SK232	E-6	56	44	40	—	—	—	
SK174	D-6	—	27	17	—	—	—		SK233	E-6	53	43	7	—	—	—	
SK175	D-5	35	32	21	—	—	—		SK234	E-6	—	74	42	—	—	—	
SK176	D-5	31	26	15	—	—	—		SK235	E-6	—	84	8	—	—	—	
SK177	D-6	32	23	39	—	—	—		SK236	E-6	74	55	26	—	—	—	
SK178	D-6	30	26	37	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	柱穴の可能性	SK237	E-6	46	32	60	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—	
SK179	D-6	47	46	27	—	—	—		SK238	E-6	54	49	22	—	—	—	
SK180	E-6	39	39	20	—	—	—		SK239	E-6	49	42	25	第三群第2種e類黒浜式土器	—	—	
SK181	E-6	—	48	21	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK240	E-6	64	58	19	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—	
SK182	E-6	44	38	16	—	—	—		SK241	E-6	—	51	46	18	第三群第3種e類浮島式土器	—	—
SK183	D-6	56	55	12	—	—	—		SK242	E-7	51	47	18	—	—	—	
SK184	D-6	59	55	13	—	—	—		SK243	E-7	—	58	47	15	—	—	
SK185	D-6	48	44	17	—	—	—		SK244	E-7	51	47	15	—	—	—	
SK186	D-7	112	84	39	別記	79	76		SK245	E-7	—	35	14	—	—	—	
SK187	E-6	37	35	6	—	—	—		SK246	E-7	—	54	19	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—	
SK188	E-6	278	177	39	別記	79	76		SK247	E-7	61	54	18	第三群第4種b類十三管提式土器	—	—	
SK189	E-6	58	39	38	—	—	—		SK248	E-7	82	58	24	別記	79	78	
SK190	E-6	34	24	33	—	—	—		SK249	E-7	—	83	23	別記	79	78	
SK191	E-6	33	28	35	—	—	—		SK250	E-7	45	38	18	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK192	E-6	42	40	37	—	—	—		SK251	E-7	—	58	17	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
									SK252	E-7	—	75	32	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
									SK253	E-7	—	71	25	第三群第3種e類浮島式土器(01~02)	79	—	
									SK254	E-7	70	67	16	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—	

表5 土坑計測一覧表(3)

遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考	遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考
SK255	E-7	48	47	25	—	—	—		SK316	F-6	46	34	30	—	—	—	
SK256	E-7	36	32	15	—	—	—		SK317	F-6	39	35	24	—	—	—	
SK257	E-7	88	75	19	第三群第2種e類馬浜式土器・第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK318	F-6	51	42	26	—	—	—	
SK258	E-7	—	—	40	—	—	—		SK320	E-6	150	130	51	別記	81	80	
SK259	E-7	—	76	15	—	—	—		SK321	E-6	92	82	14	別記	81	80	
SK260	E-7	—	80	24	第三群第3種e類浮島式土器(01・02)	79	—		SK323	F-7	57	52	23	—	—	—	
SK261	F-7	30	180	15	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK324	F-7	—	104	32	別記	81	78	
SK262	F-7	—	32	18	近・現代互	—	—		SK325	F-6	—	78	18	第三群第5種b類諸磯式土器(01)	81	—	
SK263	F-7	—	31	18	—	—	—		SK326	F-6	—	62	22	第三群第3種e類浮島式土器(01)	81	—	
SK264	F-7	—	101	13	—	—	—		SK327	F-6	—	56	20	第三群第3種e類浮島式土器(02)・第三群第5種b類諸磯式土器(01)	81	—	
SK265	F-7	—	45	23	—	—	—		SK328	F-6	77	75	30	別記	81	80	
SK266	F-7	—	41	20	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK329	F-6	—	88	32	園の3%	—	—	
SK267	F-7	—	41	19	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK330	F-6	51	27	25	第三群第2種e類黒浜式土器・第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK268	F-7	40	38	29	—	—	—		SK332	G-6	64	40	26	—	—	—	
SK269	F-7	25	25	45	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—		SK333	G-6	30	28	36	—	—	—	
SK270	F-7	25	17	32	—	—	—		SK334	F-6	35	26	28	—	—	—	
SK271	F-7	27	22	31	—	—	—		SK335	F-6	48	35	29	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK272	F-7	25	21	21	—	—	—		SK336	F-6	45	57	32	—	—	—	
SK273	F-7	79	59	53	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK337	F-6	106	103	72	別記	81	80	
SK274	F-7	59	47	42	—	—	—		SK339	F-6	—	151	23	別記	81	80	
SK275	F-7	65	51	48	—	—	柱穴の可能性		SK340	F-6	235	209	27	別記	81	80	
SK276	F-7	41	38	42	第三群第3種e類浮島式土器・第三群第5種b類諸磯式土器(01)	79	—		SK341	F-7	35	32	8	—	—	—	
SK278	F-7	40	33	36	第三群第3種e類浮島式土器(01)	79	—		SK342	F-7	—	35	10	—	—	—	
SK279	F-7	75	55	46	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK344	G-5	49	45	19	—	—	—	
SK280	F-7	37	33	31	第三群第5種b類諸磯式土器	—	—		SK345	E-7	—	128	47	別記	87	82	
SK281	F-7	—	52	26	第三群第2種e類馬浜式土器・第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK347	E-6	27	20	71	第三群第2種e類黒浜式土器(01)	87	—	柱穴の可能性
SK282	F-7	50	35	26	—	—	—		SK348	E-6	47	28	23	—	—	—	
SK283	F-7	100	55	30	—	—	—		SK349	E-6	40	34	15	—	—	—	
SK284	F-7	56	52	43	—	—	—		SK351	F-5	96	58	32	別記	87	82	
SK285	F-7	82	58	21	—	—	—		SK352	E-7	—	128	21	別記	—	82	
SK286	F-7	—	90	17	—	—	—		SK353	E-7	—	68	28	別記	87	82	
SK287	F-7	95	59	36	別記	—	78		SK354	D-7	28	23	36	—	—	柱穴の可能性	
SK288	F-6	78	61	38	—	—	78		SK355	E-7	56	40	37	—	—	—	
SK289	F-6	—	55	28	別記	79	78		SK364	E-5	75	65	27	別記	87	82	
SK290	F-6	96	70	28	別記	81	78		SK365	G-6	32	28	24	—	—	—	
SK291	F-6	—	84	38	—	—	78		SK366	G-6	38	36	32	—	—	—	
SK292	F-6	66	47	34	別記	—	78		SK367	G-6	40	39	66	—	—	—	
SK293	F-6	—	64	27	別記	81	78		SK368	E-7	43	38	22	—	—	—	
SK294	F-6	96	87	17	第三群第3種e類浮島式土器(01~03)	81	—		SK373	F-5	—	58	48	別記	87	82	
SK295	F-6	65	54	20	第三群第3種e類浮島式土器(01)	81	—		SK375	F-6	27	20	59	—	—	—	
SK296	F-6	47	45	130	第三群第3種e類浮島式土器(01)	81	—		SK376	F-6	—	40	31	—	—	—	
SK297	F-6	—	35	26	—	—	—		SK378	F-3	65	60	59	別記	87	82	
SK298	F-6	—	67	47	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK379	E-4	46	37	83	—	—	—	
SK299	F-6	—	78	85	別記	81	78		SK380	F-6	—	69	22	第三群第3種e類浮島式土器(01~03)	87	—	
SK300	F-6	93	64	52	—	—	78		SK381	F-6	51	45	33	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK301	F-6	86	—	101	別記	83	78		SK382	F-3	86	54	59	別記	87	82	
SK302	E-6	—	77	20	第三群第5種a類諸磯式土器(01)	81	—		SK383	F-3	94	83	56	別記	88	82	
SK303	E-6	—	117	96	別記	81	80		SK384	F-4	88	53	33	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK304	D-7	—	62	58	別記	83	80		SK385	F-4	117	81	18	第三群第3種e類浮島式土器(01)・第四群第1種五輪台合式土器(02)	88	—	
SK305	D-7	74	68	35	別記	81	80		SK386	F-4	48	33	33	—	—	—	
SK306	E-6	102	88	53	—	—	80	柱穴の可能性	SK387	E-2	181	158	38	第三群第2種e類黒浜式土器(01・02)	88	—	
SK307	E-6	36	34	43	—	—	—	柱穴の可能性	SK388	E-2	—	146	13	—	—	—	
SK308	F-7	—	59	46	第三群第3種e類浮島式土器(01)	81	—		SK389	E-2	124	112	51	—	—	—	
SK310	F-7	38	29	44	—	—	—		SK390	E-6	61	54	28	—	—	—	
SK311	E-6	—	43	21	—	—	—		SK391	E-6	49	48	25	—	—	—	
SK312	F-6	87	79	20	別記	—	80		SK392	E-6	—	28	33	—	—	—	
SK313	F-6	75	74	45	第三群第3種e類浮島式土器	—	—		SK393	F-6	51	27	31	—	—	—	

表6 土坑計測一覧表(4)

遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考
SK402	F-5	52	40	27	第三群第2種e類黒浜式土器・第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK403	F-5	46	33	32	—	—	—	
SK404	F-6	43	37	42	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK405	D-7	80	42	47	別記	88	80	
SK406	E-6	110	64	38	—	—	88	
SK407	D-5	41	40	41	—	—	—	
SK410	F-6	—	31	22	—	—	—	
SK413	D-6	35	32	36	—	—	—	
SK414	D-6	30	20	32	—	—	—	
SK415	D-6	42	41	27	—	—	—	
SK416	C-3	56	33	36	—	—	—	
SK417	D-6	16	36	25	—	—	—	
SK421	D-6	33	27	28	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK422	D-6	43	41	32	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK423	D-6	34	22	21	—	—	—	
SK425	D-6	55	43	30	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK426	D-6	—	48	27	—	—	—	
SK427	D-6	52	51	26	—	—	—	
SK428	D-6	45	40	25	—	—	—	
SK429	D-6	52	41	23	—	—	柱穴の可能性	
SK430	D-6	26	24	25	—	—	—	
SK431	D-6	41	25	44	—	—	—	
SK432	E-6	32	23	23	—	—	—	
SK439	E-4	47	45	31	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK440	E-6	35	32	19	—	—	—	
SK441	E-6	38	30	38	—	—	—	
SK442	E-6	38	30	23	—	—	—	
SK443	E-6	45	40	21	—	—	—	
SK444	E-6	48	41	25	—	—	—	
SK445	—	—	117	—	—	—	—	
SK446	F-7	—	30	20	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK447	F-7	24	17	22	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK448	F-7	35	15	24	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK449	F-7	25	24	14	—	—	—	
SK451	F-7	24	21	29	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK452	F-7	26	24	39	—	—	—	
SK453	D-6	40	38	14	—	—	—	
SK454	E-6	53	50	27	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK455	D-6	136	—	28	—	—	88	
SK457	D-6	39	31	18	—	—	—	
SK458	D-6	41	37	28	—	—	—	
SK459	D-6	—	47	44	—	—	柱穴の可能性	
SK460	D-6	33	27	37	—	—	柱穴の可能性	
SK463	F-6	—	74	84	—	—	—	
SK464	D-4	49	47	30	—	—	—	
SK465	D-4	46	40	45	—	—	—	
SK466	D-4	54	52	22	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK467	D-4	—	—	15	—	—	—	
SK468	E-4	—	—	18	第三群第3種e類浮島式土器	—	—	
SK470	F-5	95	90	47	別記	—	88	
SK471	F-5	—	108	8	第三群第3種e類浮島式土器(01)	88	—	
SK472	E-7	—	73	28	—	—	—	
SK474	E-7	41	40	39	—	—	—	
SK475	E-7	—	64	22	—	—	—	
SK476	E-7	—	37	12	—	—	—	
SK477	E-7	63	42	18	—	—	—	
SK501	A-0	—	71	10	—	—	—	
SK502	A-0	—	81	20	—	—	—	
SK503	A-0	88	84	41	別記	—	—	
SK504	A-0	48	45	19	第三群第2種e類黒浜式土器(01)	88	—	
SK505	A-0	55	54	15	—	—	—	
SK506	A-0	—	—	11	—	—	—	

遺構番号	グリッド	長軸	短軸	深度	遺物	遺物掲載図版	遺構掲載図版	備考
SK506	A-0	—	—	11	—	—	—	
SK508	A-1	44	43	64	第三群第3種e類浮島式土器(01)	88	—	柱穴の可能性
SK509	A-0	42	41	31	—	—	—	
SK510	A-1	61	48	32	第三群第2種e類黒浜式土器(01・02)	88	—	柱穴の可能性
SK511	A-1	41	38	23	第三群第2種e類黒浜式土器・第三群第5種a類諸窓a式(01)	88	—	
SK512	A-1	—	29	23	—	—	—	

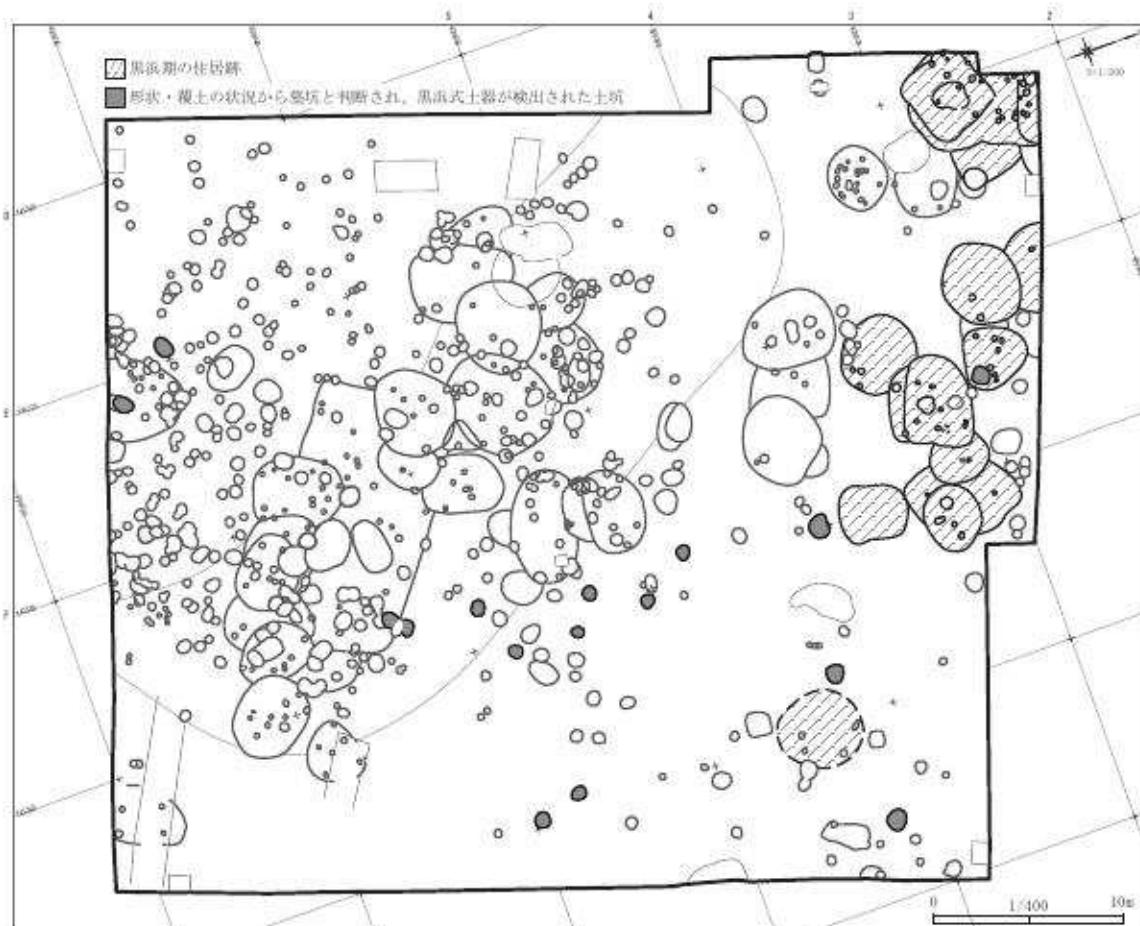
第6章 まとめ

本遺跡において検出された遺構は、住居 51 軒、土坑・ピット 448 基である。遺物は縄文時代前期前半の黒浜期から前期後半の浮島・諸磯期のものを主体に、縄文時代草創期から古墳時代前期に至るまでが検出されている。

出土した遺物の詳細な分類については、第5章第1・2・3節を参照されたいが、遺構ごとに遺物の時期をみると、黒浜式期の集落とそれに伴う墓坑群が検出された。住居跡から検出された遺物の内容をみると、東区北側よりでは、主に縄文時代前期前半の黒浜式土器が検出され、中ほどから南側よりの住居跡からは、主に前期後半の浮島・諸磯式土器が検出された。西区では削平が激しかったため、覆土がほとんど残存しておらず、方形の住居に伴うと判断できる遺物は検出されなかった。黒浜期の遺物が検出された住居跡には炉が確認されたものが 6 軒あり、うち 2 軒では炉に炉石が置かれている。炉の上に片岩をほぼ水平に置いたもので、平底の土器を置いて煮炊きをした施設であると思われる。

遺構のなかで特異なものは SI39 である。南側を削平された方形の住居跡と推測されるもので、東西約 14 メートルを測る大型のものである。他の住居跡との重複が複雑であり、削平もあって全容を窺い知ることはできなかつた。

黒浜式期の住居跡群は調査区の北西側端部において検出され、墓坑群は住居跡群を南東側に離れた、やや高い位置に集中を見せていている。墓坑と想定される土坑は直径 80 センチ程度の円形ないし楕円形で、底部は鍋底状・U 字状の形状を呈する。さらに覆土の状況はロームブロックを多く含む人為的な堆積を示すものが多く、レン



第92図 黒浜期の住居と墓坑の分布

ズ状の堆積状況のものもあるが、やはりロームブロックを多く含む。群を成す墓坑からやや離れた位置にあるSK400では块状耳飾1点、滑石製管玉4点、琥珀製丸玉4点が環状の配列を呈して土坑の底部から黒浜式土器とともに出土している。住居区域と墓坑の区域が明瞭に区分けされて検出されたことは、管見に触れる遺跡においても類例に乏しく、今回の調査における大きな成果と言える。SK186についても、SK400と近接し、規模・形態から墓坑である可能性がある。また、これに伴う大木2a式期に関わる縄長の石庭は東北地域との結びつきを想定させる貴重な資料である。

一方で、浮島式土器と諸磯式土器が共伴することを示す優良な遺跡でもある。浮島式と諸磯式の編年関係は多くの論考で語られているが、良好な諸磯a式土器が浮島式と黒浜式の混在する遺跡から発見されたことには意味がある。十分な分析を行えなかつたものの、出土した点は見過ごせない。主体となる時期以前の遺物では花輪台式土器が、縄文時代以降の遺物では、遺構外出土ではあるが、底部に布目痕を持つ弥生時代後期の土器と、古墳時代前期の土師器が確認された。同様の遺物の出土例は昭和56年度調査でも確認されている。本遺跡では弥生・古墳時代の遺構は確認されなかつたが、前回の調査では弥生時代の住居跡が3軒、古墳時代の住居跡が2軒が検出された。おおまかではあるが、縄文時代の遺構は今回の調査区である舌状台地の基部から前回の調査区である台地の先端部まで分布し、弥生・古墳時代の遺構は台地の先端部に分布するという傾向が導き出せる。

本遺跡から検出された遺物の中で特筆すべきはSK400から出土した副葬品とみられる装身具である。同土坑からは黒浜式土器が検出され、装身具と土坑の時期が判断できる。県下では時期決定が可能な9点にもおよぶ複数種類の装身具の出土例はない。今後の該期の研究においての指標となる遺物であると想定される。これについては、稿を改めて論及したいと考えている。

【参考引用文献】

- ・相京和茂 2007 「縄文時代におけるコハクの流通（上）」『考古學雑誌』91巻2号 日本考古學會
- ・相京和茂 2007 「縄文時代におけるコハクの流通（下）」『考古學雑誌』91巻3号 日本考古學會
- ・青木義男 1982 『兵崎遺跡・大谷津A遺跡・対馬塚遺跡・大谷津B遺跡・大谷津C遺跡・外山遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告13 茨城県教育財團
- ・石岡市史編纂委員会 1979『石岡市史』上巻 石岡市
- ・石岡市史編纂委員会 1983『石岡市史』中巻 石岡市
- ・石岡市史編纂委員会 1985『石岡市史』下巻 石岡市
- ・石岡市遺跡分布調査会 2001『石岡市遺跡分布調査報告書』石岡市教育委員会
- ・茨城県立歴史館史料部 2006『茨城県立歴史館史料叢書』9 茨城の縄文土器 茨城県立歴史館
- ・大賀健 1999『秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉遺跡』江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会・山武考古学研究所
- ・川崎純徳・海老沢稔 1981『大作台遺跡発掘調査報告』石岡市教育委員会
- ・倉本富美男 1983『新池台遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書17 茨城県教育財團
- ・小林達雄 2008『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
- ・斎藤弘道 1991『茨城県の縄文土器』埋蔵文化財部研修会資料
- ・鈴木徳雄 1996「諸磯b式の変化と型式間交渉—文様変化の継起的累積性と型式間関係の諸相一」『縄文時代』7 縄文時代文化研究会
- ・閔肇 1988「石岡市」『歴史地名大系』8 茨城県 平凡社
- ・豊田麻衣・池田宏 2003「霞ヶ浦湖岸平野の形成過程」『筑波大学陸域環境研究センター報告』4 筑波大学陸域環境研究センター
- ・西村正衛 1966「茨城県稻敷郡浮島貝ヶ窪貝塚—東部関東における縄文前期後半の文化研究、その一」『学術研究』15 早稲田大学教育会
- ・西村正衛 1967「茨城県稻敷郡興津貝塚（第一次調査）—東部関東における縄文前期後半の文化研究、その二」『学術研究』17 早稲田大学教育会
- ・日本地誌研究所 1979『日本地誌』5 関東地方総論・茨城県・栃木県 二宮書店
- ・松田光太郎 1992「浮島式土器の成立について—東関東に縄文時代前期後半の土器文様の伝統—」『古代』93 早稲田大学考古学会

